山形県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

富山2遺跡

発掘調査報告書

1996

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

富山（とやま）2遺跡

発掘調査報告書

平成8年9月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

富山2遺跡調査区空中写真（手前が南）

ST38住居跡出土原始灰釉陶器（第7図9）

赤色顔料付着土器（左第11図2、右上第6図16、右下第11図5）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査をした、富山２遺跡の調査成果をまとめたものです。

富山２遺跡は山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は西に朝日、月山、葉山を望むことができ、南・東・北を山形県の母なる川最上川と、寒河江川の両河川に囲まれた地で、「サクランボの里」として有名です。

この度東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事に伴い、工事に先立って富山２遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良～平安時代の竪穴住居跡８棟と、土坑や畝跡などが見つかりました。遺物では愛知県猿投窯で焼かれた須恵器をはじめ、赤焼土器、土師器、櫛、金属製品などが出土しました。遺跡自体がたびたび土砂崩れに遭う谷間にあることや、出土した遺物の内容を考えると山間の特色ある遺跡といえます。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓蒙・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成８年９月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　木　場　清　耕

例　言

1　本書は東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事に係る「富山２遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は日本道路公団仙台建設局山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名　富山２遺跡（ＣＳＧＴＹ２）　遺跡番号　平成７年度登録

所 在 地　山形県寒河江市大字谷沢字富山

調査期間　発掘調査　平成７年７月１０日～平成８年３月３１日

現地調査　平成７年７月１７日～平成７年８月１２日

資料整理　平成８年４月　１日～平成８年９月３０日

発掘調査・資料整理担当者（役職名は平成８年４月１日現在）

調査第一課長　佐藤　庄一

主任調査研究員　阿部　明彦

調査研究員　鈴木　良仁

嘱託職員　須賀井明子・松田亜紀子

4　発掘調査および本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所、寒河江市教育委員会、西川町教育委員会等関係機関から協力をいただいた。また、現地調査にあたって、遺跡周辺の地形について阿子島功氏（山形大学）から、出土土器については柴垣勇夫氏（愛知県陶磁資料館）、浅田員由氏（愛知県陶磁資料館）、尾野善裕氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は鈴木良仁、須賀井明子が担当した。編集は尾形與典、水戸弘美が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

現地調査における平面図等の作成の一部については、アジア航測株式会社に委託した。

7　出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＴ…竪穴住居跡　ＳＫ…土坑　ＳＰ…単独のピット

ＳＤ…溝跡　ＳＸ…性格不明遺構

ＥＫ…遺構内の土坑　ＥＰ…遺構内の柱穴　ＥＬ…炉または竈跡

ＲＭ…金属製品　ＲＰ…一括・登録土器　ＲＮ…自然遺物

ＲＷ…木製品、木柱

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記の通りである。

（１）遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（２）グリッドの南北軸はＮ―52°―Ｅを測る。

（３）遺構実測図は1/40・1/100・1/200・1/300縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。遺物図版については任意の縮尺とした。

（４）遺構実測図のスクリーントーンは、焼土・焼礫・炭化物・礫・崩落土を示す。

（５）遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/6で採録し、各々スケールを付した。

（６）遺物実測図中のスクリーントーンは黒色処理（ただし第７図９は原始灰釉陶器を示す）を、黒ベタは須恵器を示す。

（７）土器拓影図で、外側部分は左側、内側部分は右側に表示している。

（８）遺物図版中の番号は、挿図番号を示している。

（９）遺物観察表中の（　　）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

(10) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の概要
　1　自然的環境 …… 3
　2　周辺の遺跡 …… 3
Ⅲ　遺構と遺物
　1　竪穴住居跡 …… 7
　2　土坑 …… 11
　3　そのほかの遺構 …… 29
　4　グリッド出土の遺物 …… 30
Ⅳ　調査のまとめ
　1　遺跡の立地と遺構について …… 40
　2　遺物と遺構の時期について …… 40
　3　遺跡の性格について …… 43
報告書抄録 …… 46

挿　図

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡概要図 …… 4
第３図　遺構配置図・基本層序 …… 5～6
第４図　ＳＴ37～40・43住居跡(1) …… 13～14
第５図　ＳＴ37～40・43住居跡(2) …… 15～16
第６図　ＳＴ37・38出土遺物実測図 …… 17
第７図　ＳＴ38・39出土遺物実測図 …… 18
第８図　ＳＴ39・43出土遺物実測図 …… 19
第９図　ＳＴ43・40出土遺物実測図 …… 20
第10図　ＳＴ40出土遺物実測図 …… 21
第11図　ＳＴ40・10・12出土遺物実測図 …… 22
第12図　ＳＴ12出土遺物実測図(1) …… 23
第13図　ＳＴ12出土遺物実測図(2) …… 24
第14図　ＳＴ10・12住居跡　ＳＫ９・11土坑 …… 25～26

第15図　ＳＴ61・ＳＸ20・ＳＫ９出土遺物実測図 …… 27
第16図　ＳＫ４・５・14・29・30土坑 …… 28
第17図　畝跡・ＳＤ１溝跡 …… 31
第18図　ＳＫ５・18・25・26・36ＳＸ３・畝跡Ｂ・グリッド出土遺物実測図 …… 32
第19図　グリッド出土遺物実測図 …… 33
第20図　土器分類図 …… 45

表

表―１　竪穴住居跡観察表 …… 12
表―２　遺構計測表 …… 34
表―３　遺物観察表(1) …… 35
表―４　遺物観察表(2) …… 36
表―５　遺物観察表(3) …… 37
表―６　遺物観察表(4) …… 38
表―７　遺物観察表(5) …… 39
表―８　土器分類表(1) …… 41
表―９　土器分類表(2) …… 42
表―10　各遺構土器組成表 …… 43

図　　版

図版１　遺跡近景・調査風景
図版２　遺跡遠景・近景（航空写真）
図版３　基本層序・遺構確認状況
図版４　遺構写真(1)
図版５　遺構写真(2)
図版６　遺構写真(3)
図版７　遺構写真(4)
図版８　遺構写真(5)
図版９　遺構写真(6)
図版10　遺構写真(7)
図版11　遺構写真(8)
図版12　遺構写真(9)
図版13　遺構写真(10)
図版14　出土遺物(1)
図版15　出土遺物(2)
図版16　出土遺物(3)
図版17　出土遺物(4)
図版18　出土遺物(5)
図版19　出土遺物(6)
図版20　出土遺物(7)
図版21　出土遺物(8)
図版22　出土遺物(9)
図版23　出土遺物(10)
図版24　出土遺物(11)

Ⅰ　調査の経緯

1、調査に至る経過

今回の富山２遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事にともなって行われたものである。富山２遺跡は従来知られていなかった遺跡であるが、平成７年５月から財団法人山形県埋蔵文化財センターが調査を行った富山遺跡の発掘調査中に新たに発見され、平成７年度の財団法人山形県埋蔵文化財センターの新規事業として調査されることになったものである。

遺跡の発見の始まりは、富山遺跡北西の丘陵谷間の平坦地から、かつて土器が出土したとの情報が６月の初旬に地元の方から富山遺跡の現地調査事務所に寄せられたことによる。富山遺跡の調査員が現地を確認したところ須恵器や赤焼土器が出土することを確認し、すぐに山形県教育庁文化財課に連絡をした。その後、６月13日から６月15日に県文化財課による遺跡詳細分布調査が行われ、遺構や包含層が確認されたため正式に富山２遺跡として新規に登録さた。しかし、遺跡の範囲が東北横断自動車道酒田線の建設用地内であるため、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所、山形県教育庁文化財課、財団法人山形県埋蔵文化財センターの関係機関で遺跡の取り扱いについて協議された結果、記録保存を行うこととなり、平成７年７月17日から平成７年８月12日まで緊急発掘調査が行われることになったものである。

2、調査の方法と経過

今回の調査はA区とB区合わせて1,300㎡を対象として行った（第２図）。現地調査は上記の経過をふまえて、７月17日に現地で鍬入れ式を行い調査を開始した。B区は県文化財課による詳細分布調査によって表土が除去され、遺構が検出された状態になっていたので、A区の表土の除去から開始した。表土の除去はバックホーとキャリヤーを用いて行った。表土除去が終わったところから４メートル四方のグリッドを設定した。グリッド軸はY軸方向をアルファベット、X軸方向をアラビア数字として、Y軸とX軸の交点から東へ広がる象限をX軸とY軸を組み合わせて呼称した。その後は人力による面整理を行いながら遺構の検出につとめた。検出した遺構から順次台帳に登録し、竪穴住居などの大型の遺構には土層観察用のベルトを残して掘り下げ、小型の遺構は半裁して掘り下げ、土層断面図や土層注記が済んだものから取り外し、必要に応じて写真記録を行った。現地調査は８月12日で終了している。遺物分布図や1/100の遺構配置図は手取りで行い、1/40の遺構実測図と最終的な遺構配置図は委託実測を行った。遺物の取り上げは、遺構内出土の遺物は出来るだけ出土地点の記録を行い一括遺物の把握につとめた。遺構外出土遺物に関しては、完形遺物や重要と思われる遺物について出土地点の記録を行った。遺物の取り上げ層位は、遺構内出土遺物については覆土の上面から順次掘り下げていき、便宜的に上からＦ１・Ｆ２・Ｆ３というふうに取り上げ、床面出土遺物に関しては「Y」で取り上げた。遺構外出土遺物は、遺跡が地滑りや崩壊によってたびたび土砂の堆積があったために層位的に取り上げることが出来なかったので、出土地点（グリッド・遺構）を記録するにとどまった。

1　富山２遺跡(奈良～平安)
2　富山遺跡(旧石器)
3　平野山古窯跡群(縄文・奈良・平安)
4　高松Ⅲ遺跡(平安)
5　高松Ⅱ遺跡(縄文・奈良～平安・中世)
6　落衣長者屋敷遺跡(奈良～平安・中世)
7　高瀬山遺跡群(旧石器～中世)
8　三条遺跡(縄文・古墳・平安)
9　石田遺跡(縄文・弥生)
10　寒河江城跡(室町)
11　平塩経塚(鎌倉～室町)
12　明神山遺跡(旧石器)
13　うぐいす沢遺跡(縄文)
14　柴橋遺跡(縄文)
15　高松Ⅰ遺跡(縄文・平安)
16　山岸遺跡(縄文)
17　向原遺跡(縄文)
18　金谷原遺跡(旧石器)
19　高松Ⅳ遺跡(平安)
20　柴橋窯跡(平安)
21　柴橋蛇塚遺跡(縄文)
22　石持原遺跡(縄文)
23　左沢城跡(南北朝～元和)
24　中谷沢遺跡(縄文)
25　躑躅山遺跡(縄文)
26　上谷沢遺跡(縄文)
27　富沢Ⅰ遺跡(縄文)
28　富沢Ⅱ遺跡(縄文)
29　西覚寺遺跡(旧石器)
30　日和田遺跡(縄文)
31　白岩館跡(中世～近世)
32　木ノ沢楯跡(平安・中世)

第１図　遺跡位置図(１：50,000)

II　遺跡の概要

1、自然的環境

富山２遺跡がある寒河江市は東に奥羽山脈、西に月山や朝日連峰、北に葉山、南に蔵王を望むことの出来る自然景観豊かな地である。この地には、古くには旧石器時代から中世まで各時代にわたる数多くの遺跡が立地している。

富山２遺跡は標高約160～174mの谷間の小さな平坦地に立地し、調査区の東側には夏でも枯れることのない小さな泉が沢となって流れている。付近の基盤は凝灰岩と考えられ、風化した凝灰岩粒が覆土に混じったり、凝灰岩の転石が調査区内に見られた。また、地形と遺跡の関係に関して山形大学人文学部阿子島功教授から次のようなご教示を得ている。

「発掘範囲は、富山遺跡のへ延びる尾根（高度220～170m）の鞍部（高度175～170m）およびその西側の谷底斜面（高度約165m）である。

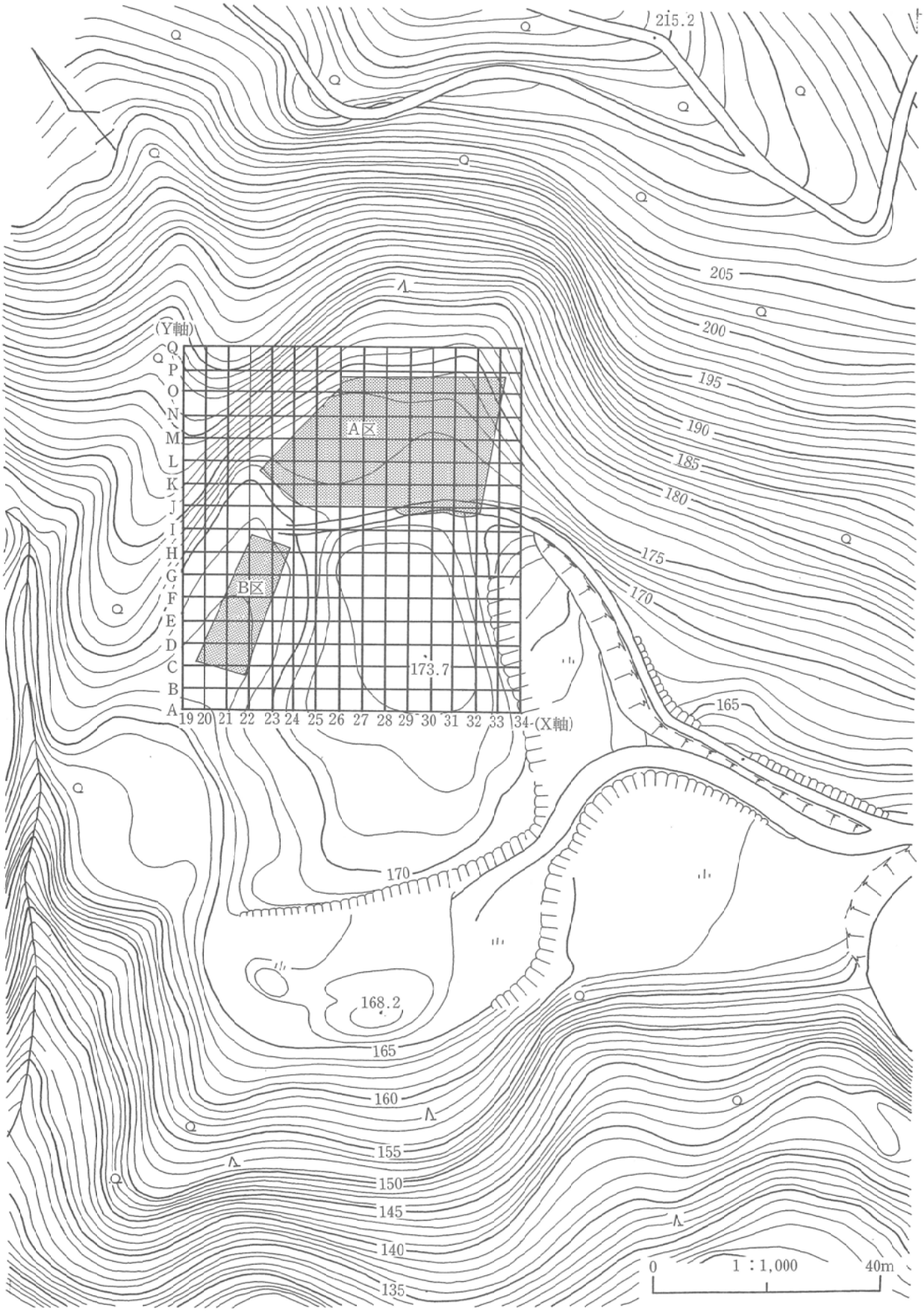
地形の概形は、古い地滑りの滑落斜面（発掘区の北側、幅50m・奥行き70m）、崩積斜面（発掘区およびA区南西の尾根）のように見える。この地滑りの跡地に、奈良・平安時代の住居が営まれた。住居はいくたびか建て替えられているが、その間にも２次的に背後の斜面が小さな地滑りや崩壊を生じて、黒土や風化した凝灰岩の岩屑が流下した。発掘区北壁に見える黒土と風化凝灰岩の互層がこのことを示している。発掘区の東西両側に小沢があり、黒土の堆積も多い。

1200～1300年間の崩積層の堆積の厚さは、発掘区（北側）上部で1.5m、A区中央部の住居跡の所で約１m、西側谷沿いで約1.5m（上部）から１m（下部）になる。」

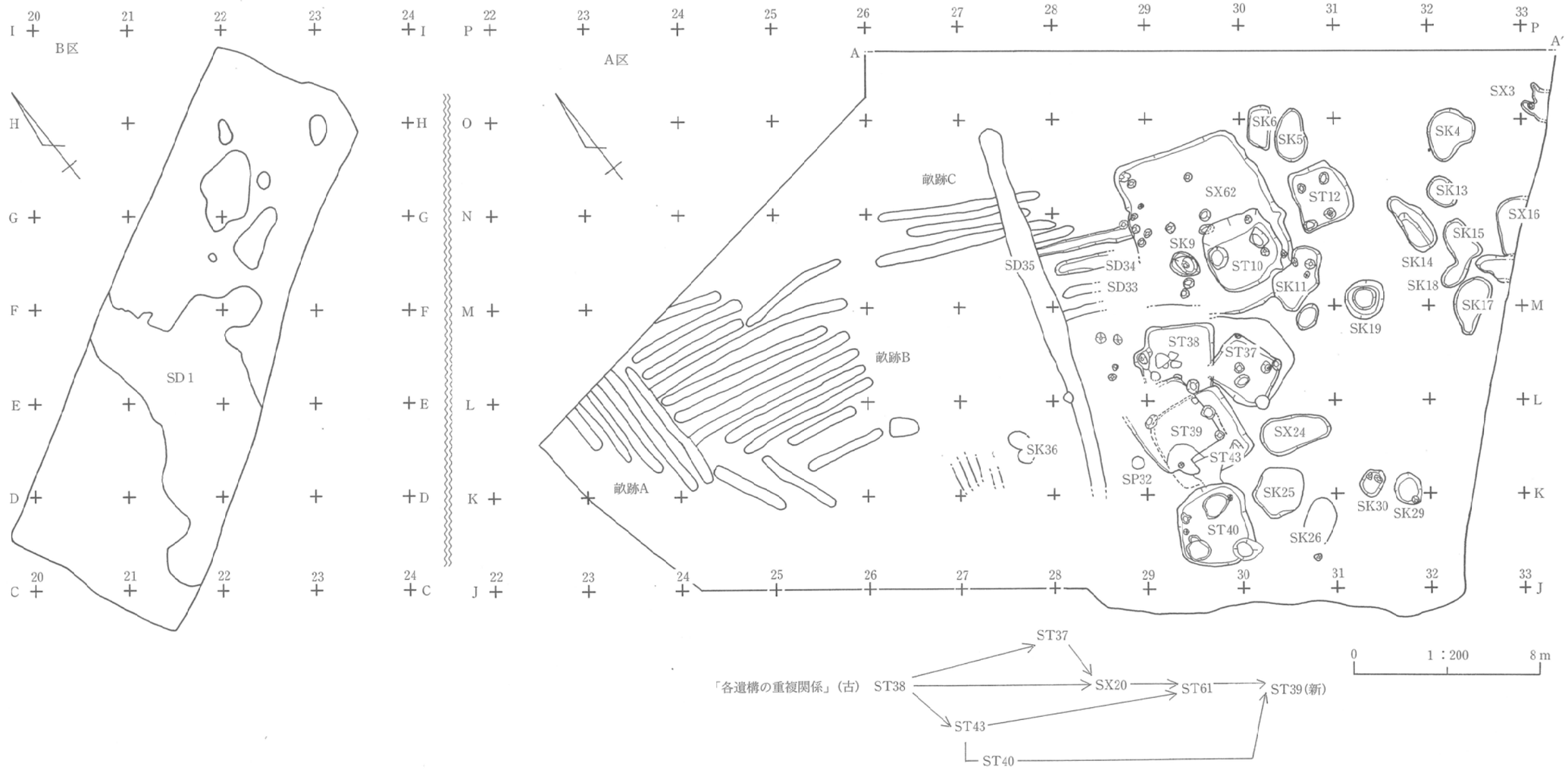
2、周辺の遺跡

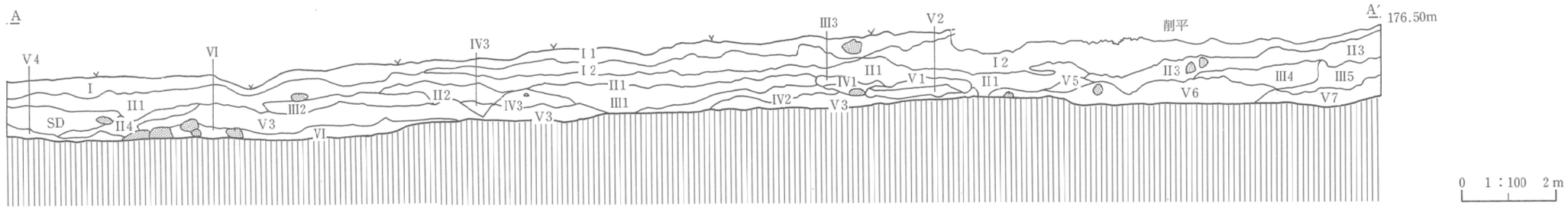
富山２遺跡の立地する寒河江市は、当初陸奥の国に属していたが、古代出羽国が和銅５年（712年）に建置されて以来、最上郡に属し、仁和２年（886年）以降は村山郡に属するようになった。村山郡は大山、長岡、村山、大倉、梁田、徳有の六郷からなっていた。このように寒河江市周辺は早くから律令体制に組み込まれていった。それを裏付けるように地方官衙と密接な関係にある須恵器窯（平野山古窯跡群）や、条里遺構と考えられる条や坪という地名が見られる。特に高瀬山周辺は古代の遺跡が密集しており、長岡郷の中心地と考えられる所である。

富山２遺跡の南東約200mの尾根上には、富山２遺跡発見のきっかけとなった旧石器時代の富山遺跡が立地し、沢を隔てた対岸には中世の左沢城跡があり、調査区からも曲輪が観察できる。周辺には、奈良時代から平安時代にかけて営まれた平野山古窯跡群が尾根を一つ隔てた平野山の東南斜面に位置しており、直線で約１kmから２kmの範囲である。また、直線で1.2km南東の尾根筋には木ノ沢楯跡があり、平安時代の竪穴住居跡が確認されており、時期的にも富山２遺跡と併行か近接した時期と考えられる。一般に奈良時代から平安時代の遺跡は、高瀬山周辺の遺跡の立地から明らかなように、沖積地の微高地や河岸段丘上に立地する事が多いが、富山２遺跡や木ノ沢楯跡のように山間地に立地することは希で、平野部の微高地や河岸段丘上に立地する遺跡と性格の違いを窺わせる。


215.2
205
200
195
190
185
180
175
170
165
(Y軸)
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
A区
B区
173.7
19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34-(X軸)
170
168.2
165
160
155
150
145
140
135
0
1：1,000
40m

第２図　遺跡跡概要図





基本層序

Ⅰ-1	10YR2/2	黒褐色シルト　小礫多く含む。植物細根多い。表土層。
Ⅰ-2	10YR2/2	黒褐色シルト　Ⅰ－1層と似るが、植物細根少ない。旧表土層
Ⅱ-1	10YR3/3	暗褐色シルト　黒色シルトが部分的に入り、風化礫粒を含む。
Ⅱ-2	10YR4/4	褐色シルト　暗褐色シルトを斑状に含み、凝灰岩粒を含む。
Ⅱ-3	10YR2/2	黒褐色シルト　暗オリーブ褐色シルトを斑状に含み、赤色風化凝灰岩粒を大量に含み、炭化粒も少々含む。
SD	N 1.5/0	黒色シルト　炭化物を含む。層上部は少々茶色味が強い。
Ⅱ-4	10YR3/3	暗褐色シルト　黒色粘質シルトを斑状に含み、炭化粒を少々と風化礫粒を含む。
Ⅲ-1	10YR2/3	黒褐色粘質シルト　褐色砂を縞状に含む。炭化粒・礫・凝灰岩粒を含む。
Ⅲ-2	10YR2/3	黒褐色シルト　黒色シルトが斑状に入り、風化礫粒を含む。
Ⅲ-3	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト質砂　パミス？
Ⅲ-4	10YR3/2	黒褐色粘質シルト　黄褐色粘質砂・黒色粘質シルトを斑状に含み、赤色風化凝灰岩・灰白色凝灰岩を多量に含む。
Ⅲ-5	10YR5/2	灰黄褐色砂質シルト　赤色風化凝灰岩粒を多量に含む。
Ⅳ-1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト質砂　黒色シルト質砂を斑状に含み、凝灰岩粒を含む。
Ⅳ-2	10YR2/3	黒褐色砂質シルト　黒色砂質シルトと褐色砂を斑状に含む。凝灰岩礫含む。
Ⅳ-3	2.5Y2/1	黒色粘質シルト　暗褐色シルト質砂を斑状に含み、須恵器片と凝灰岩含む。
Ⅴ-1	10YR4/4	褐色シルト質粗砂　炭化粒・3～4cmの凝灰岩を大量に、10～12cmの凝灰岩を少々含む。
Ⅴ-2	10YR2/3	黒褐色粗砂混じりシルト　黒褐色シルトとにぶい黄色砂質シルトを斑状に含む。凝灰岩混。
Ⅴ-3	10YR5/8	黄褐色粗砂　風化凝灰岩・にぶい黄橙色シルト質砂を両端に含み、暗褐色粗砂を薄く縞状に含む。凝灰岩小礫混じり。
Ⅴ-4	10YR4/6	褐色砂　黒色粘質シルトを斑状に含み、炭化粒少々含む。風化礫粒混。
Ⅴ-5	10YR4/4	褐色砂　黒褐色シルト・にぶい黄褐色砂質シルトを斑状に含む。凝灰岩含む。
Ⅴ-6	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト質砂　炭化粒・3～4cmの凝灰岩を大量に、10～12cmの凝灰岩を少々含む。
Ⅴ-7	10YR7/3	にぶい黄橙色シルト質粘土　にぶい黄橙色細砂をブロック状に含む。赤色風化凝灰岩礫も大量に含んでいる。
Ⅵ	10YR4/2	灰黄褐色シルト質砂　黒褐色粘質シルトを縞状に含み、明黄褐色シルト質砂を斑状に含み、凝灰岩を含む。

凡例

礫

第3図　遺構配置図・基本層序

Ⅲ　遺構と遺物

遺構は比較的平坦なA区に密集しており、A区の西側には畝跡、東側には竪穴住居跡を中心に多くの遺構が見つかった。ちょうど竪穴住居が営まれたところはA区の中でも緩やかな谷底の部分で、平坦な場所を選地し続けたためにほとんどの住居が重複したと思われる。B区は沢跡と考えられる自然遺構１条が見つかった。A・B区に凝灰岩の転石があり、竪穴住居跡の側まで転がっているものもあり、たびたび転石があっとことが窺える。

１、竪穴住居跡

今回の調査では８棟の竪穴住居跡が確認された。個別の竪穴住居跡の詳しい観察は12ページの表―１にまとめてあるので、ここでは簡単な発掘所見と、それぞれの竪穴住居跡から出土した遺物について述べる。

ST37（遺構・第４～５図　遺物・第６図）

平面形は東西2.37m、南北2.7mのほぼ長方形をなし、床面はやや起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。カマドは南壁西寄りに１基認められたが、遺存状態は不良であった。床面から偏平な河原石が２個出土したが、被熱の痕跡や擦り痕は特に認められなかった。ST38の壁の一部を掘り込んでいることから、ST38より新しい。遺物の出土は多くはなかったが、EP44の周辺や北東の隅に偏る傾向が認められた。

須恵器坏（第６図１、２）のうち、２は焼成が不良で赤褐色を呈している。３は須恵器小型壺の下半分と考えられ、焼成が良好であり、体部と高台の接合部分にケズリを施す。須恵器蓋（同図４～６）のうち４はEP44覆土からの出土で、内面を硯に転用している。７は土師器甕の底部で外面はケズリ、内面はナデ調整を行っている。赤焼土器甕（同図８～11）のうち11はEL42からの出土である。12は外面にタタキ痕、内面にアテ痕がある須恵器甕で、第15図８（SX20出土）と同一個体と考えられる。

ST38（遺構・第４～５図　遺物・第６～７図）

平面形は東西2.89m、南北は約３m前後と考えられ、壁の立ち上がりは上部は緩やかで下部はほぼ垂直である。床面はほぼ平坦である。床面直上から多量の炭化層（第４図）と、炭化材（第５図）が検出されたことから焼失家屋と考えられる。EP49は炭化層の下から検出された。その形状からロクロピットと考えられる。住居中央部に位置することが多いが、本例は住居の壁の中央にある。切り合い関係は、ST38の上にSX20が堆積し、ST38・SX20をST61が切っている。遺物は、層的には床面や覆土の下部から多くの遺物が出土し、面的には北壁と東壁の際に集中して出土した。炭化層（第４図38-6）より下から出土した遺物（取り上げ層位はF４・F５・Y）は遺棄時における一括遺物と考えられる。

須恵器坏（第６図13～16）のうち13・14は底部が回転ヘラ切りである。15は回転糸切りで底径の割に器高が低く皿状をなす。同一個体がST12床面からも出土しているが、住居の南東部がST39・ST43と切り合っているためにST38から流失してST12に入り込んだと思われる。16は体部下部に回転ヘラケズリを施し、内面に擦り痕が認められ、赤色顔料が付着している。17は須恵器椀と考えられるもので、口端の直下に沈線が一条巡る。須恵器壺

（18・24）のうち18は口縁部が短く直立する短頸壷と考えられる。24も短頸壷と考えられ、器面全面に被熱と思われる火はねがみられる。須恵器蓋（19〜23）はいずれも天井部にケズリを行っている。21は外面の口縁に墨が付着し、内面は硯に転用しており、22も天井部に墨が付着し、内面も硯に転用している。土師器甕（第７図１〜２・７〜８）のうち１・２は外面下部にケズリを施し、内面にはハケメ調整を行う比較的大型の甕である。７は底部に木葉痕と籾痕が認められる。８は体部で、内外面にハケメ調整を施す。器面の外面に付着した粘土が熱を受けて器面と密着している。赤焼土器甕（３〜５）は比較的小型のものである。土師器椀（６）は底部のみで全体の器形は不明であるが、内面にミガキを施し黒色処理をし、アンペラ様の圧痕を底部に残す。９は愛知県猿投窯産の原始灰釉陶器で、O—10期に該当する。胴部と頸部の接合は３段構成となり（図版15右上）頸部に２本の沈線が巡り、火表の部分に自然釉が流下している。二次焼成のため体部の釉が剝落し、器面がはじけている。住居の北東壁際からバラバラの状態で出土した。10は表面にミガキを施し４面を黒色処理を行っていることから黒色土器と分類した。第19図６の土器の胎土と良く似ている。11は鉄製の刀子で住居の北隅から出土した。櫛（12）は材を木目に沿って切り込みを入れ、歯を付けたものである。そのほか非常にもろく実測をとることが出来なかったが、幾層にも薄い紙状のものを重ねたものが床面から出土した（図版15右側上から４段目右の写真の右側の遺物）。

ST39（遺構・第４〜５　遺物・第７〜８図）

平面形は東西3.09m・南北3.38mの隅丸方形をなす。壁の立ち上がりは急で、南隅寄りの床面に焼土、床面中央部に角柱状の焼石があった。カマドは南壁の西寄りにEL41があり、両側に袖石がある。ST43・ST61・ST38・SX20を切っている。遺物は西壁の際とEL41の周りの床面から集中して出土した。

須恵器坏（第７図13〜19・第８図１〜４）のうち、第７図14は口端の部分が屈曲している。第８図２は底部に「主」の墨書がある。４は内面底部に赤色顔料が付着している。須恵器高台付坏（５）はST39からは１点のみの出土である。稜椀（６）はEL41内から出土した。ST39出土の他の土器より古いと考えられる。須恵器蓋（７〜13）のうち、７はつまみの端をナデて天井部にケズリがあり、内面に擦り痕と墨痕が見られる。口縁部に墨書があり「東ヵ束」と読み取れる。８は天井部をケズリかナデ調整を行っている。９は床面の焼土内から出土し、天井部にケズリがある。10はつまみの端をなでて天井部にケズリがある。11はつまみの端をナデて天井部にケズリを施している。12は天井部にケズリがある。また外面の端に墨書があり「主」と読み取れ、口縁が２ヶ所波状にゆがむ。13は天井部にケズリがあり、体部との境は角をなし、口縁端部が直立するものでST39の他の蓋とは形状が異なる。７〜11は口縁端部を折り返すという特徴のある形状をなす。赤焼土器甕（14〜20）のうち14・16〜17・19〜20は大型の甕で、15は中型、18は小型の甕である。土師器甕（21）は覆土上面からの出土で、底部にケズリを行い、内面はハケメ調整を行っている。底部中央部がやや突出して、直立させると不安定である。

ST40（遺構・第４〜５図　遺物・第９図〜11図）

平面形は東西3.03m、南北3.48mの隅丸のゆがんだ方形をなす。壁の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。カマドは南隅にEL46がある。住居の中央から北・西・東角に放射状に焼土が分布し、南壁西寄りに炭化材があった。また住居中央部のやや東寄りに偏平な河原石があった。床面の焼土の分布や炭化材の存在などから焼失家屋の可能性がある。ST43を切っており、ST39に切られていることからST43より新しくST39より古い。遺物の出土量は多かったが、床面出土遺物や完形品の出土は少なく、覆土からの出土が多いことから異なる時期の遺物の混在が考えられる。

ST40出土の須恵器坏（第９図12～16、第10図１～２・４～５）は、底部切り離しや器形が異なるものが存在する。第９図12は回転糸切りで底径が広い。13は12の器形と似るが、底部ヘラ切り後ナデ調整を行い、体部の下部に手持ちヘラケズリを行っている。14は底部回転糸切りで体部が外湾気味に立ち上がる。16は底部を失っているが回転糸切りと考えられ、体部が内湾気味に立ち上がる。第10図３は高台の部分が剝落しているが須恵器高台付坏と考えれる。ヘラ切りで、EK47覆土の出土である。須恵器椀（６～８）のうち６と７は底部が上げ底風で、体部の最下端が突出し体部が内湾しながら立ち上がり、器厚も坏よりやや厚いので椀とした。８は口端が丸くなり、体部が湾曲している。須恵器壺（９～10・15～16）のうち９・10は体部上半を失っているが長頸か短頸の壺と考えられ、いずれも回転ヘラ切りで10は体部下半にケズリが行われている。15は口縁と底部を失っているが、球胴形をなす短頸壷と考えられる。器面の内外面をロクロ調整を行って、外面の下部には縦方向のケズリが行われ、歪みがある。16は直立した口縁を持つ直口壺で、球胴形体部の最大径のやや上の部分に耳を持つ。焼成は良好で耳の角の部分と、体部の一部に横方向のケズリを行っている。今回の調査では耳が一個しか確認されなかったが双耳または四耳と考えられる。破片は床面のみでなく付近のグリッドからも出土している。須恵器蓋(11～13)のうち11は天井部をケズリ、口端部を折り曲げており、内面に擦り痕が見られる。12は口端が直立する。13はつまみを持たず、ケズリやナデを行わない。須恵器甕（14）は覆土からの出土である。赤焼土器甕（17～22）のうち18はEL46から倒立した状態で出土した（図版９）。20は小型の甕で焼成が良好である。土師器甕（第10図23～25・第11図１）はいずれも底部である。23は外面をケズリ調整、内面はナデとハケメ調整を行い、底部中央が突出している。24は木葉痕があり、25は体部の立ち上がりの部分に横方向のケズリがあり、底部にはハケメ状のナデの跡がある。第11図１は外面はケズリ、内面はハケメを施す。第10図23と同じように底部中央が突出している。

ST43（遺構・第４～５図　　遺物・第８図22～23・第９図）

平面形は東西3.6m、南北3.29mの隅丸方形をなし、壁の立ち上がりは急で床面は平坦である。カマドは南壁のやや西よりにEL45があったが、袖の部分は確認できなかった。ST43はST61・ST39・ST40によって切られており、ST38を切っている。遺物の出土は多くなかった。

須恵器坏（第８図22・第９図１～５）のうち第８図22は外面に火はねが認められる。床面出土であるが、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、底径が大きく体部が直立気味に立ち

上がるなど、ST43出土の他の須恵器坏よりと古いと考えられる。第９図１～５は回転糸切りで、底径が大きい。５はEP51覆土からの出土である。土師器坏（第８図23）はロクロ成形と考えられるが、底部の切り離しや外面の調整は器面が磨滅しており不明であるが、内面をミガキ、黒色処理を施、体部は内湾気味に立ち上がる。ST43出土の他の土器より古い可能性がある。土師器甕（第９図８）は体部外面下部にケズリ調整、内面は縦方向にハケメ調整を行うもので、小破片がST40・37覆土からも出土している。赤焼土器甕（６～７・９）のうち７はEL45からの出土である。９はロクロ成形のみで、他の調整は行っていない。10は底部を失っているが、赤焼土器甑と考えられ、内面底部に下から上に向かってナデかケズリを行う。外面に付着した粘土が被熱して器面に密着して焼き固まっている。赤焼土器堝（11）は外面にケズリとタタキ、内面にアテ痕がある。

ST61（遺構・第４～５図　遺物・第15図）

平面形などは不明である。EP50・58・EL53が伴う。現地調査の段階ではEL41とEL53の重なりから住居の存在は予想されていたが、その後のセクション図と平面図の検討から再確認された。そのため図示した遺物はEL53から出土した遺物のみである。それ以外の遺物は、プランがST39とほぼ重なると考えられ、床面の高さもST39の床面がST61の床面よりも低いために、ST39が作られたときに無くなってしまったと考えられる。

須恵器蓋（第16図１）は天井部にケズリを施し、焼成は良好である。土師器甕（２～３）はいずれもロクロ成形で、外面はケズリ調整、内面はハケメ調整を行う。

ST10（遺構・第14図　　遺物・第11図）

平面形は東西3.17m、南北3.14mの歪んだ隅丸の方形をなす。壁の立ち上がりは北壁（尾根側方向）が緩やかで他の壁は急な立ち上がりをなす。床面は緩やかな起伏があり南壁中央と南東隅に焼土が認められた。遺物の出土状況は散漫で、偏りのあるような状況は認められなかった。床面出土土器は第11図７の甕の底部と、10の南壁中央の焼土から出土した赤焼土器甕だけである。そのほかは小破片であった。

須恵器坏（第11図２～５）のうち２は内湾しながら立ち上がり、口縁部が角を形成するほど屈曲する。内面の底部付近に赤色顔料が付着している。３も内湾しながら立ち上がり口縁がやや外反する。４はやや外反しながら立ち上がり、口径が大きいが、器高が低い。５の内面にも赤色顔料が付着している。須恵器高台付坏（６）はほぼ直線に立ち上がる。７は須恵器甕か鉢の底部と考えられる。器面の内外面にケズリとナデ調整が施される。須恵器鉢（８）はロクロ成形のあと体部下半にケズリを施す。赤焼土器甕のうち、９は表面が磨滅しており、10は床面の焼土から出土した。

ST12（遺構・第14図　遺物・第11～13図）

平面形は東西2.2m、南北2.51mと小型で、南西隅が一部はみ出した歪んだ方形をなす。壁の立ち上がりは急で、南壁中央付近に焼土が認められる。遺物は、面的には南西に多く北東は少ない。層位的には床面から覆土にかけて須恵器の坏と高台付坏を中心に多くの遺物が出土した。遺構の覆土は、遺構自体が斜面を掘り込んで作られているために、北東（尾根）側が厚く南西（谷）側が薄いという状況を示す（第14図）。遺物の出土状況は、ST12が

尾根側の土砂で、ある程度埋まりかけた時に土器が捨てられたと考えられ(図版11)、覆土出土の遺物と床面出土遺物は、廃棄または遺棄時の一括遺物と考えられる。

須恵器坏（第11図11～15・第12図１～15）のうち第12図7は内面に墨様の付着物がある。10は口縁部が屈曲している。13は内面底部に赤色顔料が付着している。14は底部に墨書が認められ「由」と読み取れる。須恵器高台付坏（第12図16～18・第13図１～３）はすべて付高台で、体部がやや内湾しながら立ち上がり口縁が外反する。土師器坏（第13図４・５）のうち４は底部の下部をわずかに削り、疑似高台となる。内面の黒色処理が熱で消えている可能性もある。５は内側を黒色土器を施したもので、体部の上半部に横方向のナデを行っている。６・８は土師器高台付坏で、高台の部分を削り出すかつまみ出すかして、わずかな高台が付き、内面をみがいて黒色処理を施している。須恵器蓋（７）は口縁端部の形状が丸みを帯び、本遺跡のほかの蓋とは口端部の形状が異なる。須恵器壺（９）は口縁を失っているが、高台付のやや大型の鉢と考えられ、ゆがみがある。須恵器甕（11）は外面下部にケズリ、内面にハケメ調整を施す。赤焼土器坏（10）は小型のものである。赤焼土器甕（12・13）のうち13は大型の甕と考えられる。赤焼土器鍋（14・16・17）のうち16は口端が丸くなる形状をなす。粘土塊（15）被熱して焼き固まったもので、ほかにも同様のものがST12から１点出土している。赤焼土器の坏の胎土に似て、混合物は含まれていない。

２、土坑

今回の調査で16基の土坑が確認された。このうち、SK29・30・４・14・５・９・25・18・26土坑について取り上げる。

SK29（遺構・第16図）

浅い皿状をなし、覆土はシルト質で赤焼土器片や炭化粒を含む。遺物は細片で図示出来るものはなかった。

SK30（遺構・第16図）

覆土はシルト質で、炭化粒や炭化材を含む。底は平底となり、壁は焼けていた。遺物は赤焼土器の細片を含んでいたが、図示できなかった。

SK４（遺構・第16図）

不整の楕円形をなし、覆土は斜面上方（山側）からの流れ込みの様相を示す。遺物は少量の赤焼土器細片を含む。遺物は図示できなかった。

SK14（遺構・第16図）

不整の円形をなし、南西側が一段低く掘り込まれている。覆土はシルト質で赤焼土器の細片を少量含む。

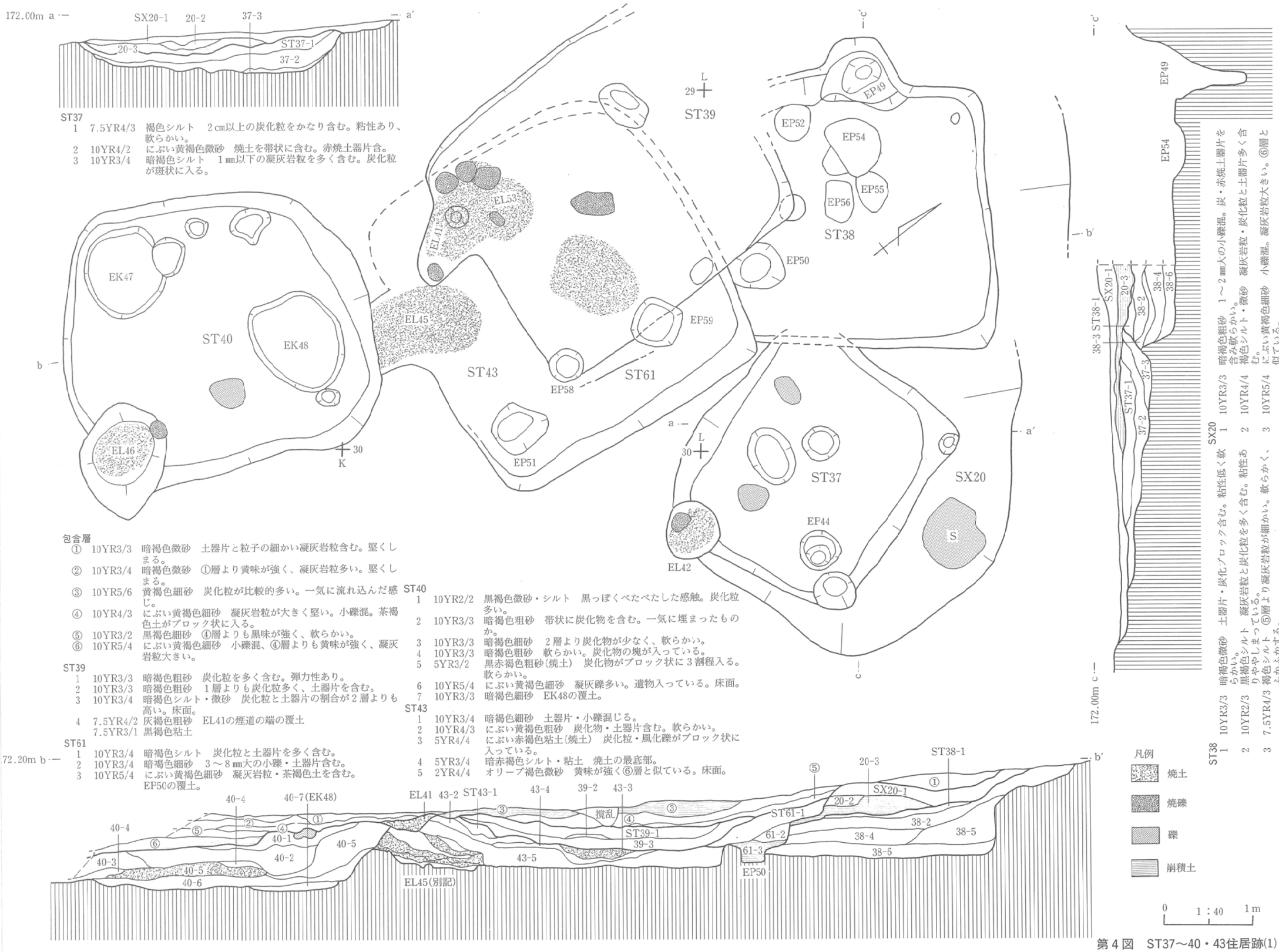
SK５（遺構・第16図　遺物・第18図１～２）

長楕円形をなし、床面はほぼ平底になる。覆土は赤焼土器・須恵器の細片を含む。図示できた遺物（第18図１～２）はいずれも覆土からの出土である。赤焼土器甕（１）は大きさの割に器厚が厚く、外面にケズリを施す。土師器甕底部（２）は外面にケズリ、内面にハケメ調整が施されている。

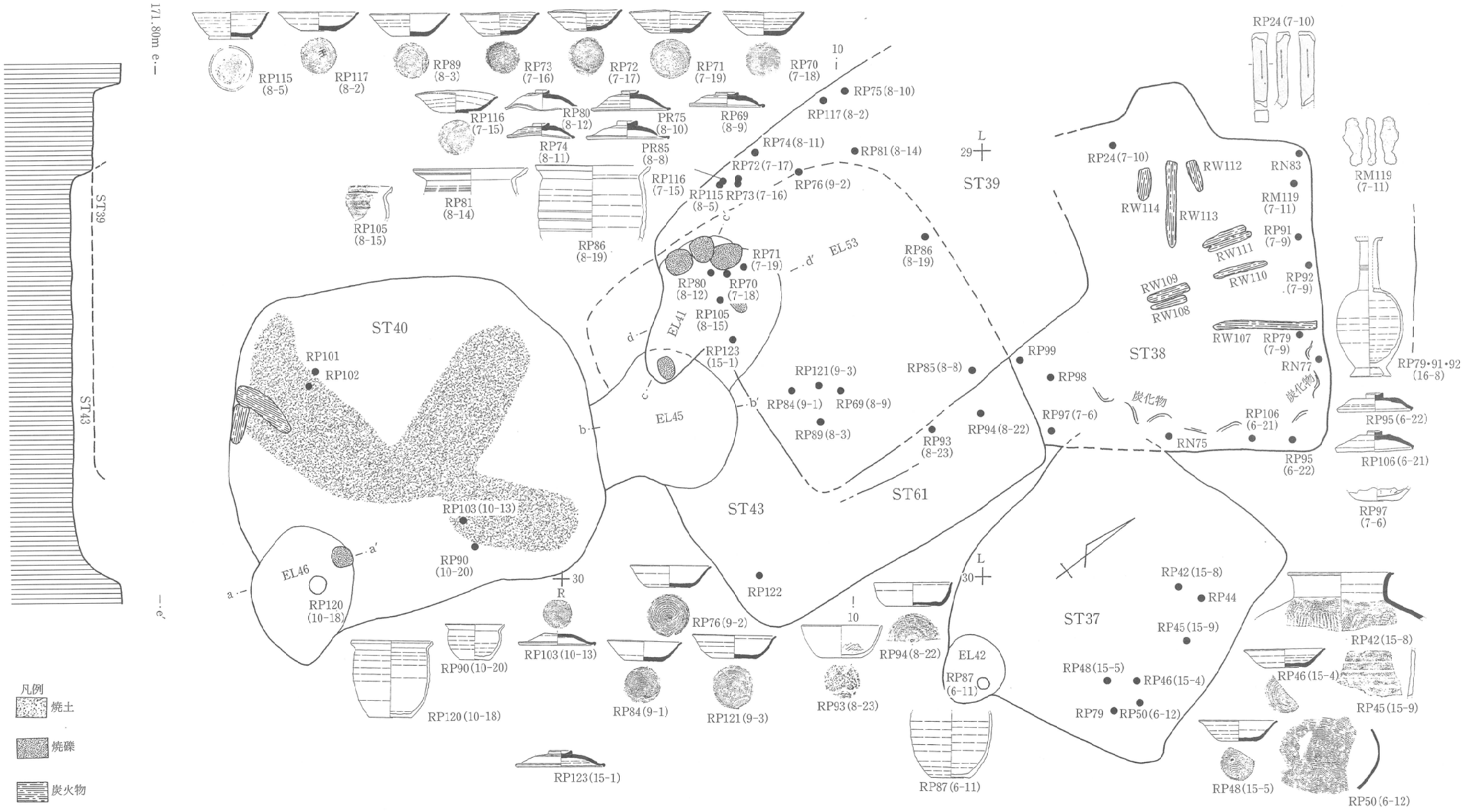
表—1　竪穴住居跡観察表

項目　住居跡No.	ST10	ST12	ST37	ST38
位置（グリッド）	M・N—29・30	M・N—30・31	K・L—29・30	L—28・29
規模（cm）	東西 317 南北 314	東西 220 南北 251	東西 237 南北270	東西 289 南北(300)
平面形	隅丸の歪んだ正方形	一部張り出した長方形	隅丸のほぼ長方形	一部凸状に張り出した方形
主軸方向	N—15° —E	N—19° —E	N—22° —W	N—57° —W
遺存状態	やや良好	良好	やや良好	良好
確認面からの深さ（cm）	16～40	9～31	40	83～92
壁の立ち上がり	北壁緩やか　他急	急	やや緩やか	上部緩やか　下部急
床面状況	起伏あり	西寄りにやや傾斜	やや起伏あり	ほぼ平坦
柱穴等	EP　4基	EP　4基	EP44　他4基	EP49　EP52　他5基
焼土 焼石 炭化物	南角部・南壁中央部に焼土	南壁中央部に焼土	—	覆土5層に炭化材・炭化物
カマドNo.	—	—	EL42	—
位置	—	—	南壁西寄り	—
住居主軸に対する振れ	—	—	3° —E	—
遺存状態	—	—	不良	—
規模	—	—	長さ66幅61	—
袖部	—	—	不明	—
焼土	—	—	燃焼部中央	—
重複関係	なし	なし	ST38→ST37→SX20	ST38→ST43→ST40
遺物挿図	第11図2～10	第11図11～第13図17	第6図1～12	第6図13～第7図12
備考				焼失家屋
遺構挿図	14	14	4・5	4・5
遺構図版	10	11	4・8	5・8

項目　住居跡No.	ST39	ST40	ST43	ST61
位置（グリッド）	K・L—28・29	J・K—29・30	K・L—29・30	(K・L—29)
規模（cm）	東西 309 南北 338	東西 303 南北 348	東西 360 南北 329	—
平面形	隅丸のほぼ長方形	隅丸の歪んだ方形	隅丸のほぼ長方形	不明
主軸方向	N—2° —E	N—57° —W	N—7° —E	N—12° —E
遺存状態	やや不良	やや良好	やや良好	不良
確認面からの深さ（cm）	20～39	47～67	18～53	16～52
壁の立ち上がり	急	やや急	急	不明
床面状況	北寄りにやや傾斜	ほぼ平坦	平坦	不明
柱穴等	不明	EK47・48　EP4基	EP51・59	EP50・58　他2基か
焼土 焼石 炭化物	南角寄りに焼土　中央部に焼石	中央から北・西・東角に放射状に焼土　南壁西寄りに炭化材	—	—
カマドNo.	EL41	EL46	EL45	EL53
位置	南壁西寄り	南角部	南壁やや西寄り	南壁西寄り
住居主軸に対する振れ	29° —W	2° —N	8° —E	(10° —W)
遺存状態	やや良好	やや良好	やや良好	不良
規模	長さ145　幅104	長さ130　幅95	長さ144　幅128	不明
袖部	両側に袖石	北側に袖石	不明	不明
焼土	燃焼部～煙道	燃焼部中央	燃焼部～煙道	燃焼部
重複関係	ST43↗ST61↘ST39 ↘ST40↗	ST43→ST40→ST39	ST38→ST43↗ST61 ↘ST40	ST43↘ST61→ST39 SX20↗
遺物挿図	第7図13～第8図21	第9図12～第11図1	第8図22～第9図11	第15図1～3
備考		焼失家屋？		
遺構挿図	4・5	4・5	4・5	4・5
遺構図版	6・8	8・9	7・8	8



第4図 ST37～40・43住居跡(1)



EL46(ST40)

1	2.5YR6/6	明黄褐色礫　石質不明、火を受けてもろくボロボロになっている。
2	2.5YR4/6	オリーブ褐色微砂　堅く均質な砂層である。
3	10YR3/4	暗褐色微砂　炭化粒3～5㎜角と粒状の1層土・風化凝灰岩粒含む。
4	10YR4/4	褐色シルト　ブロック状に赤褐色微砂(焼土)入る。炭化物ブロックを帯状に含む。1層くずれのような砂粒混。
5	7.5YR2/3	極暗褐色粘質土　4層の焼土ブロックを斑状に含む。炭化粒微量混。
6	5YR3/3	暗赤褐色シルト(焼土)　軟らかく混じり気がない。
7	10YR4/3	にぶい黄褐色微砂　炭化ブロック少々混。この部分はあまり火を受けていない。

EL45(ST43)

1	7.5YR4/4	褐色シルト　細砂を含む。
2	10YR3/4	暗褐色粘質シルト　細砂混、焼土を斑状に炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。
3	10YR4/4	褐色砂質シルト　炭化粒・風化凝灰岩を含む。
4	10YR4/6	褐色砂質シルト　南西側にいくに従って、焼土の割合が大きくなる。炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。
5	7.5YR3/4	暗褐色粘質シルト　非常に軟らかい。焼土をブロックで含み、6層を斑状に含む。炭化粒・凝灰岩含む。
6	10YR2/3	黒褐色シルト　上部に焼土層を含み、焼土粒・凝灰岩粒を少量、炭化粒を微量含む。

EL41(ST39)

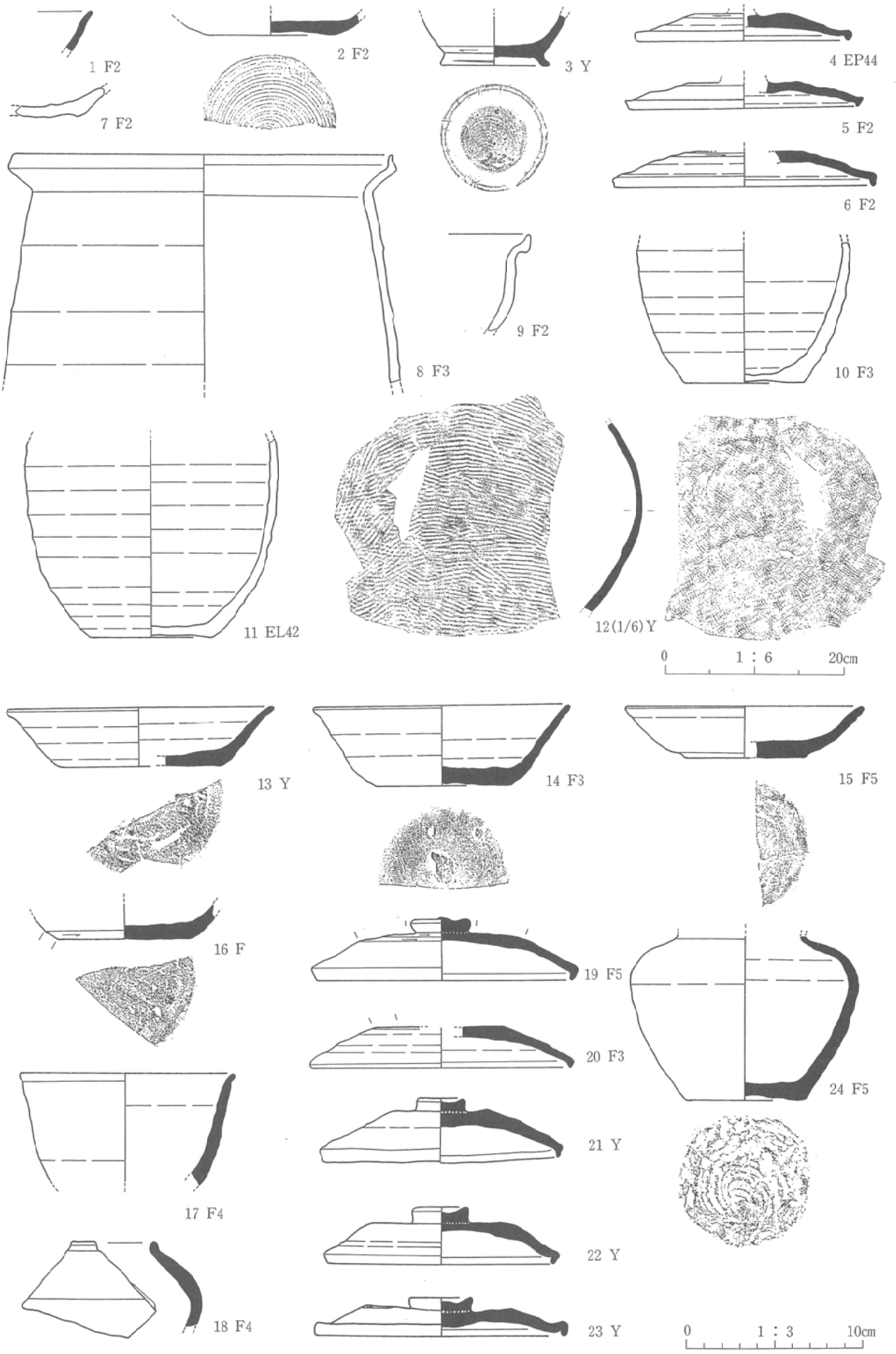
1	7.5YR3/4	暗褐色シルト(焼土)　3層を薄く層状に含み、炭化粒を微量含む。
2	5YR5/8	明赤褐色シルト(焼土)　3層を斑状に含み、炭化粒を微量含有。砕くと非常にサラサラしている。
3	10YR3/4	暗褐色粘質シルト　極部的に風化凝灰岩を斑状に含み、1層を粒状で少量炭化粒を微量含む。
4	10YR3/4	暗褐色粘質シルト　3層と同様だが、明赤褐色粘質シルトを斑状に含み、炭化粒・凝灰岩を少量含む。
5	5YR3/2	暗赤褐色粘質シルト(焼土)　1層と炭化粒・風化石灰岩を含む。
6	10YR3/3	暗褐色砂質シルト　上部に7.5YR3/3暗褐色砂質シルトを薄く層状に含み、炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。(ST61のピット　カ)

EL53(ST61)

1	10YR3/4	暗褐色シルト(焼土)　炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。
2	7.5YR5/8	明褐色シルト　上部にグラデーション風に黄褐色シルトを含み、焼土を斑状に含む。炭化物少々混。
3	10YR3/3	暗褐色シルト質砂　炭化粒を少量含む。
4	7.5YR3/4	暗褐色砂質シルト　炭化粒を少量含む。
5	10YR3/4	暗褐色砂質シルト　粘性大きい。焼土粒・炭化粒を少量含み、凝灰岩粒を含む。
6	10YR3/4	暗褐色砂質シルト　粘性なし。焼土粒少々、凝灰岩粒を含む。
7	10YR4/4	褐色シルト　凝灰岩粒を少量含む。
8	10YR4/4	褐色粘質シルト　ブロック状に粘土を含み、土器片・凝灰岩粒を少量含む。

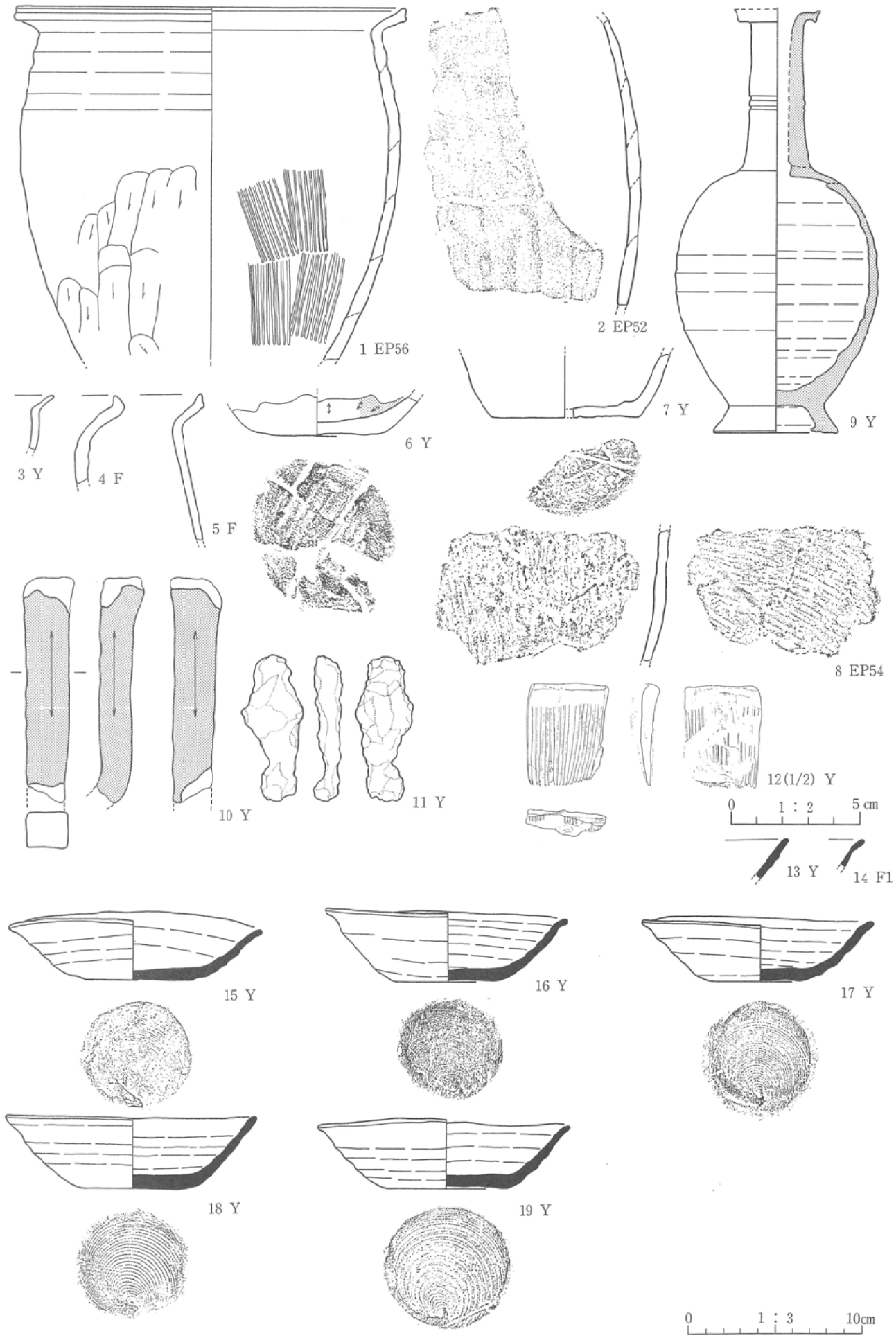
0　1：40　1m

第5図　ST37～40・43住居跡(2)



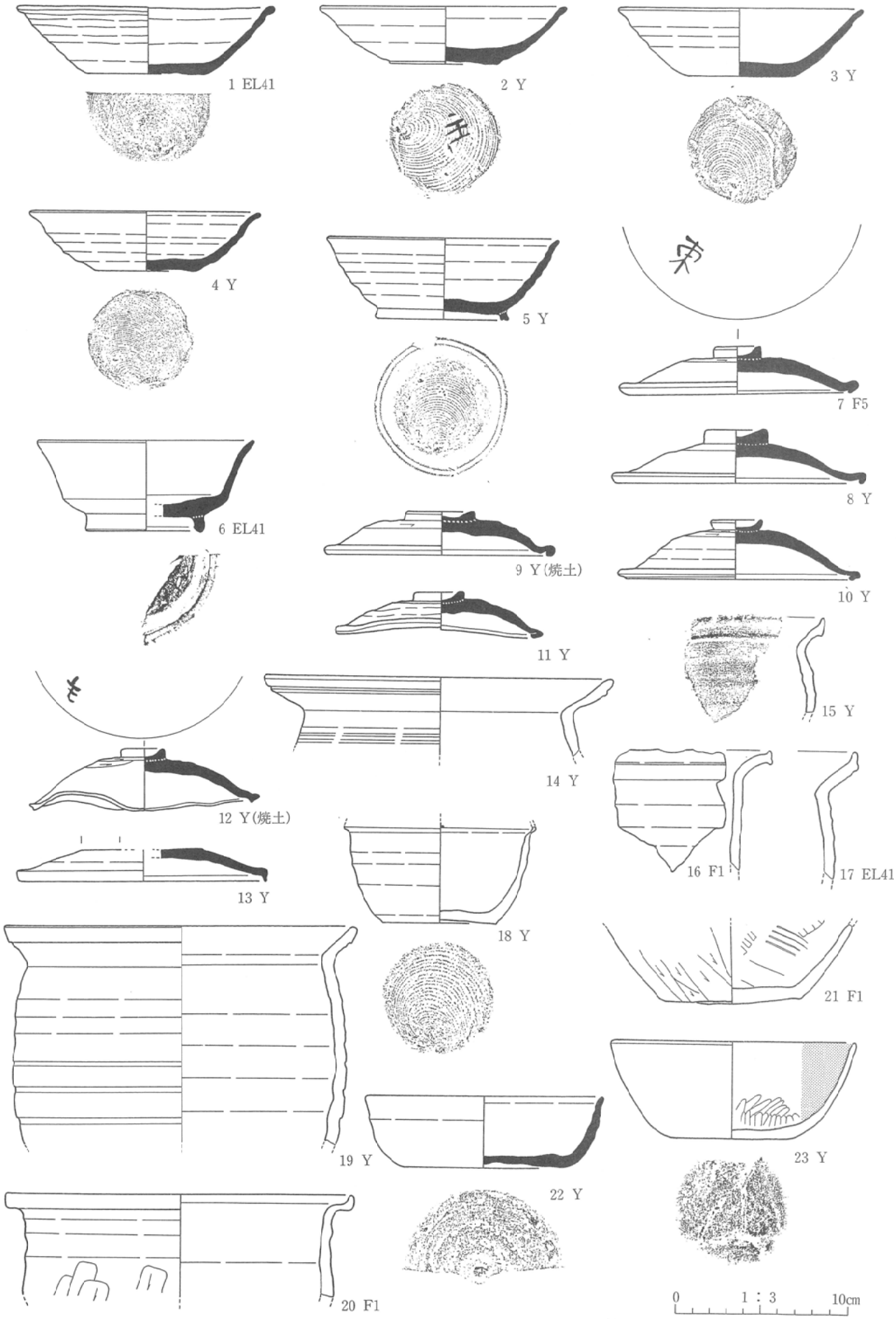
1～12(ST37)，13～24(ST38)

第6図　ST37・38出土遺物実測図



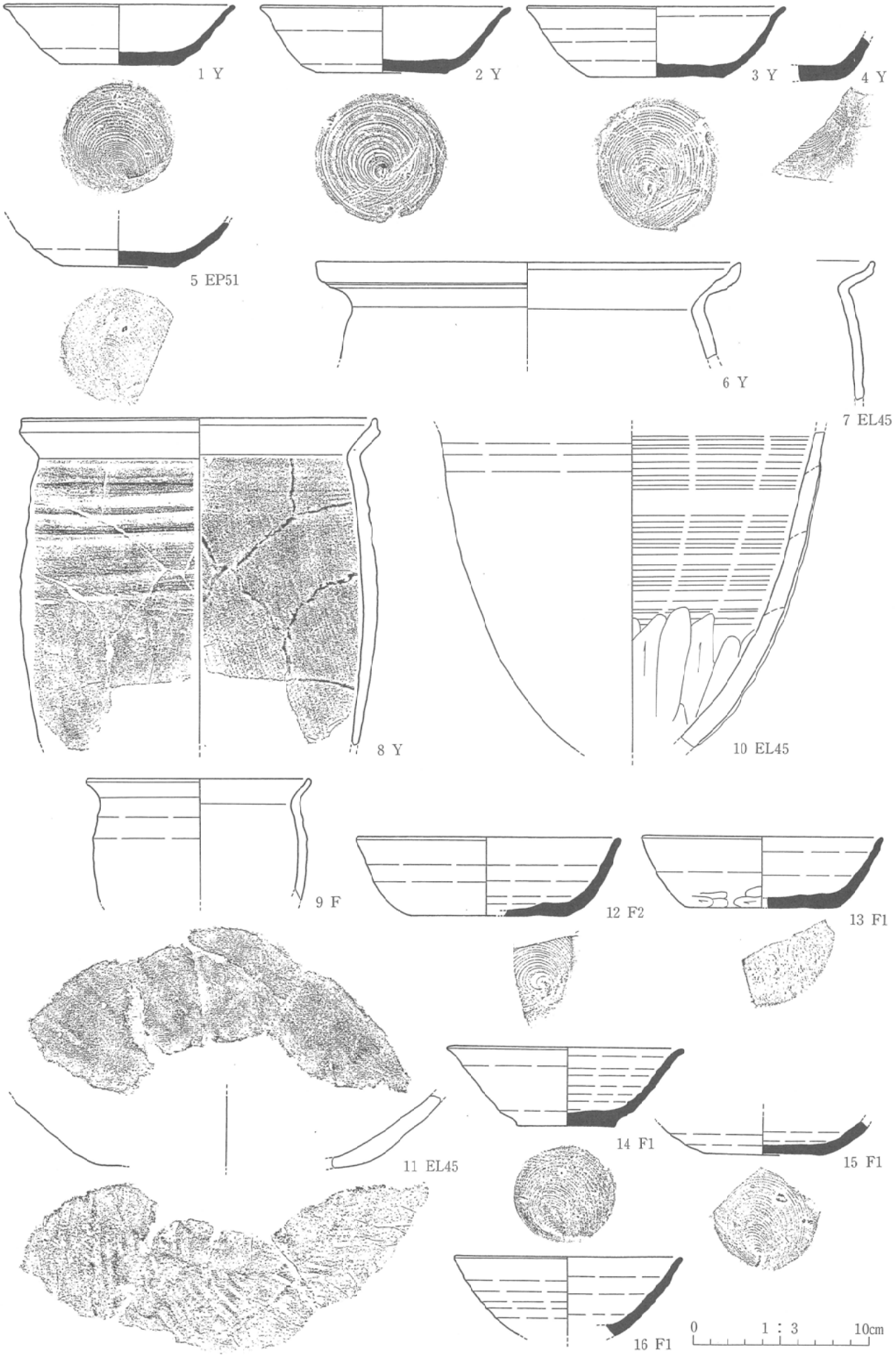
1～12(ST38)，13～19(ST39)

第7図　ST38・39出土遺物実測図



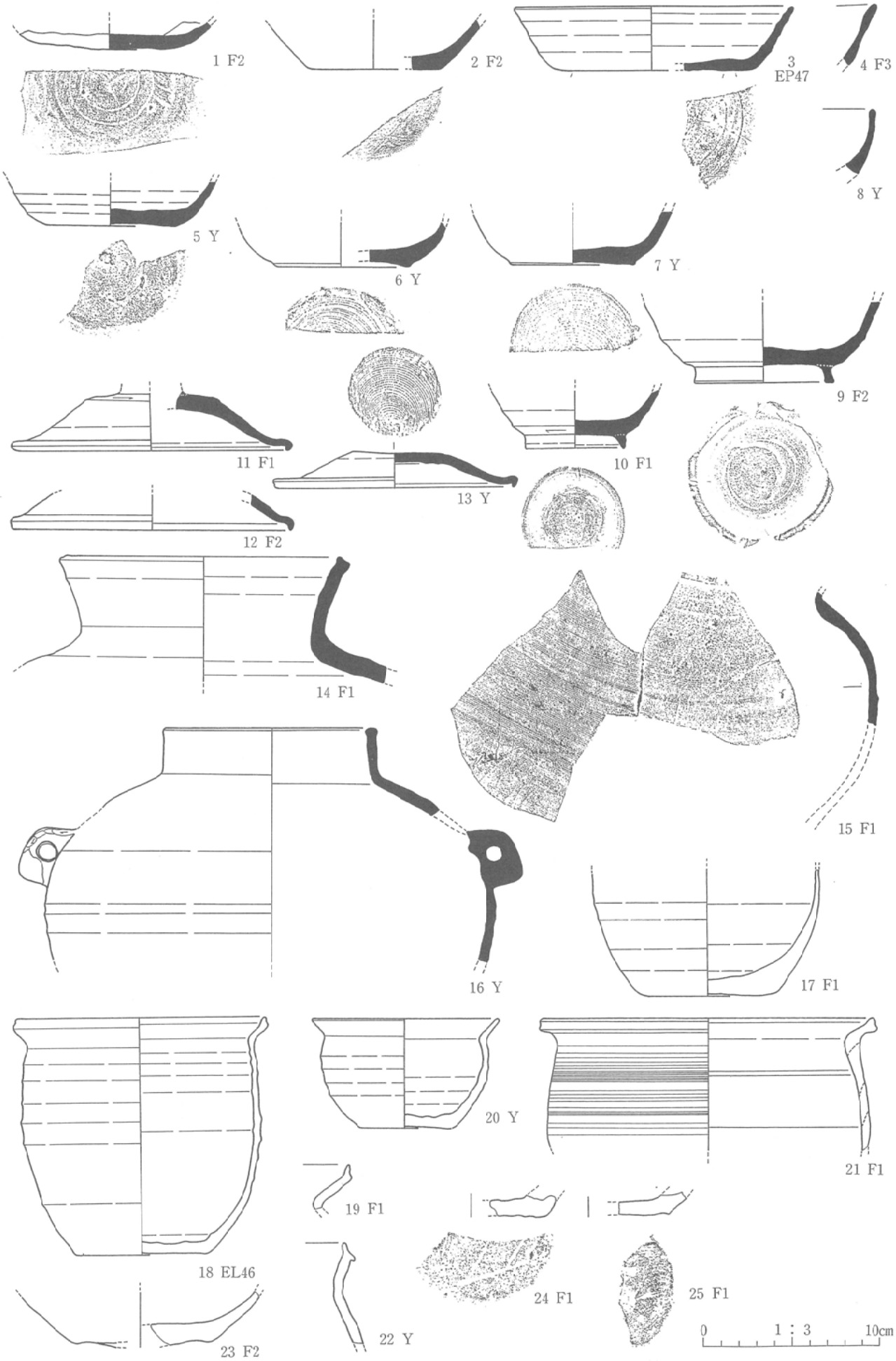
1～21(ST39)，22～23(ST43)

第8図　ST39・43出土遺物実測図



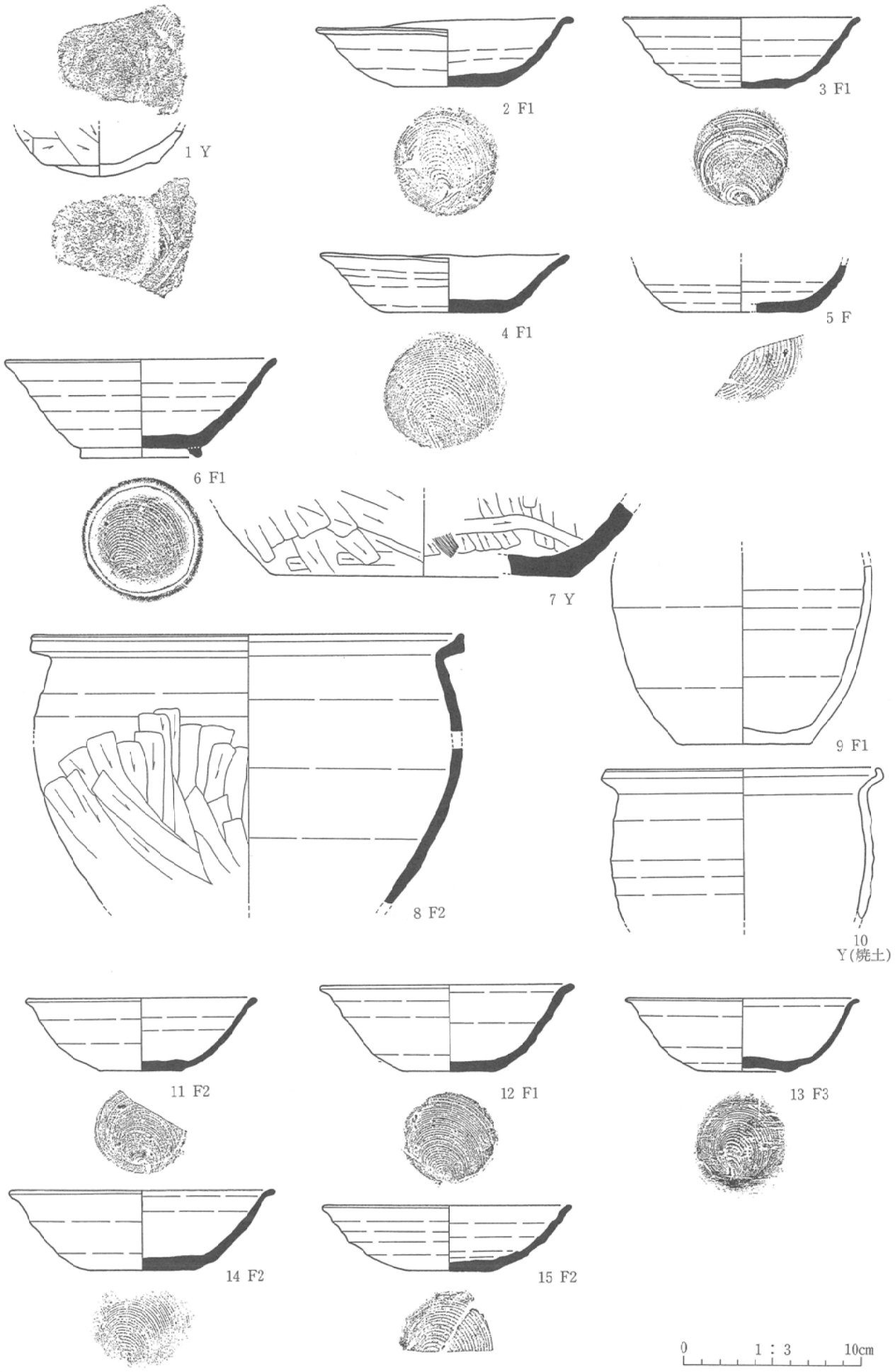
1～11(ST43)，12～16(ST40)

第9図　ST43・40出土遺物実測図



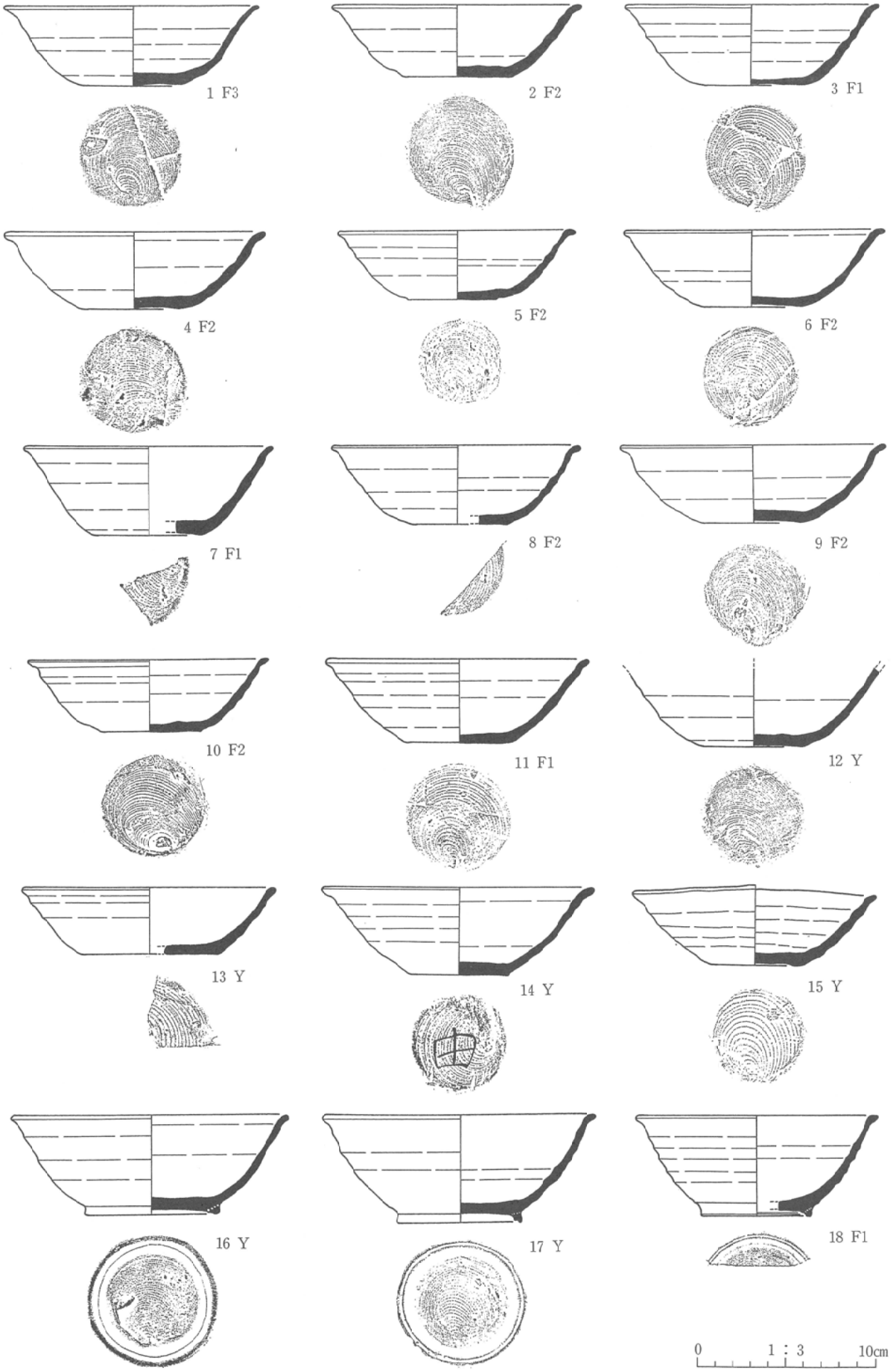
1～25(ST40)

第10図　ST40出土遺物実測図



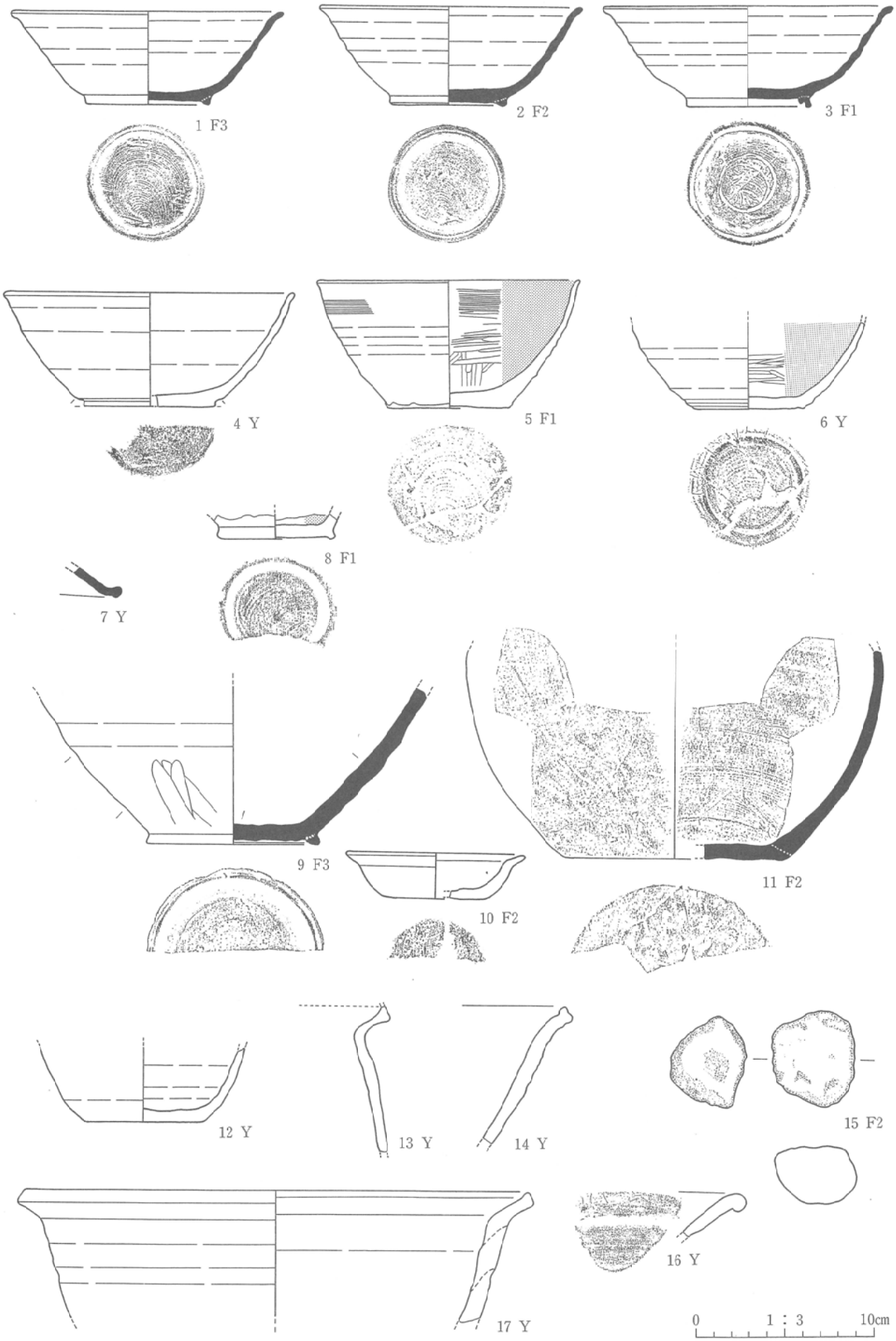
1(ST40)，2～10(ST10)，11～15(ST12)

第11図　ST40・10・12出土遺物実測図



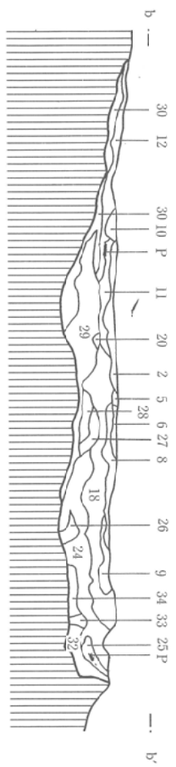
1～18(ST12)

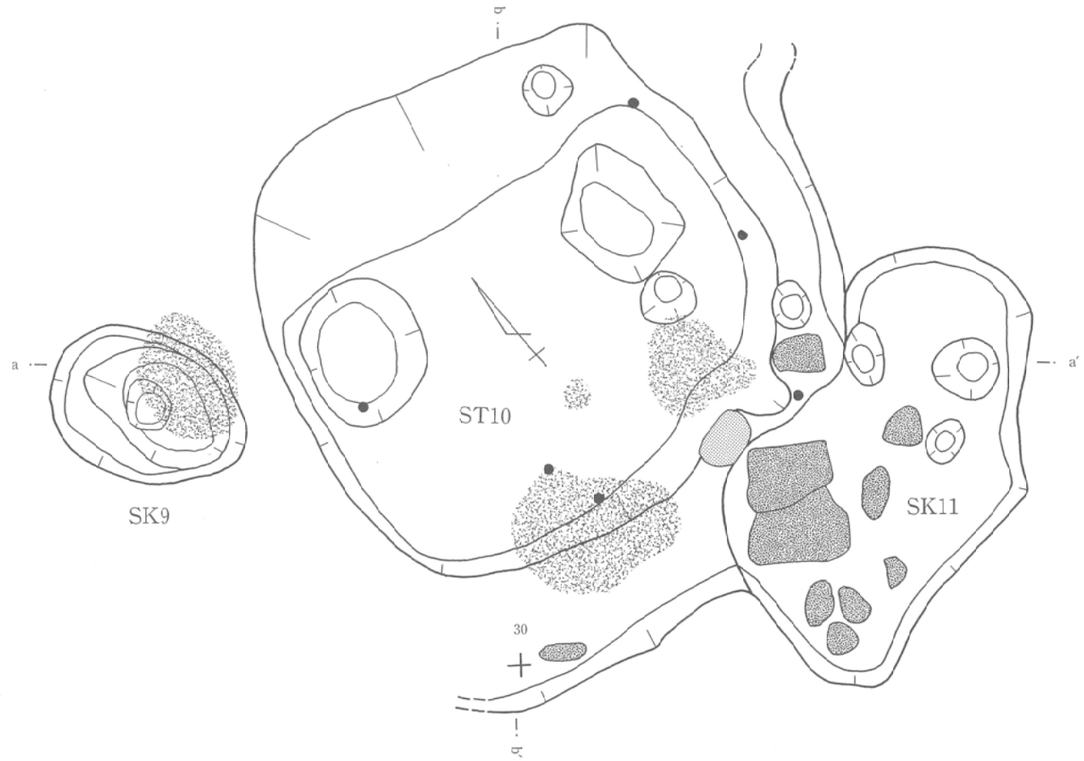
第12図　ST12出土遺物実測図

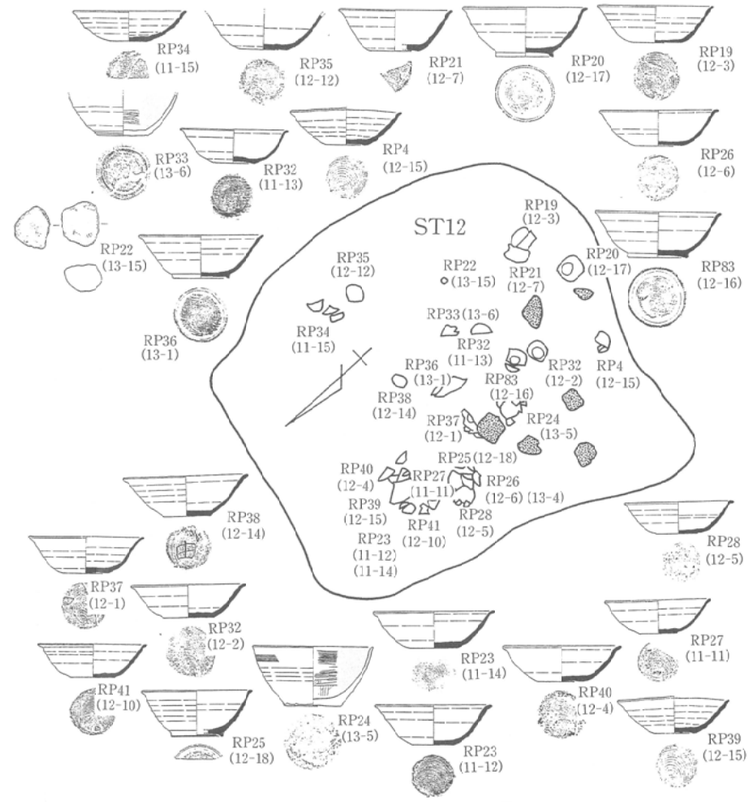


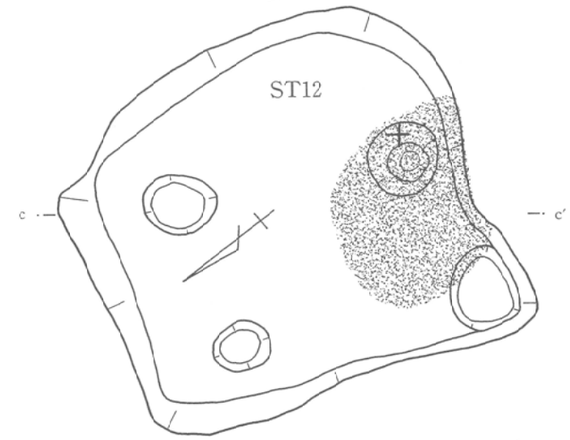
1～17(ST12)

第13図　ST12出土遺物実測図(2)







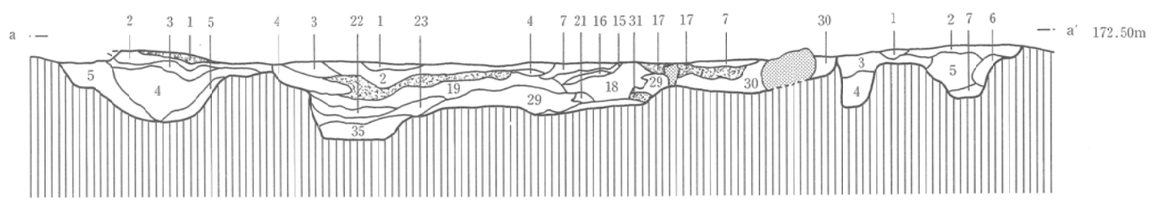


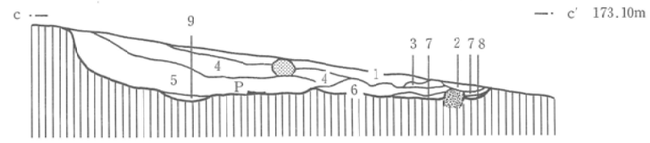
凡例

焼土

焼礫

礫





SK9

1 7.5YR4/4 褐色シルト　上部に焼土・焼石を含む。
2 10YR3/4 暗褐色シルト　焼土粒・炭化粒・凝灰岩粒を含む。
3 10YR4/3 にぶい黄褐色質シルト　5層をブロックで含み、焼土粒・炭化粒・凝灰岩粒含む。
4 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト　5層を斑状に含む。
5 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり粘質シルト　焼土粒・炭化粒・風化凝灰岩粒を含む。しまりなく、柔らかい。

ST10

1 10YR2/3 黒褐色シルト　焼土粒・炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。
2 7.5YR2/2 黒褐色粗砂混じりシルト　暗褐色シルトを斑状に含む。
3 10YR2/3 黒褐色シルト　4層をブロック状に、23層を斑状に含む。
4 10YR4/6 褐色粗砂　凝灰岩粒含む。
5 2.5YR6/6 明黄褐色シルト　粘性あり。
6 10YR3/3 暗褐色粘質シルト　礫・植物根含む。
7 10YR3/3 暗褐色シルト　風化凝灰岩、下部に黒褐色粘質シルトを薄く含む。
8 10YR2/2 黒褐色粘質シルト　炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。
9 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト　下部に炭化層が薄く入り、焼土・礫・土器片含む。
10 10YR2/3 黒褐色粘質シルト　土器片・炭化物・風化凝灰岩・石灰岩を少量含む。赤褐色粘質シルトを斑状に含む。
11 10YR3/3 暗褐色砂質シルト　炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。
12 10YR3/2 黒褐色シルト　黒色シルトが小ブロック状に入り、炭化粒・風化凝灰岩を少量含む。礫混じり。
13 7.5YR2/3 極暗褐色シルト質粘土　焼土・炭化粒を全体に均一に含む。
14 10YR3/4 暗褐色シルト　焼土・炭化粒・凝灰岩粒を含む。
15 10YR3/3 暗褐色シルト　下部に黒褐色粘質シルトを薄く含む。風化凝灰岩粒を多く含む。
16 10YR3/3 暗褐色粘質シルト　植物根多く、炭化粒・風化凝灰岩わずかに含む。
17 5YR2/2 黒褐色粘土　焼土・炭化粒・赤色風化凝灰岩粒を少量含む。非常に柔らかい。
18 10YR3/3 暗褐色粘質シルト　炭化粒・風化凝灰岩をわずかに含む。
19 10YR3/1 黒褐色砂質シルト　4層・23層が斑状に入り、部分的に凝灰岩を含む。非常にゆるい。
20 10YR4/4 褐色粗砂混じり粘質シルト　凝灰岩粒を多量に含む。
21 5Y6/1 灰色シルト質粘土　18層と似るが、黄色風化凝灰岩を含む。
22 7.5YR2/3 極暗褐色シルト質粘土　焼土を少々と炭化粒を全体に均一に含む。
23 7.5YR1.7/1 黒色シルト質粘土　植物根含む。
24 10YR2/3 黒褐色砂質シルト　少量の炭化粒・礫を含み、部分的に炭化物が入る。
25 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　しまりがなく柔らかい。焼土・風化凝灰岩粒・炭化粒を含む。
26 10YR4/6 褐色粘質シルト　24層を小ブロックで含み、赤色風化凝灰岩粒を含む。
27 10YR5/8 黄褐色砂質シルト　6層を斑状に含み、炭化粒・凝灰岩粒・礫を含む。
28 10YR3/3 暗褐色砂質シルト　炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。27層を斑状に含む。
29 10YR3/4 暗褐色粘質シルト　凝灰岩粒を少量含む。粘性高い。
30 10YR3/3 暗褐色砂混じり粘質シルト　黄褐色土をブロックで少量含む。炭化粒を少量・凝灰岩粒を多量に含む。
31 10YR2/3 黒褐色粗砂混じりシルト　焼土・炭化粒を少量含み、非常に柔らかい。
32 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト　上部に9層をブロックで含む。炭化粒・凝灰岩・礫を少量含む。
33 10YR4/4 褐色砂質シルト　下部に黒褐色土を少量含み、凝灰岩・赤色風化凝灰岩を微量含む。
34 10YR4/6 褐色砂質シルト　赤色風化凝灰岩粒を微量と植物根を含む。

SK11

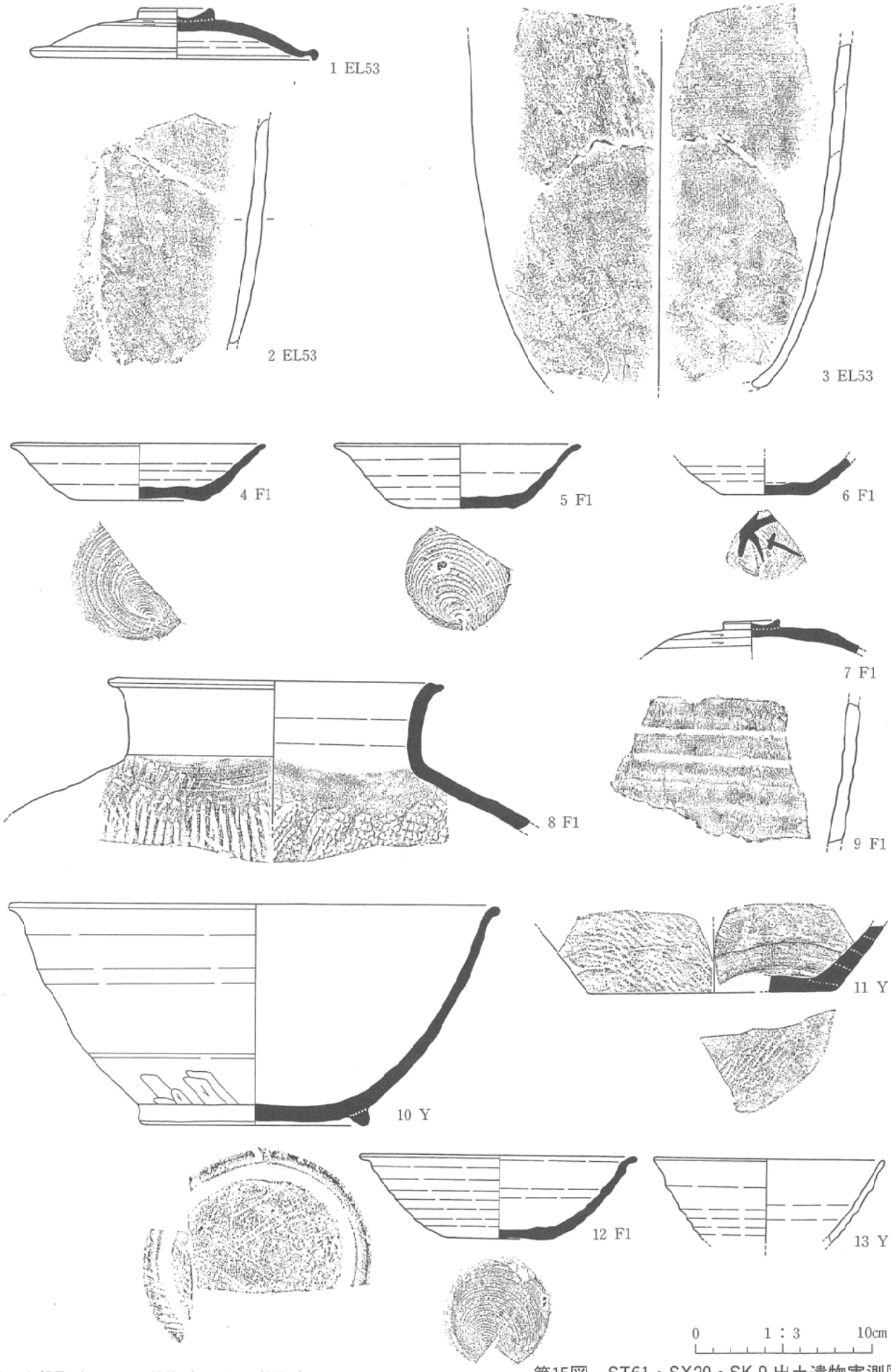
1 7.5YR1.7/1 黒色シルト　礫と植物根含む。
2 10YR2/2 黒褐色シルト　凝灰岩粒と風化凝灰岩を少量含む。
3 10YR3/3 暗褐色シルト　下部に黒褐色粘質シルトを薄く含む。風化凝灰岩含有。
4 10YR2/2 黒褐色砂質シルト　凝灰岩粒を多量に含む。
5 10YR2/2 黒褐色粘質シルト　石灰岩・赤色風化凝灰岩・凝灰岩粒を少量含む。粘性の高い黒色シルトを斑状に含む。
6 10YR2/2 黒褐色粘質シルト　石灰岩・赤色風化凝灰岩・凝灰岩粒を少量含む。褐色砂混じり粘質シルトを斑状に含む。
7 10YR4/4 褐色礫混じり粘質シルト　凝灰岩を大量に含み、下部に赤色風化凝灰岩が薄く入る。

0　1：40　1m

ST12

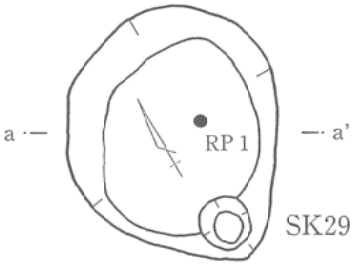
1 10YR4/4 褐色細砂　粒子の大きい凝灰岩を3割以上含む。
2 7.5YR2/2 黒褐色粘質土　焼土を斑状に含む。赤焼土器片含有。しまっていて、弾力がある。礫も火を受けている。
3 7.5YR3/1 黒褐色微砂　炭化粒を多く含み、しまっている。
4 10YR3/3 暗褐色微砂　炭化粒含む。1層と似るが、凝灰岩の割合少ない。弾力がある。
5 10YR3/3 暗褐色粗砂　完形の土器含む。6層より柔らかい。
6 10YR3/3 暗褐色細砂　凝灰岩の塊を斑状に含む。土器片・炭化物含有。
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂　風化凝灰岩粒を斑状に含む。
8 10YR2/1 黒色シルト　均質で柔らかい。

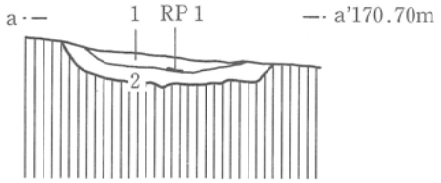
第14図　ST10・12竪穴住居跡SK9・11土坑



1～3 (ST61)，4～9 (SX20)，10～13(SK 9)

第15図　ST61・SX20・SK 9 出土遺物実測図

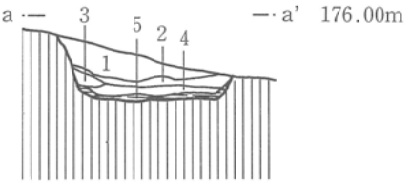




SK29

1　10YR2/1　黒色粘質シルト　土器片・炭化粒・凝灰岩粒を含み、植物細根含む。

2　10YR3/3　暗黒褐色粘質シルト　炭化粒を少量含み、凝灰岩・凝灰岩粒・礫を含む。



SK30

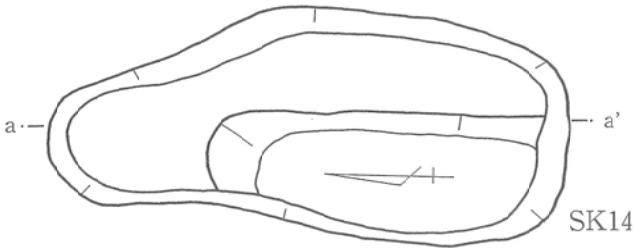
1　10YR2/3　黒褐色砂質シルト　炭化粒・凝灰岩粒を少々含む。

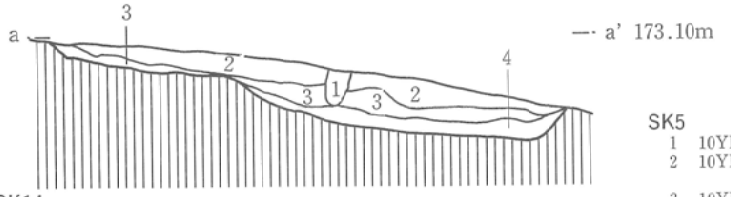
2　N1.5/0　黒色粘質シルト　1層を斑状に含む。

3　10YR2/2　黒褐色シルト　炭化材が斑状に多量に混じる。土器片含む。

4　10YR3/4　暗褐色シルト　炭化粒・凝灰岩粒を斑状に含む。

5　N1.5/0　黒色粘質シルト　炭化材を多量に含む。礫混じる。壁焼けている。





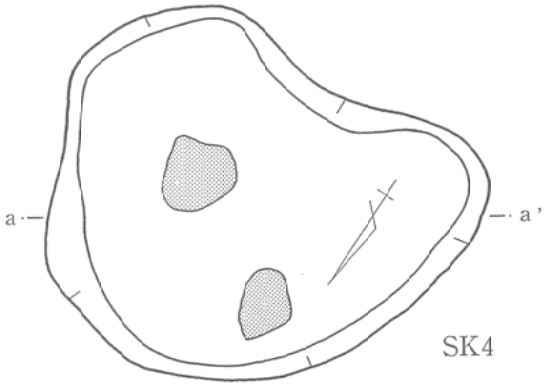
SK14

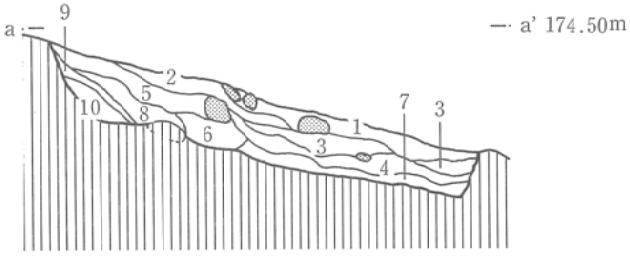
1　10YR1.7/1　黒色シルト　下部に3層を斑状に少々含み、凝灰岩粒を少量含む。

2　10YR2/2　黒褐色シルト　北側に3層を層状に薄く含み、南側の下部に黒色粘質シルトを含む。土器片・炭化粒を少々含み、凝灰岩赤色風化凝灰岩粒を含む。

3　10YR3/3　暗褐色砂質シルト　中央部にやや粘性のある黒褐色砂を含み、1層を層状に薄く含む。凝灰岩・赤色風化凝灰岩を含み、よくしまっている。

4　10YR5/4　にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト　凝灰岩・赤色風化凝灰岩を含む。よくしまる。





SK4

1　10YR2/1　黒色粘質シルト　凝灰岩、赤色風化凝灰岩を含み植物細根含む。

2　10YR2/2　黒褐色シルト　東半下部に5層を斑状に少量含み、西半下部には3層を斑状に含む。炭化粒・赤色風化凝灰岩粒・植物細根含む。

3　10YR3/3　暗褐色粗砂　西半上部に1層を斑状に含み、炭化粒を微量、凝灰岩粒を少量含む。

4　7.5YR1.7/1　黒色シルト　3層をブロックで少量含み、土器片粒・炭化粒を微量含む。凝灰岩粒も含む。

5　10YR3/1　黒褐色シルト　やや粘性あり。径3～4cmの凝灰岩、2層と8層の漸移層。

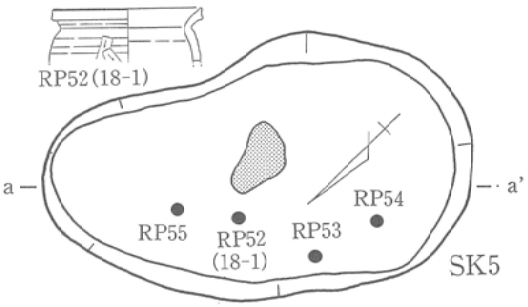
6　10TR3/4　暗褐色粗砂　2層を薄く斑状に含み、炭化粒・凝灰岩粒・赤色風化凝灰岩粒を少量含む。

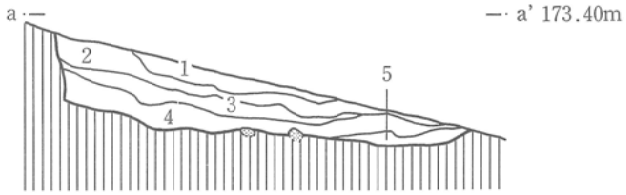
7　10YR3/3　暗褐色細砂　3層とほぼ同様。

8　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　やや粘性あり。凝灰岩粒と径3～4・7～8cmの凝灰岩を少量含む。

9　10YR4/2　灰黄褐色細砂　凝灰岩粒を少量含む。

10　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　やや粘性あり。凝灰岩粒を少量含む。





SK5

1　10YR2/2　黒褐色シルト　土器細片・凝灰岩粒・植物板・礫を少量含む。

2　10YR3/2　黒褐色シルト　黒色シルトブロックを一部分含み、土器細片・炭化粒・凝灰岩粒を少量含む。

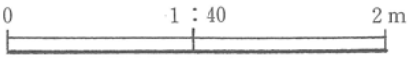
3　10YR4/4　褐色シルト　1層を薄く斑状に含み、凝灰岩粒を含む。

4　10YR3/3　暗褐色砂混じり粘土質シルト　3層をブロックで少量含み、土器片・凝灰粒を含む。

5　10YR5/6　黄褐色シルト　下部に4層を層状に薄く含み、凝灰岩粒を含む。

礫

炭化物



第16図　SK4・5・14・29・30土坑

SK 9 （遺構・第14図　遺物・第15図）

楕円形をなし、覆土上部に焼土を含み、比較的多くの遺物を含む。遺物４点を図示した。須恵器鉢（10）は高台が付き、体部下部にケズリを行う。破片がST10・12の覆土からも出土している。11は須恵器甕か鉢の底部と考えられる。外面にタタキ調整後ヘラナデを行い、内面にヘラナデを行っている。須恵器坏（12）は体部が膨らみながら立ち上がり、口縁が屈曲ぎみに外反する。赤焼土器坏（13）は器高がやや高いもので底部を欠損している。

SK25（遺構・第３図　遺物・第18図）

南北方向に長楕円形をなす。黒褐色の細砂質土をなし、炭化物・土器片が混じる。遺物は３点図示した。須恵器坏（４）は回転ヘラ切りで、底径が大きい。５は須恵器甕の口縁部破片である。赤焼土器鉢（６）はやや高めの高台が付き、器厚が厚い。破片が小さく全体の器形が良くつかめないので鉢以外の器種であることも考えられる。

SK18（遺構・第３図　遺物・第18図）

SK15と重複している。覆土に風化した凝灰岩粒が入る。遺物は須恵器坏（３）１点を図示した。回転糸切りで底径がやや大きく、体部がほぼ直線状に立ち上がり口縁部がやや外反する。ロクロ目が大きく内面に擦り痕が見られる。

SK26（遺構・第３図　遺物・第18図）

不定形な形をしている。出土遺物はプランを確認した段階で出土したものである。遺物は３点を図示した。須恵器高台付坏（８）は、底部の切り離しが、切り離し後に調整を行っているので不明である。９は須恵器双耳坏の取手で、体部方向にケズリを行っている。10は土師器甕の底部で、外面をケズリ、内面をナデ調整を行っている。

３、そのほかの遺構

SX20（遺構・第４～５図　遺物・第15図）

ST37～39・61と重複する性格不明の落ち込み遺構で、切り合い関係からST38・37より新しく、ST61・39よりも古い。性格の明瞭な遺構と異なり、本遺構単独の遺物のとらえ方は出来なかったので、図示した６点もそれぞれが時期の異なる可能性があるが、ST37から出土した須恵器甕と同一個体と考えらる遺物があることや、ST37をほぼ覆っていることから、ST37と近接した時期の遺物と考えられる。

須恵器坏（４～６）はいずれも回転糸切りである。４・５は体部が直線状に立ち上がり口縁がやや外反する。６は底部に墨書があり「奉ヵ本」と読みとることが出来る。須恵器蓋（７）は天井部にケズリを施し、内面は擦り痕が見られる。須恵器甕（８）は外面にタタキ、内面にアテ痕が見られる。第６図12とタタキやアテ痕が似ていることから同一個体と考えられる。９は赤焼土器甕の体部破片で、外面はロクロ目とケズリ、内面はロクロ目がある。この土器はSX20覆土上面として取り上げたが、調査の早い段階で取り上げたためSX20を覆っている包含層出土の可能性もある。

SD１（遺構・第17図）

Ｂ区から検出された検出長約10mの沢跡と考えられる自然遺構で、覆土は黒色のシルトに凝灰岩粒が混じる。遺物は赤焼土器や須恵器の磨滅した小片がわずかに出土した。

畝跡A・B（遺構・第17図　遺物・第18図）

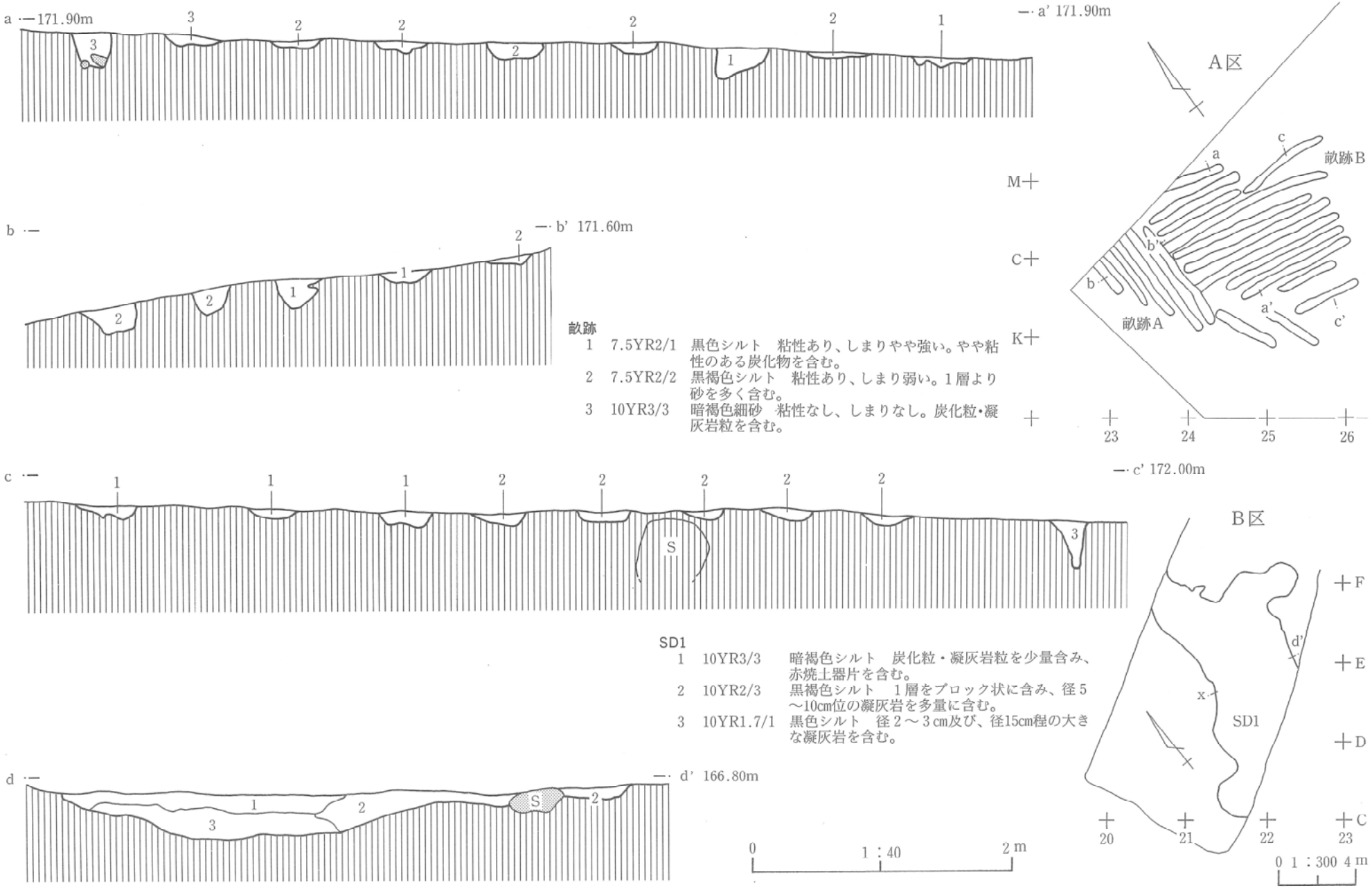
A区西側で検出された畝跡で、ほぼ磁北に沿ったAと東西方向のBがある。各条からは赤焼土器の小片が出土した。第18図12はBから出土した赤焼土器の甕である。切り合い関係からBが古い。覆土からは古代の遺物のみが出土しており古代のものと考えられる。

SX62（遺構・第３図）

A区M～N・28～29グリッドにかけて南北方向に軸を合わせるように東面・北面・西面を囲まれた東北7.5m、東西6.2mの方形の落ち込みである。底面に凹凸がある性格不明遺構である。

４、グリッド出土の遺物（第18図13～第19図18）

須恵器坏(第18図13～19)；13は回転ヘラ切りで、切り離し後ナデ調整を行っている。14・15も回転ヘラ切りで、底部調整をしていない。遺構出土の回転ヘラ切りの坏には似た形状のものはない。16～19は回転糸切りで、16は底径が大きく、17から19は底径が小さい。19は底部に墨書があり「由」と読み取れる。須恵器蓋（同図20～21）；20・21とも天井部にケズリを行っている。土師器高台付坏(第19図１)；回転糸切りで、付高台である。内面は化粧土とミガキで赤彩効果を出している。赤焼土器高台付坏(同図２)；高台と体部の接点を削り出し、体部がやや膨らみながら立ち上がり口端部がやや外反する。高台は高くない。赤焼土器鉢（同図３・４）；付高台の高い高台が付く。器厚から大振りであることが考えられる。３・４とも破片が小さく全体の器形が不明なので他の器種であることも考えられる。土師器坏(同図５)；器面の内外を丁寧に磨き、両面に黒色処理を施す。土師器椀(同図６・７)；６は口端から体部下部は横方向のミガキ、外面底部にケズリを行う。内面は口端から底部まで丁寧なミガキを行い、内外面とも黒色処理を施す。口端部外面は立ち上がり、シャープになる。胎土はST38出土の黒色土器（第７図10）と良く似る。同一個体の場合は、体部と柄の部分の接着面が見あたらないが柄付きの杓と考えられる。赤焼土器蓋（第19図８)；小破片で全体の器形がつかめない。糸切り痕があるので、糸切り痕がある面を底面とし、蓋に分類した。赤焼土器甕(同図９・10)；甕の口縁部を一括した。土師器甕(同図11・12)；11は器面の内外面にハケメ調整を施す小型の甕口縁である。12は底部に木葉痕があり、器面の内外面にハケメ調整を施す。赤焼土器埚(同図13)；口端が丸みを帯び、外面に縦方向のケズリを施す。須恵器横瓶（同図14・17）；14は閉塞部で、17は内面にロクロ目と青海波のアテ痕、外面にロクロ目とタタキ痕がある。土師器高坏(同図15)；内外面をナデ調整を行っている。須恵器壺(同図16)；短頸壷。胴部最大径が体部の上部にあり、体部下部の二ヶ所に沈線が巡る。飾り金具（同図18）；金銅製と考えられる。断面は台形をなし、正面（実測図左）には15条の細隆起線があり、間隔は不均一である。背面には装飾らしいものは見あたらない。



敲跡

1　7.5YR2/1　黒色シルト　粘性あり、しまりやや強い。やや粘性のある炭化物を含む。

2　7.5YR2/2　黒褐色シルト　粘性あり、しまり弱い。1層より砂を多く含む。

3　10YR3/3　暗褐色細砂　粘性なし、しまりなし。炭化粒・凝灰岩粒を含む。

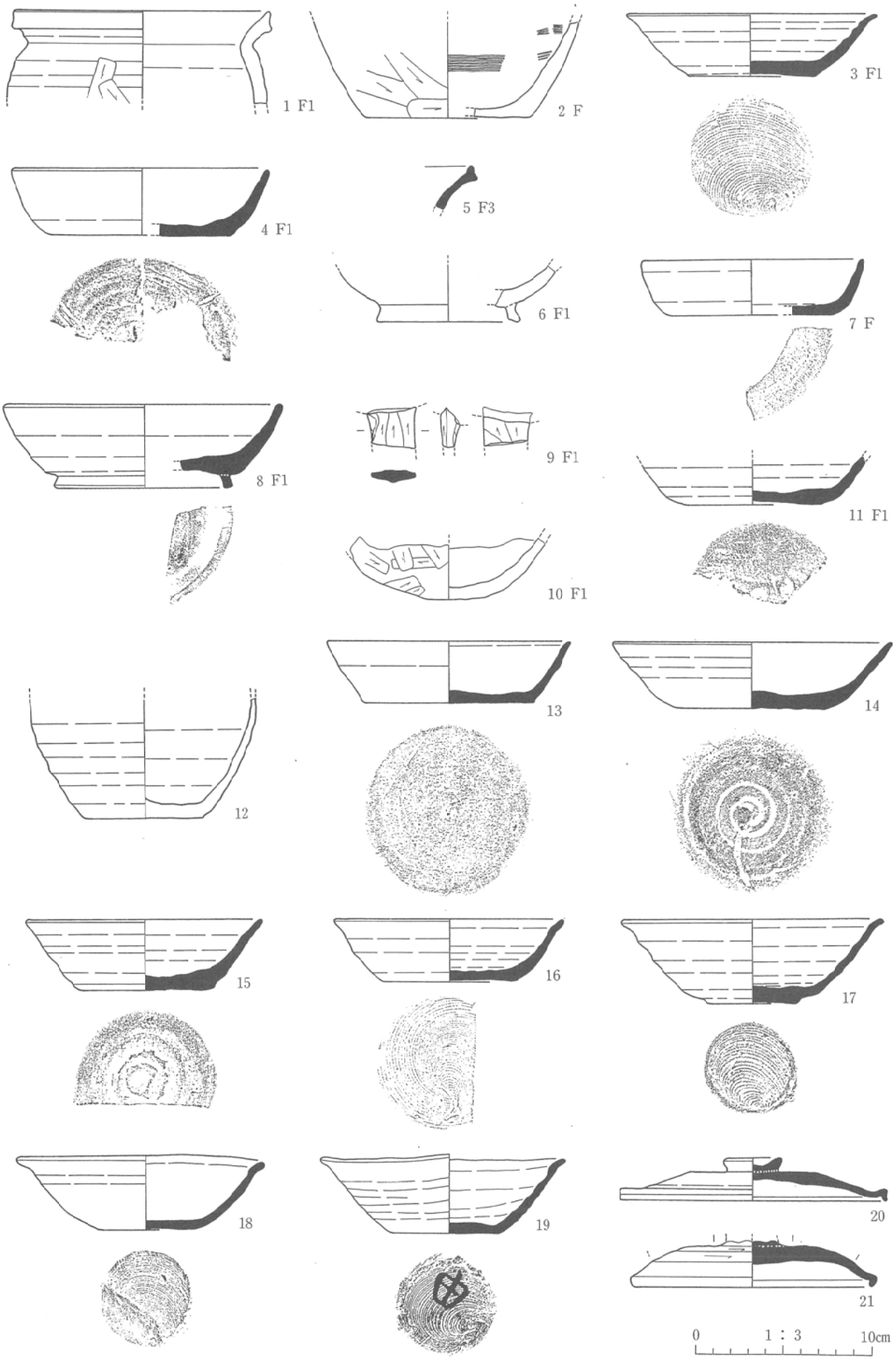
SD1

1　10YR3/3　暗褐色シルト　炭化粒・凝灰岩粒を少量含み、赤焼土器片を含む。

2　10YR2/3　黒褐色シルト　1層をブロック状に含み、径5～10cm位の凝灰岩を多量に含む。

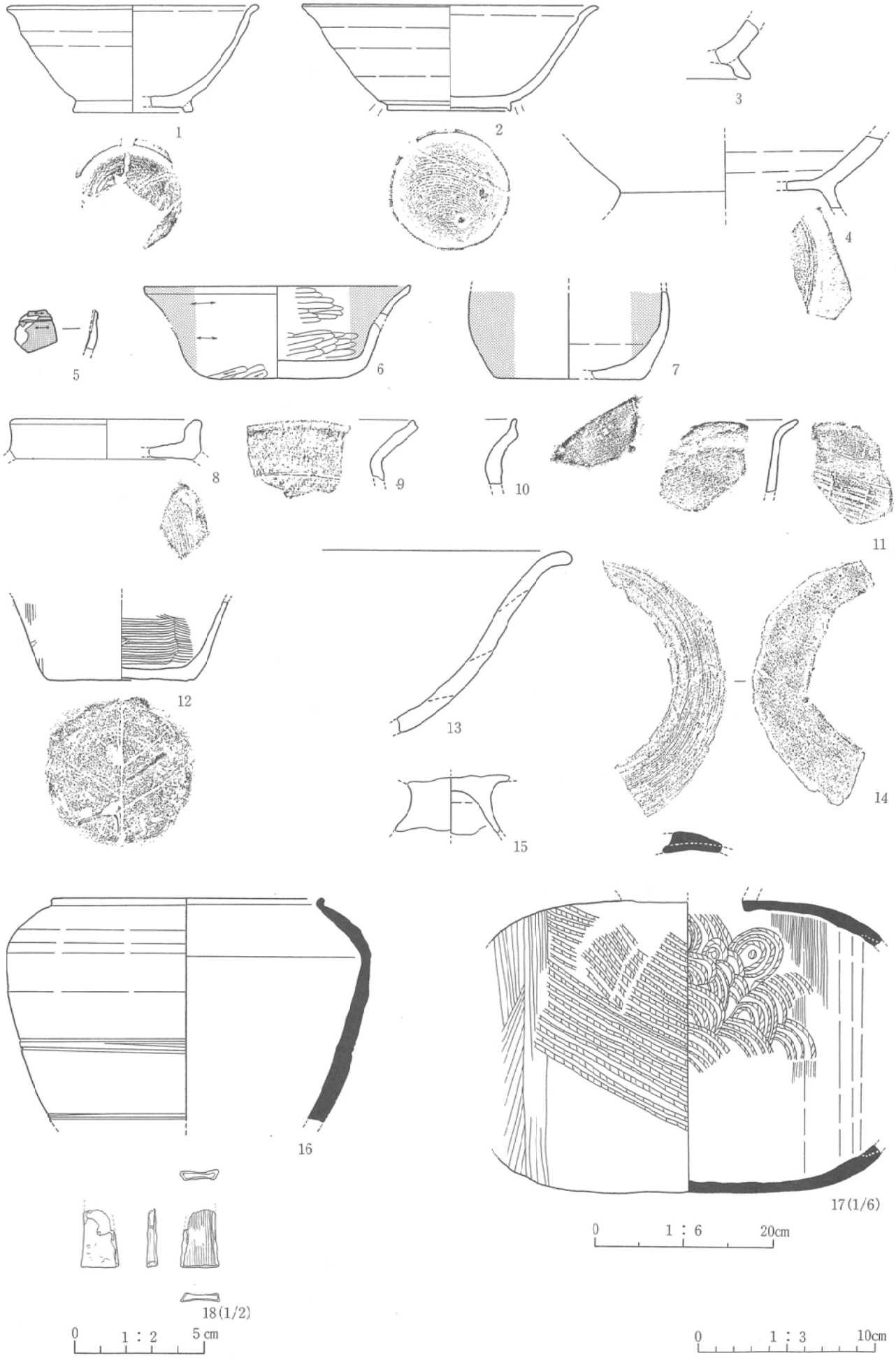
3　10YR1.7/1　黒色シルト　径2～3cm及び、径15cm程の大きな凝灰岩を含む。

第17図　敲跡・SD1　溝跡



1～2（SK５）、３（SK18）、４～６（SK25）、７（SX３）、８～10（SK26）、11（SK36）、12（畝跡Ｂ）、13～21（グリッド）

第18図　SK５・18・25・26・36・SX3・畝跡B・グリッド出土遺物実測図



1～17(グリッド)

第19図　グリッド出土遺物実測図

表―2　遺構計測表　（　）内の数値は残存値を示している。

項目 遺構番号	検出地区	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺存状態	遺構挿図	遺構図版	遺物挿図	備考
SD1	C～F―20～22	900	180	35	良好	17	13		旧沢跡
SX3	N～O―33	130	(58)	15	不良	3	巻頭1	第18図7	一部調査区外
SK4	N～O―32	233	200	36	良好	16	12		
SK5	N～O―30	223	138	37	良好	16	10・12	第18図1～2	
SK6	N～O―30	188	99	25	不良	3	10		
SK9	M―29	132	96	51	良好	14	3・10・12	第15図10～13	覆土1層焼土
SK11	L～M―30	293	154	35	良好	14	3・10		焼石多数検出
SK13	N―32	141	110	27	不良	3	巻頭1		
SK14	M～N―31～32	270	118	30	良好	16	12		
SK15	M―32	186	108	15	不良	3	巻頭1		SK18と重複
SX16	M～N―32～33	262	(120)	8	不良	3	巻頭1		一部調査区外
SK17	L～M―32	253	148	26	不良	3	巻頭1		
SK18	M―32	136	80	17	不良	3	巻頭1	第18図3	SK15と重複
SK19	L～M―31	175	160	39	良好	3	10・12		中央部焼石検出
SX20	K～L―29～30	426	346	40	不良	4	3・4	第15図4～9	ST37・38を切っている
SX24	K―30	295	142	17	不良	3	4		
SK25	J～K―30	157	83	12	不良	3	4	第18図4～6	
SK26	J―30	230	212	―	不良	3	巻頭1	第18図8～10	
SK29	J～K―31	140	118	17	良好	16	12		
SK30	J～K―31	114	90	28	良好	16	12		焼壁土坑？
SP32	K―28	58	52	―	不良	3	巻頭1		
SD33	M―28	(128)	39	―	不良	3	巻頭1		畝跡
SD34	M―28	(225)	61	―	不良	3	巻頭1		畝跡
SD35	K～N―27～28	(1,615)	110	―	不良	3	巻頭1		
SK36	K―27	150	(45)	―	不良	3	巻頭1	第18図11	
畝跡A	K～L―22～24	(203)～(630)	32～50	8～27	良好	17	巻頭1		主軸N―3°―W
畝跡B	K～N―23～26	325～830	33～52	7～22	良好	17	12	第18図12	主軸N―78°―W
畝跡C	L～N―26～28	(182)～798	34～52	―	不良	3	巻頭1		主軸N―60°―W
SX62	M～N―28～29	750	620	3～7	不良	3	巻頭1・10		底面凹凸あり

表— 3　遺物観察表(1)

挿図番号	出土 地点	出土 層位	種別	器種 分類	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	計測値(mm) 器厚	胎土	焼成	底部 切り離し	調整・成形 外面	調整・成形 内面	備考
6—1	ST37	F2	須恵器	坏 I A				4	緻密	良				海綿骨針含
2	ST37	F2	須恵器	坏 I A		(74)			緻密	不良	回転糸切り			
3	ST37	Y	須恵器	壺 I G4		59	(28)	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロケズリ	ロクロ	海綿骨針含
4	ST37	(EP44)	須恵器	蓋 I C1	(120)		(16)	5	緻密	良	不明	ロクロケズリ	ロクロ	転用硯、海綿骨針含
5	ST37	F2	須恵器	蓋 I C4	(135)		(15)	5	緻密	良	不明	ロクロ端部火ハネ	ロクロ端部火ハネ	海綿骨針含
6	ST37	F2	須恵器	蓋 I C1	(147)		(20)	5	緻密	良	不明			
7	ST37	F2	土師器	甕 II D2		(90)	(18.5)		細砂混	やや良		ケズリ	ナデ？	
8	ST37	F3	赤焼土器	甕 III D1	(230)		(127)	4	緻密	良		ロクロケズリ	ロクロ	雲母含
9	ST37	F2	赤焼土器	甕 III D9				6	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	雲母含
10	ST37	F3	赤焼土器	甕 III D		70	(79)	7	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
11	ST37	(EL42)	赤焼土器	甕 III D	胴径(142)	70	(112)	5	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母含、RP87
12	ST37	Y	須恵器	甕 I H				8	緻密	良		タタキ	アテ	海綿骨針含、RP43・50
13	ST38	Y	須恵器	坏 I A1	(152)	(94)	33	5.5	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	
14	ST38	F3	須恵器	坏 I A2	(146)	75	45	5	細砂混	やや良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
15	ST38	F5	須恵器	坏 I A3	(134)	(68)	29	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	ST12からも同一破片出土
16	ST38	F	須恵器	坏 I A		(76)	(20)	7	緻密	良	静止ヘラ切り	ロクロケズリ	ロクロ	内面底部擦痕有、海綿骨針含 内面赤色顔料付着
17	ST38	F4	須恵器	椀 I D1	(122)		(62)	5.5	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
18	ST38	F4	須恵器	壺 I G2				7	緻密	良		ヨコナデ	ヨコナデ	海綿骨針含
19	ST38	F5	須恵器	蓋 I C1	148		37	5	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロケズリ	ロクロ	海綿骨針含
20	ST38	F3	須恵器	蓋 I C1	148		(24)	5	緻密	良	回転ヘラ切り？	ロクロケズリ	ロクロ	海綿骨針含
21	ST38	Y	須恵器	蓋 I C1	139		36	6	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロケズリかナデ	ロクロ	海綿骨針含、RP106 転用硯、外面墨付着
22	ST38	Y	須恵器	蓋 I C1	135		32	5	緻密	良	不明	ロクロナデ	ロクロ	RP95、海綿骨針含 天井部に墨付着、転用硯
23	ST38	Y	須恵器	蓋 I C2	146		22	6	緻密	良	回転ヘラ切り？	ロクロケズリ	ロクロ	RP118
24	ST38	F5	須恵器	壺 I G1	胴径130	72	(89)	5.5	粗砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ？	ロクロ？	内・外・底面とも火ハネ有
7—1	ST38	(EP56)	土師器	甕 II D5	(220)		(240)	6	緻密	良		ロクロケズリ	ハケメ	RP98、海綿骨針含
2	ST38	(EP52)	土師器	甕 II D5				6	細砂混	良		ロクロハケメ・ケズリ	ロクロハケメ	海綿骨針・雲母含
3	ST38	Y	赤焼土器	甕 III D11			(30)	5	細砂混	やや良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
4	ST38	F	赤焼土器	甕 III D				7	細砂混	やや良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
5	ST38	F	赤焼土器	甕 III D1			(83)	5	石英砂混	良		ロクロ	ロクロ	雲母含
6	ST38	Y	土師器	椀 II C1		72		9	粗砂混	良		ナデ	ミガキ 黒色処理	RP97 海綿骨針・雲母含
7	ST38	Y	土師器	甕 II D7		(44)	(35)	7	粗砂混	良		ハケメ	ハケメ	底部に籾圧痕・木葉痕有
8	ST38	(EP54)	土師器	甕 II D			(75)	5.5	石英砂混	やや良		ハケメ(タテ)	ハケメ(ヨコ)	海綿骨針・雲母含、外面に被熱のため粘土が付着している
9	ST38	Y	原始灰釉陶器	水瓶	50	胴115 底71	241	4.5	緻密	良		ロクロ	ロクロ	火ハネ有、猿投窯O-10期 RP78、79、91、92
10	ST38	Y	黒色土器	取手	幅24	長129		厚21	緻密	良		ケズリ ミガキ		海綿骨針含　RP124 19—6と同一個体か
11	ST38	Y	鉄製品	刀子	幅35	長83		厚15						RM119
12	ST38	Y		櫛	巾(30)	長40		厚10						
13	ST39	Y	須恵器	坏 I A				4	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	
14	ST39	F1	須恵器	坏 I A				3	緻密	良		ロクロ	ロクロ	口唇部が屈曲している
15	ST39	Y	須恵器	坏 I A5	144	62	39	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP116
16	ST39	Y	須恵器	坏 I A5	136	54	42	4	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP73
17	ST39	Y	須恵器	坏 I A5	131	57	37	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP72
18	ST39	Y	須恵器	坏 I A2	142	56	42	4.5	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針、内面底部擦痕有 RP70
19	ST39	Y	須恵器	坏 I A2	145	70	40	5.5	緻密	不良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP71
8—1	ST39	(EL41)	須恵器	坏 I A2	(148)	(68)	39	4.5	粗砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含

表―4　遺物観察表(2)

挿図番号	出土 地点	出土 層位	種別	器種分類	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	計測値(mm) 器厚	胎土	焼成	底部 切り離し	調整・成形 外面	調整・成形 内面	備考
8-2	ST39	Y	須恵器	坏ⅠA3	(141)	62	34	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面底部擦痕有、RP117 底部墨書、海綿骨針含
3	ST39	Y	須恵器	坏ⅠA2	140	63	40.5	5	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP89
4	ST39	Y	須恵器	坏ⅠA5	(132)	58	35.5	5	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面底部赤色顔料付着、海綿骨針含
5	ST39	Y	須恵器	高台付坏ⅠB1	(136)	78	47	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP115
6	ST39	(EL41)	須恵器	稜椀ⅠE	(124)	(68)	53	4	緻密	良	回転ヘラ切り？	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
7	ST39	F5	須恵器	蓋ⅠC3	140		27	6	緻密	良	回転糸切り	ロクロ ナデ、ケズリ	ロクロ	内面転用硯、海綿骨針含
8	ST39	Y	須恵器	蓋ⅠC3	146		31	5	緻密	良		ロクロ ケズリかヘラナデ	ロクロ	内面転用硯、RP85
9	ST39	Y(焼土)	須恵器	蓋ⅠC3	134		25	7	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ ケズリ	擦痕有り	海綿骨針含、RP69
10	ST39	Y	須恵器	蓋ⅠC3	138		35	6	細砂混	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含、転用硯、RP75
11	ST39	Y	須恵器	蓋ⅠC3	122		25	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ ケズリ、ナデ	ロクロ	海綿骨針含、RP74
12	ST39	Y(焼土)	須恵器	蓋ⅠC4	133		36	5	緻密	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含、ゆがみ・外面端に墨書有、内面転用硯？ RP80
13	ST39	Y	須恵器	蓋ⅠC1	(144)		(33)	6	細砂混	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含
14	ST39	Y	赤焼土器	甕ⅢD2	(200)		(42)	6	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	
15	ST39	Y	赤焼土器	甕ⅢD9			(55)	5	緻密	良		ロクロ	ロクロ	雲母含、RP105
16	ST39	F1	赤焼土器	甕ⅢD4			(69)	5	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	雲母・海綿骨針含
17	ST39	(EL41)	赤焼土器	甕ⅢD1			73	6.5	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	雲母・海綿骨針含
18	ST39	Y	赤焼土器	甕ⅢD12	頸部(103)	65	(59)	4.5	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母含、RP81
19	ST39	Y	赤焼土器	甕ⅢD2	(202)	胴径(180)	(127)	7	緻密	良		ロクロ ハケメ？	ロクロ	雲母・海綿骨針含 RP86
20	ST39	F1	赤焼土器	甕ⅢD3	(202)	頸部(175)	(60)	7	細砂混	やや良		ロクロ ケズリ	ロクロ	雲母・海綿骨針含
21	ST39	F1	土師器	甕ⅡD1		84	(45)	7	粗砂混	良		ケズリ	ハケメ	底部形態が非常に不安定で直立しにくい。RP9
22	ST43	Y	須恵器	坏ⅠA6	(140)	(94)	41	5	緻密	やや良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、外面火はね有 RP94
23	ST43	Y	土師器	坏ⅡA1	(141)	(68)	57	4	細砂混	良	マメツの為不明	ロクロ	ミガキ 黒色処理	内黒土器、雲母含、RP93
9―1	ST43	Y	須恵器	坏ⅠA2	130	64	35	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP84
2	ST43	Y	須恵器	坏ⅠA2	142	73	39	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP76
3	ST43	Y	須恵器	坏ⅠA5	146	75	41	4	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP121
4	ST43	Y	須恵器	坏ⅠA				6	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	
5	ST43	(EP51)	須恵器	坏ⅠA		66	(25.5)	7	細砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
6	ST43	Y	赤焼土器	甕ⅢD2	(230)		(55)	6	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
7	ST43	(EL45)	赤焼土器	甕ⅢD1	(256)		(79)	6	石英砂・雲母混	やや良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
8	ST43	Y	土師器	甕ⅡD5	(200)		(187)	8	緻密	良		ロクロ ケズリ	ハケメ	ST40F・ST37Fからも破片出土。海綿骨針含
9	ST43	F	赤焼土器	甕ⅢD10	(128)		(74)	5	粗砂混	やや良		ロクロ	ロクロ	雲母含
10	ST43	(EL45)	赤焼土器	甑ⅢE			(153.3)	(10)	緻密	良		ロクロ	ロクロ ナデ	海綿骨針含、外面に被熱のため粘土付着
11	ST43	(EL45)	赤焼土器	塊ⅢG		(156)	(41.5)	10	粗砂混	やや良		ケズリ タタキ	ナデかアテ	海綿骨針含
12	ST40	F2	須恵器	坏ⅠA6	(149)	(90)	45	5	細砂混	不良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
13	ST40	F1	須恵器	坏ⅠA6	(136)	(89)	40.5	6	緻密	良	ヘラ切り	ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含
14	ST40	F1	須恵器	坏ⅠA4	(133)	55	45	4	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ 体部中央に火はね	ロクロ 体部中央に火はね	海綿骨針含
15	ST40	F1	須恵器	坏ⅠA		(66)	(20)	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
16	ST40	F1	須恵器	坏ⅠA7	(130)		(50)	45	緻密	不良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
10-1	ST40	F2	須恵器	坏ⅠA		85	(15)	5	粗砂混	不良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
2	ST40	F2	須恵器	坏ⅠA		(74)		5	緻密	良	回転ヘラ切り			海綿骨針含
3	ST40	(EP47)	須恵器	高台付坏ⅠB5	(155)	(112)	37	4.5	細砂混	やや良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
4	ST40	F3	須恵器	坏ⅠA				4	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
5	ST40	Y	須恵器	坏ⅠA		(74)	(25)	4	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	
6	ST40	Y	須恵器	椀ⅠD3		(74)	(25)	5.5	緻密	不良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	

表— 5　遺物観察表(3)

挿図番号	出土 地点	出土 層位	種別	器種 分類	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	計測値(mm) 器厚	胎土	焼成	底部 切り離し	調整・成形 外面	調整・成形 内面	備考
10-7	ST40	Y	須恵器	椀ＩＤ3		(70)		5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	
8	ST40	Y	須恵器	椀ＩＤ2			(36)	5	緻密	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
9	ST40	F2	須恵器	壺ＩＧ4		78	(45)	4.5	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	付高台
10	ST40	F1	須恵器	壺ＩＧ4		57	(32)	3.5	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロ ナデかケズリ	ロクロ	海綿骨針含、付高台
11	ST40	F1	須恵器	蓋ＩＣ5	(158)		(34)	5	緻密	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含、内面擦痕有
12	ST40	F2	須恵器	蓋ＩＣ	(161)		(20)	5	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	
13	ST40	Y	須恵器	蓋ＩＣ6	136	50	21	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP103
14	ST40	F1	須恵器	甕ＩＨ1	(162)	頸径(137)	(72)	10	緻密	やや良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
15	ST40	F1	須恵器	壺ＩＧ			(49)	5	緻密	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含、ゆがみ有
16	ST40	Y	須恵器	壺ＩＧ3	(120)	胴径(260)	(49)	6	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	耳の部分火はね・ケズリ有り
17	ST40	F1	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ		74	(71)	8	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母含
18	ST40	(EL46)	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ1	140	74	135	4.5	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP120
19	ST40	F1	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ1？			(25)	6	緻密	良				海綿骨針・雲母含
20	ST40	Y	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ11	105	50	62	4	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含　RP90
21	ST40	F1	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ5	(190)		(75)	5	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
22	ST40	Y	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ6			(56)	6	粗砂混	良		ロクロ	ロクロ	
23	ST40	F2	土師器	甕ＩＩＤ1		(78)	(32)	6	粗砂混	良		ケズリ	ナデ、ハケメ	海綿骨針・雲母含
24	ST40	F1	土師器	甕ＩＩＤ2		(83)	(13)	11	細砂混	やや良		ケズリ		底部木葉痕有
25	ST40	F1	土師器	甕ＩＩＤ2		(90)	(14)	7	細砂混	良				雲母・海綿骨針含
11-1	ST40	Y	土師器	甕ＩＩＤ1			25	5	細砂混	良		ケズリ	ハケメ？	雲母・海綿骨針含、底部不安定
2	ST10	F1	須恵器	坏ＩＡ5	140	60	33	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面底部に赤色顔料付着、海綿骨針含
3	ST10	F1	須恵器	坏ＩＡ5	(130)	53	40	4	緻密	良		ロクロ	ロクロ	
4	ST10	F1	須恵器	坏ＩＡ1	138	65	32	4	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP29
5	ST10	F	須恵器	坏ＩＡ		(72)	(28)	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面底部に赤色顔料付着
6	ST10	F1	須恵器	高台付坏ＩＢ2	(150)	66	56	5.5	粗砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ		海綿骨針含、RP2
7	ST10	Y	須恵器	甕ＩＨ3		(168)	(37)	9	緻密	良		ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	海綿骨針含
8	ST10	F2	須恵器	鉢ＩＦ1	(238)		(150)	5	緻密	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	海綿骨針含、RP96
9	ST10	F1	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ	胴径(146)	74	(106)	6	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	表面全体がマメツしている
10	ST10	Y(焼土)	赤焼土器	甕ＩＩＩＤ1	150	胴径(144)	(85)	4	細砂混	やや良		ロクロ	ロクロ	雲母・海綿骨針含、RP30
11	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	130	50	42	3	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP27
12	ST12	F1	須恵器	坏ＩＡ5	142	52	48	40	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP23
13	ST12	F3	須恵器	坏ＩＡ5	130	52	41	3	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP32
14	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	146	58	44	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP23
15	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ7	(138)	(48)	37	3.5	緻密	不良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP34
12-1	ST12	F3	須恵器	坏ＩＡ5	140	56	45	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP26・37
2	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	140	60	40	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	焼成不良のため全体黄褐色を呈する。RP82
3	ST12	F1	須恵器	坏ＩＡ2	144	58	45	4	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	焼成不良のため底部付近赤褐色を呈する。RP19・40
4	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	144	58	43	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP19・26・40
5	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	135	49	39	3	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP28
6	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	142	56	43	3	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP26
7	ST12	F1	須恵器	坏ＩＡ2	(140)	(60)	(50)	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面墨様の付着物有り RP21・39
8	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	(139)	(54)	44	3	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP34・41
9	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	146	54	42	4	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP34
10	ST12	F2	須恵器	坏ＩＡ5	136	56	40	3	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	口唇部はロクロ回転時に(？)折り曲げている。RP23・41

表―6　遺物観察表(4)

挿図番号	出土 地点	出土 層位	種別	器種分類	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	底部 切り離し	調整・成形 外面	内面	備考
12-11	ST12	F1	須恵器	坏ⅠA5	(146)	58	46.5	4	緻密	不良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP19・40
12	ST12	Y	須恵器	坏ⅠA	(140)	58	(40)	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP26・35
13	ST12	Y	須恵器	坏ⅠA2	(142)	(76)	37	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面底部赤色顔料付着
14	ST12	Y	須恵器	坏ⅠA5	(150)	56	48.5	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	墨書「由」、RP38・40
15	ST12	Y	須恵器	坏ⅠA2	136	52	45	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP4・39
16	ST12	Y	須恵器	高台付坏ⅠB3	153	74	55	3	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP83
17	ST12	Y	須恵器	高台付坏ⅠB3	152	71	60	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP20・41
18	ST12	F1	須恵器	高台付坏ⅠB3	(135)	(54)	55	3.5	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP25
13-1	ST12	F3	須恵器	高台付坏ⅠB3	(150)	68	53	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP20・36
2	ST12	F2	須恵器	高台付坏ⅠB3	146	66	56	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP28
3	ST12	F1	須恵器	高台付坏ⅠB3	(164)	70	56	4	細砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP21
4	ST12	Y	土師器	坏ⅡA3	160	30	65	4	緻密	良	回転糸切り後ナデ調整	ロクロケズリ	ロクロ	
5	ST12	F1	土師器	坏ⅡA2	(145)	68	(7.2)	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロナデ、ミガキ	内面黒色処理、RP24
6	ST12	Y	土師器	高台付坏ⅡB1	(130)	62	(50)	4	細砂混	良	回転糸切り	ロクロケズリ	ロクロミガキ	内面黒色処理、海綿骨針含、ケズリ高台？、RP33
7	ST12	Y	須恵器	蓋ⅠC7				4.5	緻密	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
8	ST12	F1	土師器	高台付坏ⅡB1		62	14	8	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロミガキ	内面黒色処理、つまみ出し高台？
9	ST12	F3	須恵器	鉢ⅠF2	(360)	(96)	(88)	10	緻密	良	回転糸切り後ナデ調整?	ロクロケズリかナデ	ロクロ、ナデ	付高台、RP32
10	ST12	F2	赤焼土器	坏ⅢA2	(100)	(58)	26	7	粗砂混	不良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母含、RP22
11	ST12	F2	須恵器	甕ⅠH4	(230)	(62)	(119)	6.5	細砂混	やや良	不明	ロクロケズリ？	ロクロハケメ	海綿骨針含
12	ST12	Y	赤焼土器	甕ⅢD	(112)	66	(42)	5	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母含
13	ST12	Y	赤焼土器	甕ⅢD1				6	細砂混	やや良		ロクロナデ	ロクロナデ	海綿骨針・雲母含
14	ST12	Y	赤焼土器	鍋ⅢG2				8	細砂混	良		ロクロヘラナデ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
15	ST12	F2	粘土塊			36	31	22						破熱して焼き固まった粘土塊、RP22
16	ST12	Y	赤焼土器	鍋ⅢG3				6.5	細砂混	やや良		ロクロ	ロクロ	
17	ST12	Y	赤焼土器	鍋ⅢG1	(290)			9	細砂混	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針・雲母含
15-1	ST61	(EL53)	須恵器	蓋ⅠC3	(160)		29	6	緻密	良	不明	ロクロケズリ	ロクロ	RP123
2	ST61	(EL53)	土師器	甕ⅡD5				7	細砂混	やや良		ロクロケズリ	ロクロハケメ	雲母含、RP105
3	ST61	(EL53)	土師器	甕ⅡD5		(124)	(19.6)	6.5	細砂混	やや良		ケズリ	ハケメ、ナデ	海綿骨針・雲母含
4	SX20	F1	須恵器	坏ⅠA1	(144)	(74)	(31)	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	RP46
5	SX20	F1	須恵器	坏ⅠA1	(137)	62	36	4	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP48
6	SX20	F1	須恵器	坏ⅠA		50		5.5	細砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、墨書「奉」？
7	SX20	F1	須恵器	蓋ⅠC			(20)	8	細砂混	良	回転糸切り	ロクロケズリ	ロクロ	海綿骨針含、内面転用硯
8	SX20	F1	須恵器	甕ⅠH2	(190)	頸部(166)	(80)	8	緻密	良		平行タタキ	アテ	海綿骨針含、RP42、6-12と同一個体か
9	SX20	F1	赤焼土器	甕ⅢD				7	緻密	やや良		ロクロケズリ	ロクロ	海綿骨針・雲母含、RP45
10	SK9	Y	須恵器	鉢ⅠF2	(274)	130	124	4.5	緻密	良	ロクロケズリ	ロクロケズリ	ロクロナデ	海綿骨針含、ST12F1・ST10F1からも破片出土、RP27・67
11	SK9	Y	須恵器	甕ⅠH3		(138)	(36)	10	緻密	良		タタキヘラナデ	ヘラナデ	
12	SK9	F1	須恵器	坏ⅠA5	(154)	57	47	5	細砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、内面にスス様の付着物有、RP65
13	SK9	Y	赤焼土器	坏ⅢA1	(128)		(48)	(4)	緻密	良		ロクロ	ロクロ	
18-1	SK5	F1	赤焼土器	甕ⅢD7	(142)		80	8	細砂混	良		ロクロケズリ	ロクロハケメ	雲母・海綿骨針含、RP52
2	SK5	F	土師器	甕ⅡD2	(142)	(92)	(54.5)	8	細砂混	良		ケズリ	ハケメ	海綿骨針・雲母含
3	SK18	F1	須恵器	坏ⅠA10	140	70	36	5	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面擦痕有、RP5
4	SK25	F1	須恵器	坏ⅠA6	(144)	(100)	38	5	粗砂混	やや良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP60
5	SK25	F3	須恵器	甕ⅠH				3	緻密	良		ロクロ	ロクロ	
6	SK25	F1	赤焼土器	鉢ⅢF	(120)	(80)	(32)	8	細砂混	良				付高台

表―7　遺物観察表(5)

挿図番号	出土 地点	出土 層位	種別	器種分類	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	計測値(mm) 器厚	胎土	焼成	底部 切り離し	調整・成形 外面	調整・成形 内面	備考
18-7	SX3	F	須恵器	坏ⅠA6	(124)	(92)	32	5	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	
8	SK26	F1	須恵器	高台付坏ⅠB4	(156)	(100)	48	7	細砂混	良	ナデ調整のため不明	ロクロ	ロクロ	付高台、海綿骨針含 RP59
9	SK26	F1	須恵器	双耳坏ⅠJ		幅(25)	長13	7	緻密	良		ケズリ	ケズリ	海綿骨針含
10	SK26	F1	土師器	甕ⅡD3			(37)	7	粗砂混	やや良		ケズリ	ナデ	雲母含、RP57
11	SK36	F1	須恵器	坏ⅠA	(128)	(78)	(25)	5	緻密	良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP13
12	L29	畝跡B	赤焼土器	甕ⅢD	胴径(126)	67	(68)	5	緻密	やや良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母・海綿骨針含
13	M―33		須恵器	坏ⅠA8	(136)	95	35	4	細砂混	良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	
14	K―27		須恵器	坏ⅠA9	(155)	80	38	4	細砂混	やや良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP14
15	K―27		須恵器	坏ⅠA2	(134)	78	40.5	5	緻密	やや良	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	RP16
16	J―27		須恵器	坏ⅠA10	(130)	(74)	35	4	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP11
17	K～L―29		須恵器	坏ⅠA4	(146)	51	47.5	4	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP63・64
18	L―29		須恵器	坏ⅠA5	140	52	42	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	海綿骨針含、RP64
19	K―29		須恵器	坏ⅠA10	136.5	58	45	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	墨書「由」
20	J―32		須恵器	蓋ⅠC2	(150)		24	5	緻密	良	回転糸切り	ロクロ ケズリ	ロクロ	
21	L―29		須恵器	蓋ⅠC1	(135)		(26)	7	緻密	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	内面擦痕有、海綿骨針含
19-1	M―32		土師器	高台付坏ⅡB2	(144)	(70)	(61)	4	緻密	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	内面化粧土による赤彩とミガキ、付高台、海綿骨針含
2	K～L―29		赤焼土器	高台付坏ⅢB	165	70	60	5	細砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ ケズリ	ロクロ	内面底部にウルシ様の付着物、RP53
3	J―29		赤焼土器	鉢ⅢF		(162)	(33.5)	6	緻密	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
4	L―25		赤焼土器	鉢ⅢF		頸径(122)	(40)	9	細砂混	良	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	雲母含
5	K―27		土師器	坏ⅡA4				4.5	緻密	良		ミガキ	ミガキ	両面黒色処理、RP16
6	J―30		土師器	椀ⅡC3	(150)	(80)	(52)	6	緻密	良		ミガキ ケズリ	ミガキ	両面黒色処理、7―10と同一個体？、海綿骨針含、RP100
7	L―24		土師器	椀ⅡC2		(82)	(50)	7	緻密	良		ミガキ(横方向)	ミガキ	内・外面黒色処理、海綿骨針含
8	J―30～31		赤焼土器	蓋ⅢC	(108)	(97)	23	8.5	細砂混	やや良	回転糸切り	ロクロ		海綿骨針含
9	N―29		赤焼土器	甕ⅢD8				7	細砂混	良		ロクロ ハケメ	ハケメ	雲母・海綿骨針含
10	J―29		赤焼土器	甕ⅢD1			(37)	6	緻密	良		ロクロ	ロクロ	海綿骨針含
11	J―30		土師器	甕ⅡD4			(40)	5	細砂混	やや良		ハケメ	ハケメ	雲母含
12	K―29		土師器	甕ⅡD2		84	(46)	5	粗砂混	良		ハケメ	ハケメ	底部木葉痕有、雲母・海綿骨針含
13	M～N―29		赤焼土器	鍋ⅢG4			(138)	9.5	石英砂混	良		ロクロ ケズリ	ロクロ	雲母含、RP56
14	J―30、K―29		須恵器	横瓶閉そく部ⅠI					粗砂混	良				火はね有、RP100
15	L―27		土師器	高坏ⅡE		頸径44	(33)	4	粗砂混	やや良		ナデ	ナデ	雲母・海綿骨針含、RP17
16	J―29、K―30		須恵器	壺ⅠG2	(153)	胴径(202)	(175)	9	緻密	良		ロクロ	ロクロ ハケメ	海綿骨針含
17	N―33		須恵器	横瓶ⅠI	長(300)		(220)	10	粗砂混	良		ロクロ タタキ	ロクロ アテ	
18	L―28		金属製品	飾金具？	長(21)	幅15		3						金銅製？(刀子用？)

Ⅳ　調査のまとめ

１、遺跡の立地と遺構について

遺跡が山間地の谷底にあり、今までの知見にあるような沖積地の微高地に立地することが多かった奈良・平安時代の遺跡の立地と異なる。また、発掘所見からも明らかなように、たびたび地滑りや崩壊に遭うなど、居住するには不適な所にあるといえるが、８棟もの竪穴住居跡が存在し、規模が一辺が2.2mから大きいものでも3.6mと、全般的に見るとやや小振りであるもの特徴である。また、住居跡の切り合いは、ST38を基準に見た場合にST38→ST37→SX20、ST38→SX20→ST61→ST39、ST38→ST43→ST61→ST39、ST38→ST43→ST40→ST39という４ヶ所の切り合いが認められる。これを遺構の切り合いと遺物の接合関係から整理すると、古い順にST38→ST43→ST40→ST37→SX20→ST61→ST39となると思われる。ST12は他の遺構との切り合い関係はないが、出土した遺物からST39に後続すると考えられる。

２、遺物と遺構の時期について

もっとも多く出土した遺物は須恵器で、次いで赤焼土器となり土師器がもっとも少ない。特に須恵器は多種多様な器種が出土したが、赤焼土器は煮沸形態に器種が偏る（供膳形態の坏、高台付坏は極端に少ない）など、種別と器種によるばらつきがある。

今回出土した土器の胎土と種別と器形の関係を述べると、すべての種別と器種に共通しているのは海綿骨針である。赤焼土器・土師器の甕や壺などの大型品には雲母や粗砂が見られるが、須恵器の甕や壺などの大型品には粗砂はやや含むことはあるものの、雲母は含まない。小型品に関しても、赤焼土器や土師器は雲母を含むことはあるが、須恵器は細砂を含むことはあっても雲母を含むことはない。このことは、胎土のベースとなる粘土は須恵器・赤焼土器・土師器とも共通の粘土を用いていることが考えられる。そして須恵器・土師器・赤焼土器の種別（焼成方法の違い）と器種によって混和剤（雲母・粗砂・細砂など）を選択していることが考えられる。

土器の分類については、須恵器をⅠ、土師器をⅡ、赤焼土器をⅢとし、底部の切り離しは回転ヘラ切りをa、回転糸切りをｂとした。それぞれの種別と器種については表―８～９の土器分類表と、第20図の土器分類図にまとめてある。また表―10には各遺構ごとの土器組成表をまとめてある。

須恵器坏の内面底部に赤色顔料が付着しているものが見受けられ、これらの外面には赤色顔料が付着していないことを考えると坏を赤色顔料の容器に転用したと考えられる。須恵器坏以外で赤色顔料が付着したものは出土していない。また、須恵器の坏や蓋の内面に擦り痕が認められるものも比較的多く出土した。内訳は、ST37蓋１・ST38蓋１坏１・ST39蓋３坏２・ST40蓋１・SX20蓋１で合計10点である。

明らかな移入品として、ST38出土の猿投窯産の原始灰釉陶器（第７図９）がある。原始灰釉陶器に関しては須恵器の範疇でとらえる考え方が多いが、本稿では焼成中の燃料の灰が器面に付着して釉化する現象を意図的に利用して製作したものとしてとらえた。

表一 8　土器分類表(1)

注）切り離しで、aは回転ヘラ切りを示し、bは回転糸切りを示す。また底部形態や切り離し等の？は推定を示す。

土器区分	器種	分類(器種)	ロクロ使用	口縁部～体部形態	外面調整	内面調整	底部形態	切り離し
須恵器 I	坏 A	1	使用	体部がやや外反し、器高が低い。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
		2	使用	体部がほぼ直線に立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
		3	使用	体部が内湾し、器高が低い。	ロクロ	ロクロ	平底	b
		4	使用	体部が円柱状に立ち上がり体部がほぼ直線で、口縁が外反する。	ロクロ	ロクロ	平底	b
		5	使用	体部がやや内湾し、口縁が外反する。	ロクロ	ロクロ	平底	b
		6	使用	底部と体部の境が丸みを帯び、体部が直線に立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a b
		7	使用	体部が内湾しながら立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	b
		8	使用	底部と体部の境が角をなし、体部が直線に立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a
		9	使用	底部と体部の境が丸みを帯び、体部が緩やかに立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	平底	a
		10	使用	体部が直線に立ち上がり、口縁が外反し、器高が低い。	ロクロ	ロクロ		b
	高台付坏 B	1	使用	体部がやや内湾しながら立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
		2	使用	体部が直線に立ち上がり、器高が高い。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
		3	使用	体部が緩やかに立ち上がり、口縁が外反する。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
		4	使用	体部が内湾し、底径が広い。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
		5	使用	体部が直線に立ち上がり、底径が広い。	ロクロ	ロクロ	付高台	a
	蓋 C	1	使用	天井がほぼ平らで、口縁端が直立か内反する。	ロクロ ケズリ、ナデ	ロクロ		aが多い
		2	使用	天井と体部の境が角をなし、口縁部がくぼんで口縁端部が直立。	ロクロ ケズリ	ロクロ		a？
		3	使用	天井と体部の境が不明瞭で、口縁端部を折り曲げる。	ロクロ ケズリ	ロクロ		b
		4	使用	天井と体部の境が不明瞭で、口縁端部が角をなし内傾する。	ロクロ ケズリ	ロクロ		b？
		5	使用	天井部が平らでなく、口縁端部が内傾する。	ロクロ ケズリ	ロクロ		b？
		6	使用	つまみが無く、口縁端部が内反する。ケズリ等は無い。	ロクロ	ロクロ		b
		7	使用	口縁端部が丸みを帯びる。	ロクロ	ロクロ		
	椀 D	1	使用	身が深く、口縁がやや外反する。	ロクロ	ロクロ	不明	不明
		2	使用	身が浅く、体部が内湾する。	ロクロ	ロクロ	不明	不明
		3	使用	底部。体部が内湾しながら立ち上がる。	ロクロ	ロクロ	やや上げ底	b
	稜椀	(E)	使用	体部に稜を持つもの。	ロクロ	ロクロ	付高台	a？
	鉢 F	1	使用	口縁部が屈曲し、丸みを持つ体部で、ケズリを施す。	ロクロ、ケズリ	ロクロ	不明	不明
		2	使用	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁が外反する。	ロクロ ケズリ	ロクロ ナデ	付高台	aの後ナデ調整？
	壺 G	1	使用	最大径が体部上半にあり、口径が小さいもの。	ロクロ	ロクロ	平底	b
		2	使用	最大径が体部上半にあり、口径が大きいもの。	ロクロ 沈線	ロクロ	不明	不明
		3	使用	球胴形の体部で耳を持つ。	ロクロ	ロクロ	不明	不明
		4	使用	台を持つ壺で、大小がある。	ロクロ、ケズリ	ロクロ	高台付	a b
	甕 H	1	使用	口縁部が外側に開き、口縁端部が外傾する。	ロクロ	ロクロ	丸底？	
		2	使用	口縁部が直立し、口縁端部がリング状の膨らみを持つ。	ロクロ タタキ	ロクロ アテ痕	丸底？	
		3	使用？	底部。体部が直線に立ち上がる。	ロクロ？、ケズリ、タタキ	ロクロ？ ナデ	平底	圧痕
		4	使用？	底部。体部が丸みを帯びて立ち上がる。	ロクロ？、ケズリ	ロクロ？、ハケメ	平底	圧痕
	横瓶	(I)	使用	横瓶を一括した。	タタキ	アテ痕		
	双耳坏	(J)		双耳坏を一括した。	耳の外ケズリ			
土師器 II	坏 A	1	使用？	底部と体部の境が丸みを帯び、体部もやや丸みを帯びて立ち上がる。	磨滅で不明	ミガキ 黒色処理	平底	不明
		2	使用	底部と体部の境が角をなして立ち上がる。	ロクロ、上半に横ナデ	ミガキ、黒色処理	平底	b
		3	使用	体部の立ち上がりの部分にケズリが入り、疑似高台となる。	ロクロ、下部に回転ケズリ	ミガキ、黒色処理？	平底	bの後にナデ調整？
		4	使用	全体の器形は不明。	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理	不明	不明
	高台付坏 B	1	使用	底部と体部の境をつまむか削るかして低い高台を持つもの。高台の部分がはっきり分かるものと分からないものがある。	ロクロ	ロクロ ミガキ 黒色処理	削り出し高台	b
		2	使用	体部が緩やかに内湾して口縁がやや外反する。	ロクロ	ロクロ ミガキ	付高台	b
	椀 C	1	不使用	体部が緩やかに立ち上がる。		ミガキ、黒色処理	平底	圧痕
		2	使用？	体部が内湾しながら立ち上がる。	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理	平底	bの後ナデ調整？
		3	不使用	体部が外反しながら立ち上がり、口端が面をなして直立するもの。(他器種も考えられる)	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理	丸底風平底	ケズリ

表一 9　土器分類表(2)

土器区分	器種	分類(器種)	ロクロ使用	口縁部～体部形態	外面調整	内面調整	底部形態	切り離し
土師器 II	甕 D	1	不使用?	底部中央が凸になり直立困難なもの。	ケズリ	ハケメ	丸底	ケズリ
		2	不使用	平底で、体部がほぼ直線に立ち上がる。	ケズリ	ハケメ	平底	圧痕
		3	不使用	丸底で直立困難なもの。	ケズリ	ナデ	丸底	ケズリ
		4	不使用	体部と口縁部の境が屈曲するもの。	ハケメ	ハケメ		
		5	使　用	体部が湾曲し、体部と口縁の境が屈曲するもの。	ケズリ	ハケメ		
	高坏	(E)		高坏を一括した。	ナデ	黒色処理の痕跡有り。		
赤焼土器 III	坏 A	1	使　用	体部が直線状に立ち上がるもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	b?
		2	使　用	小型で器高が低く底径が広く、体部と口縁の境が屈曲するもの。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	高台付坏	(B)	使　用	体部がやや内湾し、口縁がやや外反するもの。削り出しによる低い高台を持つ。	ロクロ	ロクロ	削り出し高台	b
	蓋	(C)	使　用	蓋と考えられるものを一括した。				b
	甕 D	1	使　用	体部と口縁の境が屈曲し、口端が面を持つもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		2	使　用	体部と口縁の境が屈曲し、口縁と口端の境に稜や沈線の区画があるもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		3	使　用	体部と口縁の境が直角に曲がり、口端が直立するもの。	ロクロ ケズリ	ロクロ	平底?	
		4	使　用	体部が直立し、体部と口縁の境が湾曲して口端が面をなし、直立するもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		5	使　用	体部と口縁の境が不明瞭で、口端がやや外反するもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		6	使　用	体部と口縁の境が緩やかに屈曲し、口端が外傾して口端下部が出っ	ロクロ	ロクロ	平底?	
		7	使　用	体部と口縁の境が屈曲し口端が外傾し、器高が厚い。	ロクロ ケズリ	ロクロ	平底?	
		8	使　用	体部と口縁の境が屈曲し、口端は面を持つが上部がつまみ上がらないもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		9	使　用	体部と口縁の境が屈曲し、口端がつまみ上がるもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		10	使　用	体部と口縁の境が緩やかに屈曲し、口端がやや角張るもの。	ロクロ	ロクロ	平底?	
		11	使　用	体部と口縁の境が屈曲し、口端が丸みを持つもの。口径の割に器高が低い。	ロクロ	ロクロ	平底	b
		12	使　用	体部と口縁の境が屈曲し、口縁が外反して口端が内湾すると考えられるもの。	ロクロ	ロクロ	平底	b
	甑	(E)	使　用	甑を一括した。	ロクロ	ロクロ、ナデ		
	鉢	(F)	使　用	高台付坏よりも高い高台を持ち器厚が厚いもの。	ロクロ	ロクロ	付高台	b
	鍋 G	1	使　用	体部と口縁の境が緩やかに屈曲し、口端が外傾するもの。	ロクロ	ロクロ		
		2	使　用	体部と口縁の境が明瞭でなく、口端が外傾するもの。	ロクロ、ナデ	ロクロ		
		3	使　用	丸みを帯びた口端が外側に丸まるもの。	ロクロ	ロクロ	丸底?	
		4	使　用	体部と口縁の境が無く、口縁が外反する。	ロクロ、ケズリ	ロクロ	丸底?	

第７図９の水瓶は猿投窯編年の「折戸―10窯式」のもので、実年代に関しては生産地と消費地とでは開きがあるが、８世紀第４四半期から西暦800年前後としてとらえておきたい。また、寺院や官衙と考えにくい遺跡からの出土であり、猿投窯の製品の中で、地方に移出されたものの中では古い段階のものであり、分布としては北限にあたると思われる。

グリッドからの出土であるが金銅製と考えられる飾り金具（第19図18）も出土している。帰属する詳しい年代は不明だが、遺物自体は古代の範疇でとらえて良いものと考えられる。

各遺構出土遺物の年代に関しては、岩見・能登谷・船木の編年（1988）に当てはめると、ST38は西暦800年前後（原始灰釉陶器を根拠とする）～９世紀第１四半期と考えられる。須恵器坏はほとんどが回転ヘラ切りで一部回転糸切りを含む。体部は直線かやや外反し底径が大きい。蓋は天井部が平らで口端が直立し、切り離しは回転ヘラ切りが多い。ST43は９世紀第２四半期と考えられる。須恵器坏の器形はＳＴ38に似るが、底部切り離しは回転糸切りになる。ST39は９世紀第４四半期と考えられる。須恵器坏の底部切り離しは全て回転糸切りになり、底径・器高が小さくなり口径が大きくなる。体部は内湾気味に立ち上がる。口端が外反傾向にあるが、一部は丸みを帯びるものがある。体部に歪みがあるものが出てくる。蓋はナデ肩状の体部になりになり、口端が折り曲がる。切り離しは糸切りになる。ST12の須恵器坏・高台付坏の一群は９世紀末～10世紀初頭と考えられる。ST39の須恵器坏

表—10　各遺構土器組成表

注1)扱った資料の出土地点・層位は遺構ごとの項目に示した。ST38・39の覆土は、覆土下層と床面直上出土の資料点数である。ST12出土遺物は一括遺物と考えらるが、床面と覆土に分けて示した。
注2)数字は出土した個体の点数で、(　)の数字は、破片のため全体の形は不明だが、推定される器種に分類し点数を数えたものである。

土器分類		遺構	ST38 床面	ST38 覆土	ST38 ピット	ST43 床面	ST43 カマド	ST43 ピット	ST40 床面	ST40 カマド	ST40 土坑	ST37 床面	ST37 カマド	ST37 ピット	SX20 覆土	ST61 カマド	ST39 床面	ST39 覆土	ST39 カマド	ST12 床面	ST12 覆土	ST10 床面	SK9 床面
須恵器I	A	1a	1						(1)														
		1b													2(1)								
		2a		1																			
		2b				2		(1)									3		1	2	2		
		3b		1													1						
		5b				1											3			1	14		
		6a				1																	
		6b				(1)																	
		7b																			1		
	B	1b															1						
		3b																		2	4		
		5a									1												
	C	1a	2	2																			
		1b												(1)	1		(1)						
		2a	1																				
		3b														1	2(2)	1					
		4b															1						
		6b							1														
		7																		1			
	D	1		1																			
		2							1														
		3b							2														
	E																		1				
	F	2																					1
	G	1b		1																			
		2		1																			
		3							1														
		4b										1											
	H	2										(1)			1								
		3																				1	1
土師器II	A	1				1																	
		2b																			1		
		3b																		1			
	B	1b																		1	1		
	C	1	1																				
	D	1							1														
		2	1																				
		4			(1)																		
		5			2	1										1							
赤焼土器III	A	1																					1
	D	1b					1			1			(1)						1	(1)		1	
		2				1									(1)		2						
		6							1														
		7																		1			
		9															1						
		11	1						1														
		12															1						
	E						1																
	G	1					1													1			
		2																		1			
		3																		1			

よりも底径が小さく、体部が内湾気味に立ち上がり口端が外反する傾向が強まる。高台付坏も体部が内湾気味に立ち上がり、口端が外反傾向にある。内面を黒色処理した大型の土師器坏が伴うと考えられる。

3、遺跡の性格について

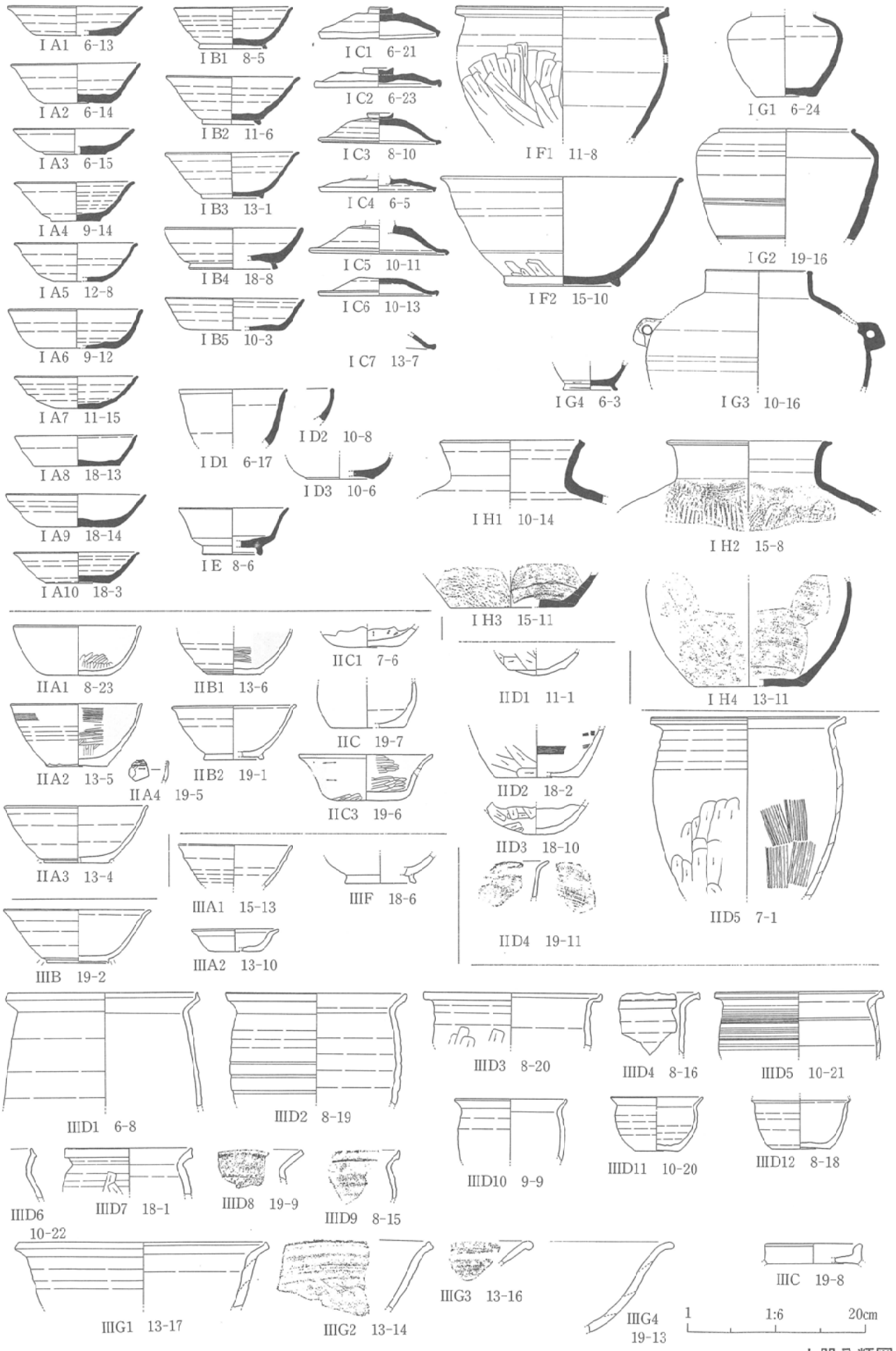
遺跡が山間の谷間の地滑りが起きやすい所に立地することから、農村集落とは考えにくい。周囲に登り窯を築くのに適した斜面があることや、ST38からロクロピット(EP49)と考えられる遺構の存在を考えると、近くに登窯の存在も考えられる。

奈良時代から平安時代にかけての一大須恵器生産窯である平野山古窯跡群にも近いことから、須恵器工人に関係のある遺跡と考えられ、しかも飾り金具や、猿投産の原始灰釉陶器が出土していることから官衙と密接に結びついていたと考えられる。また本遺跡の約1.2km南東に位置する木ノ沢楯跡からも9世紀代の小規模な竪穴住居4棟が確認されており、時期的には富山2遺跡と併行か近接した時期と考えられる。

富山2遺跡・平野山古窯跡群（あるいは未発見の須恵器窯）のそれぞれの遺跡は、須恵器生産を媒体として須恵器の成整形・須恵器の焼成といった機能を各々分担し、密接に関連して存在していたということが言えるだろう。

〈参考文献〉

佐藤庄一他「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1979
佐藤庄一他「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1980
手塚　孝他「笹原遺跡発掘調査報告書」まんぎり会・米沢市教育委員会1981
斎藤孝正編「愛知県古窯跡群分布調査報告書（III）」愛知県教育委員会1983
渋谷孝雄「境田C'・D遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1984
長橋　至「不動木遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1986
佐藤正俊・渋谷孝雄「達磨寺遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会1986
岩見誠夫・能登谷宣康・船木義勝「山形県の須恵器及び須恵器窯の編年」
山形考古第4巻第2号　山形考古学会1988
坂井秀弥他「新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀II遺跡」新潟県教育委員会1989
手塚孝・菊池政信「大浦　大浦B遺跡発掘調査報告書」米沢市教育委員会1993
山田邦和編「平安京出土土器の研究」（財）古代學協會・古代學研究会1994
古代の土器研究会編「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3施釉陶器－」
古代の土器研究会1994
「木ノ沢楯跡調査説明資料」財団法人山形県埋蔵文化財センター1996


I A1 6-13
I A2 6-14
I A3 6-15
I A4 9-14
I A5 12-8
I A6 9-12
I A7 11-15
I A8 18-13
I A9 18-14
I A10 18-3
I B1 8-5
I B2 11-6
I B3 13-1
I B4 18-8
I B5 10-3
I C1 6-21
I C2 6-23
I C3 8-10
I C4 6-5
I C5 10-11
I C6 10-13
I C7 13-7
I F1 11-8
I F2 15-10
I G1 6-24
I G2 19-16
I G3 10-16
I G4 6-3
I D1 6-17
I D2 10-8
I D3 10-6
I E 8-6
I H1 10-14
I H2 15-8
I H3 15-11
I H4 13-11
II A1 8-23
II A2 13-5
II A3 13-4
II A4 19-5
II B1 13-6
II B2 19-1
II C1 7-6
II C 19-7
II C3 19-6
II D1 11-1
II D2 18-2
II D3 18-10
II D4 19-11
II D5 7-1
III A1 15-13
III A2 13-10
III B 19-2
III F 18-6
III D1 6-8
III D2 8-19
III D3 8-20
III D4 8-16
III D5 10-21
III D6 10-22
III D7 18-1
III D8 19-9
III D9 8-15
III D10 9-9
III D11 10-20
III D12 8-18
III G1 13-17
III G2 13-14
III G3 13-16
III G4 19-13
III C 19-8
1 1:6 20cm

土器分類図

報告書抄録

ふりがな	とやま にいせき はっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山２遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第41集
編集者名	鈴木良仁・須賀井明子
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL0236-72-5301
発行年月日	西暦1996年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
富山２ とやまに	山形県 やまがたけん 寒河江市 さがえし 大字谷沢 おおあざやざわ 字富山 あざとやま	6206	平成７年度登録	38度23分15秒	140度13分18秒	19950717～19950812	1,300	東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富山２	集落跡	奈良時代		須恵器（坏）	
		平安時代	竪穴住居跡　８棟 土坑　16基 畝跡　３群	須恵器（坏・蓋・高台付坏・甕・原始灰釉陶器水瓶） 土師器（坏・甕他） 赤焼土器（坏・高台付坏・甕・鍋他） 金属製品（鉄製刀子・金銅製飾り金具） 木製品（櫛）	丘陵谷間の小さな平坦地に立地し、８棟の竪穴住居跡を検出した。ロクロピットを持つ住居跡があることや、住居跡がやや小振りなことを考えると特異な遺跡であるといえる。また猿投窯産の折戸10窯式の原始灰釉陶器（水瓶）が出土した。

図　　版

富山2遺跡遠景（南から）

富山2遺跡近景（南西から）

図版2

調査前状況（東から）

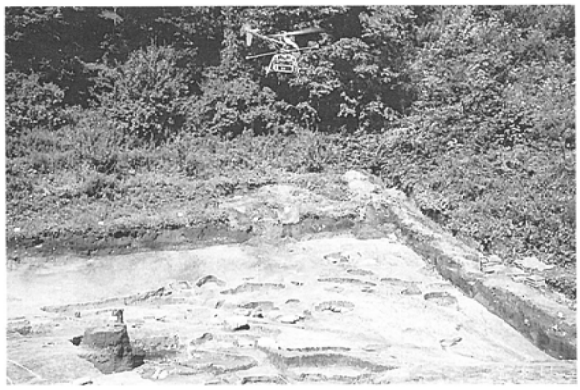
鍬入式風景（西から）

重機作業風景（西から）

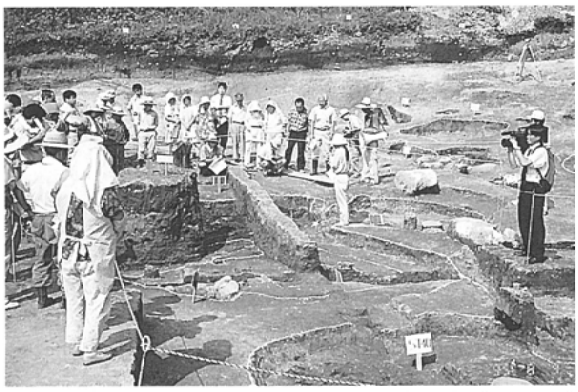
粗掘作業風景（南から）

実測作業風景（西から）

遺構精査作業風景（南から）

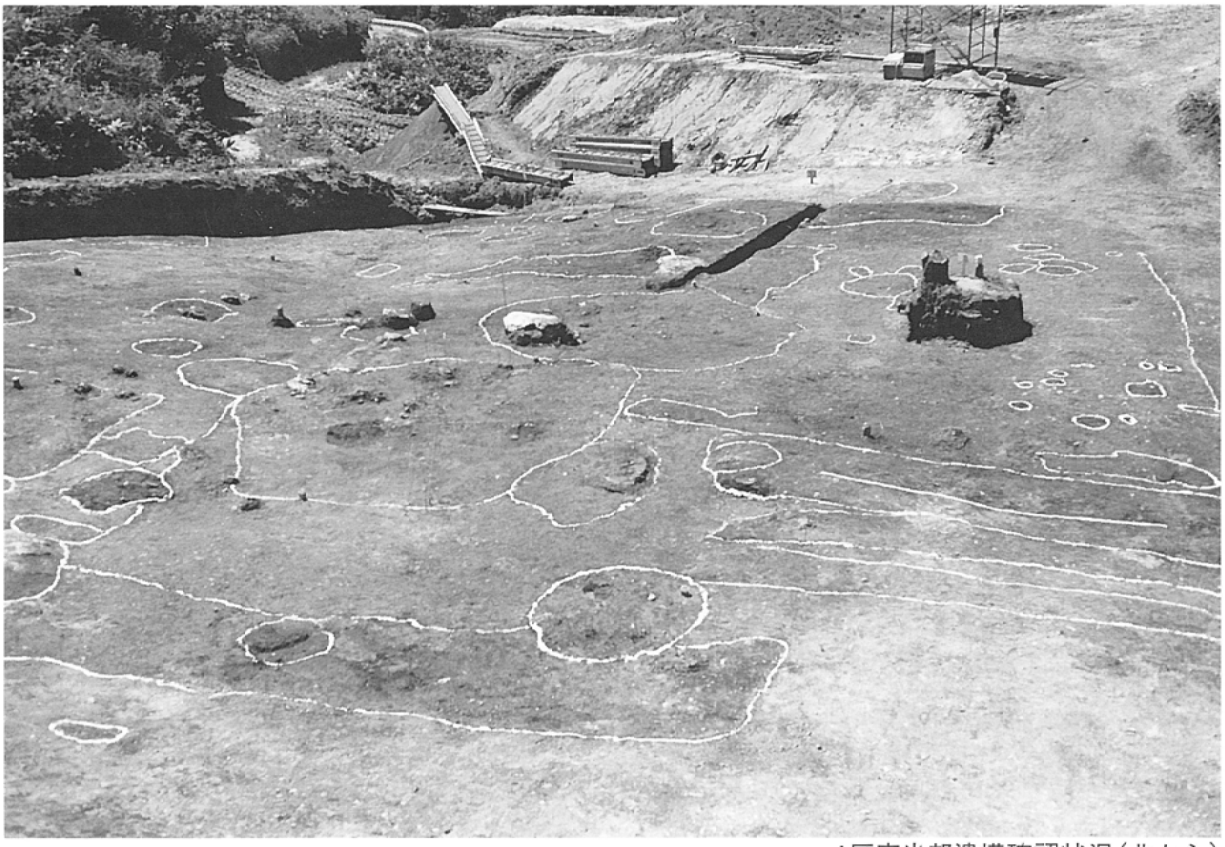


空中写真撮影風景（西から）



現地調査説明会風景（西から）

遺跡基本層序（南から）

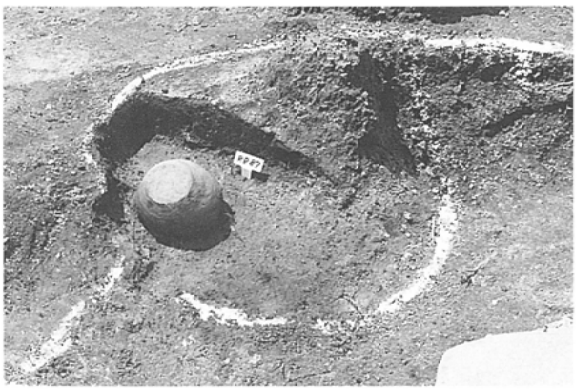


A区東半部遺構確認状況（北から）

ST37～40・43住居跡空中写真(手前が南東)

SX20性格不明遺構プラン検出状況(北から)

ST37住居跡プラン検出状況(南から)



ST37　EL42カマド跡RP87(6-11)出土状況
(東から)

ST37住居跡完掘状況(南から)

ST38住居跡炭化材出土状況(北西から)

ST38　RP79・91・92(7-9)出土状況(南から)

ST38住居跡柱穴検出状況(西から)

ST38　EP49ロクロピット完掘状況，RP124(7-10)出土状況(西から)

ST38住居跡完掘状況(北西から)

ST39住居跡床面焼土RP69(8-9)出土状況(東から)

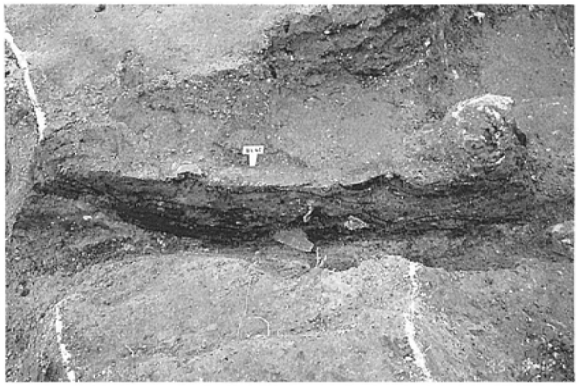
ST39　EL41カマド跡土層断面(西から)

ST39住居跡床面RP115(8-5)上・116(7-15)下
出土状況(南から)

ST39住居跡柱穴検出状況(北西から)

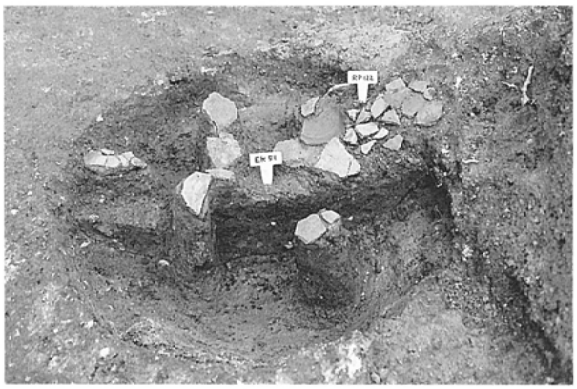
ST39住居跡全景(西から)

ST43・39遺物出土状況(北から)



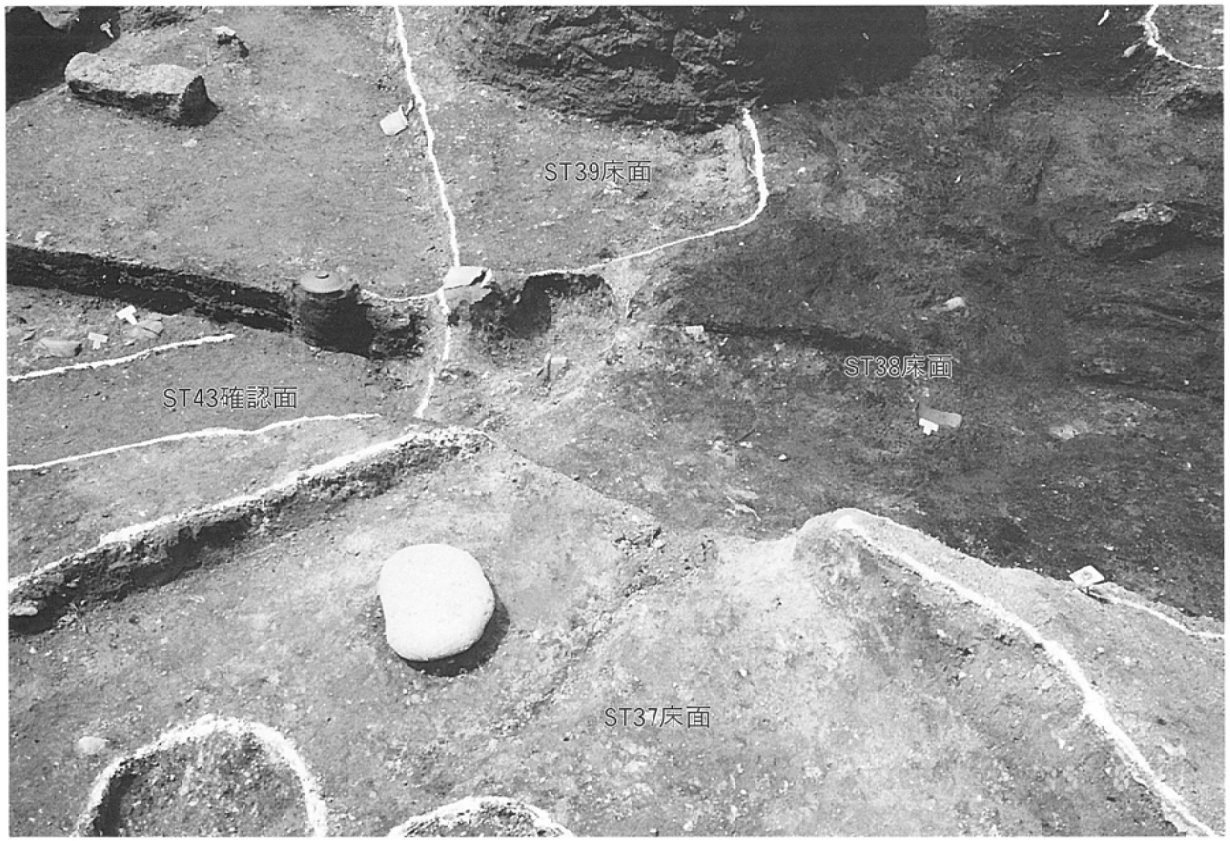
ST43　EL45カマド跡土層断面(東から)

ST43住居跡確認状況(東から)



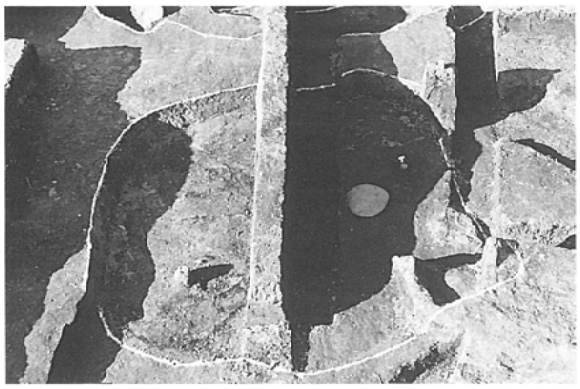
ST43　EP51土層と遺物出土状況(南西から)

ST43住居跡完掘状況(東から)



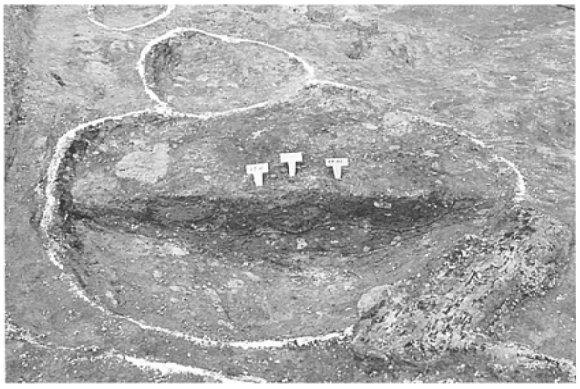
ST37～39・43竪穴住居跡重複状況(東から)

EL41(ST39)・EL53(ST61)カマド跡重複状況(南から)



ST40住居跡焼土検出状況(南西から)

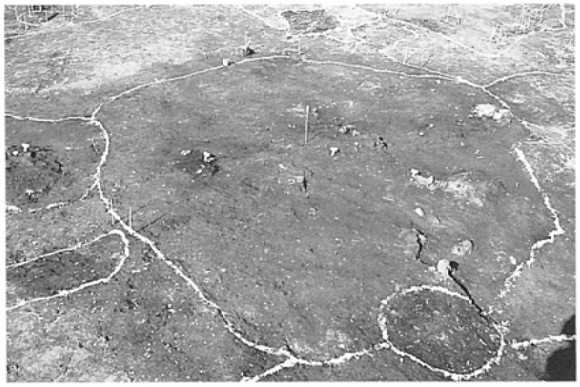
ST40　EL46カマド跡RP120(10-18)出土状況
(北東から)



ST40　EK47土層断面と炭化材(南西から)

ST40　EL46カマド跡土層断面(東から)

ST40住居跡柱穴検出状況(南西から)



ST10住居跡検出状況(西から)

ST10住居跡南側土層断面(北西から)

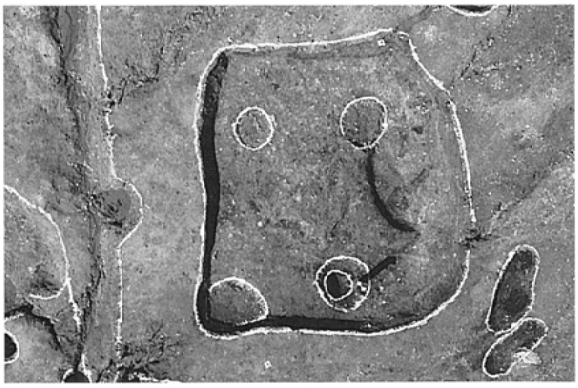
ST10住居跡完掘状況(北から)

ST10住居跡西側土層断面(南西から)

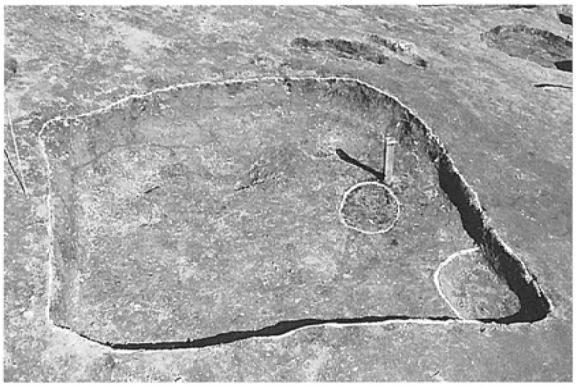
ST10・12住居跡完掘状況(手前が南西)

ST12住居跡検出状況（南から）

ST12住居跡土層断面（西から）

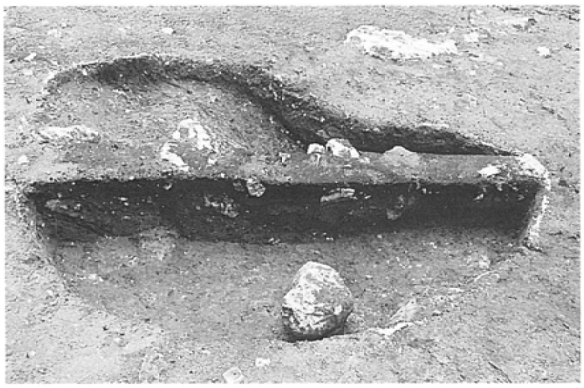


ST12住居跡完掘状況（手前が南）

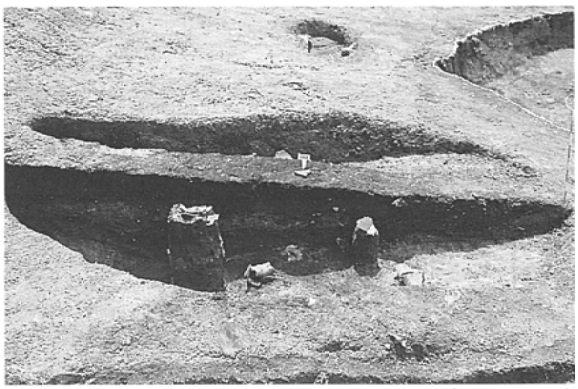


ST12住居跡完掘状況（西から）

ST12住居跡遺物出土状況（南から）



SK4土坑土層断面(北から)

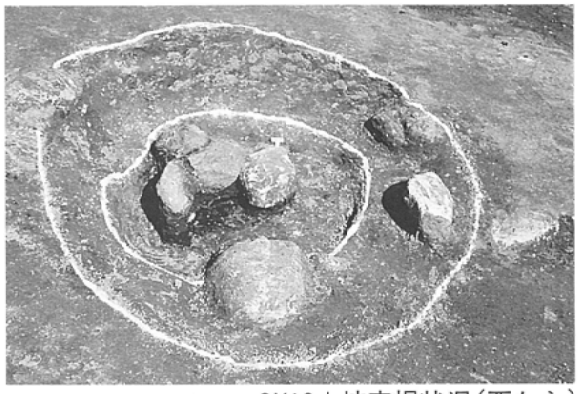


SK5土坑土層断面(北西から)

SK14土坑土層断面(西から)

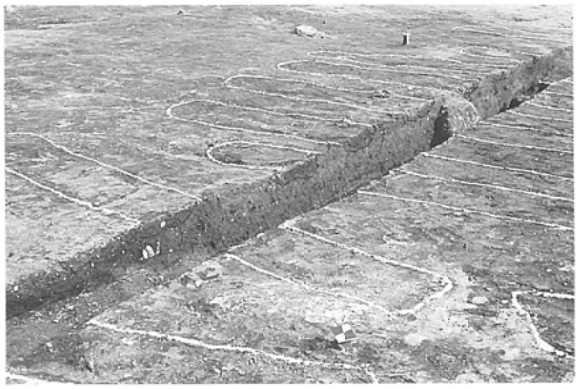
SK30(左)・29(右)土坑半裁状況(南西から)

SK9土坑検出状況(北西から)



SK19土坑完掘状況(西から)

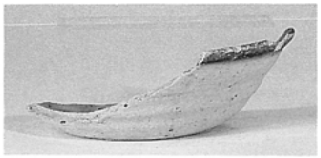
畝跡検出状況(東から)



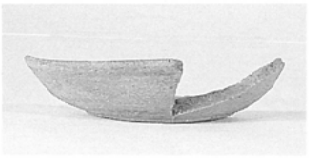
畝跡土層断面(北西から)

B区SDI溝跡全景（東から）

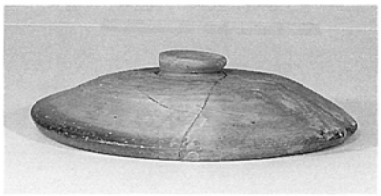
SDI溝跡土層断面（南から）

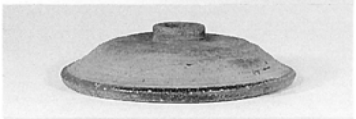

6-14

6-13


6-15

6-3

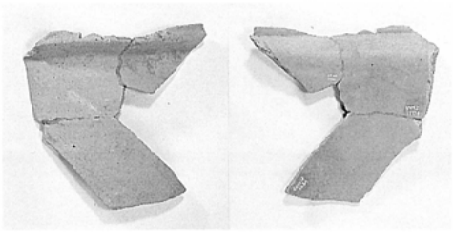

6-19



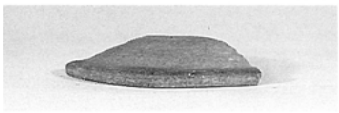
6-23

6-22

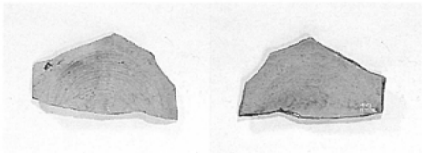
6-21

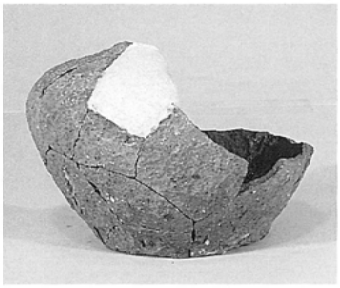

6-8

6-5


6-6

6-11


6-2


6-24

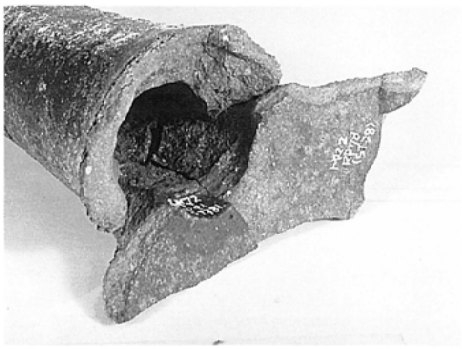
6-10

6-9

6-12

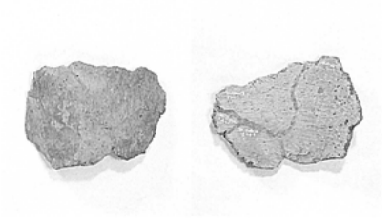
6-7

7-1

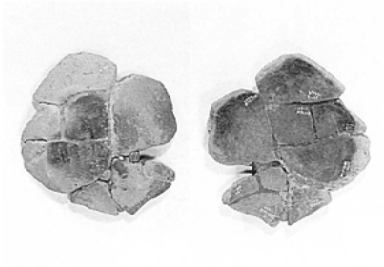


7-9　頸部と胴部の(接合状態)

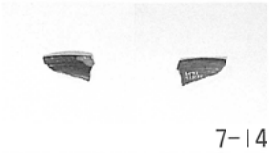
7-2



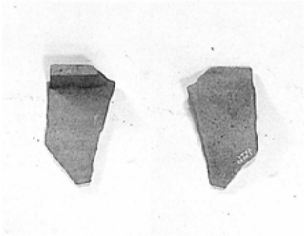
7-8



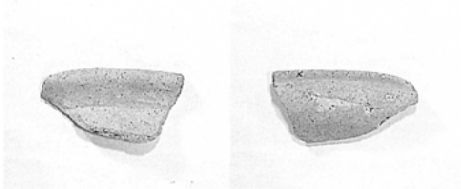
7-6



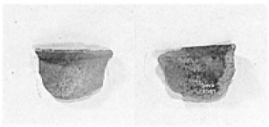
7-14



7-5

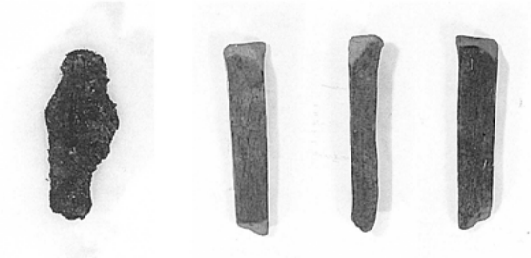


7-4

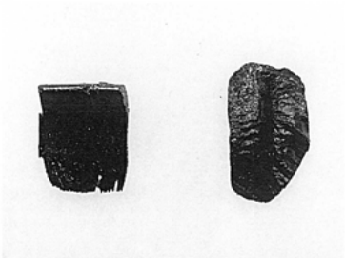


7-3

7-7



7-11　7-10



7-12　ST38床面出土

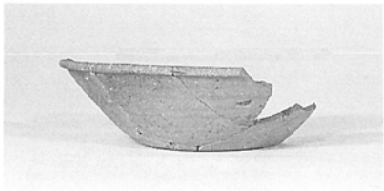
7-15

7-16

7-17

7-18

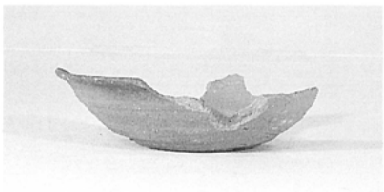
7-19



8-1

8-2

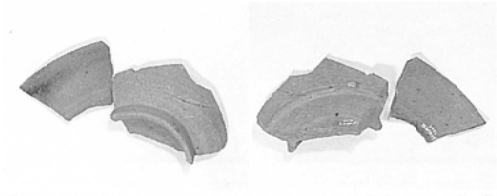
8-3



8-4

8-5

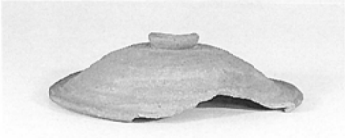
8-6


8-7

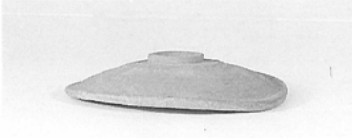
8-12

8-10

8-9



8-14



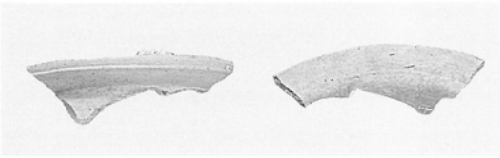
8-13

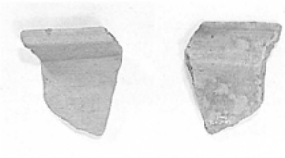
8-11

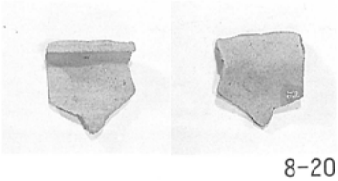
8-19

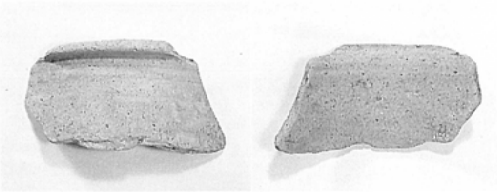
8-18

8-21

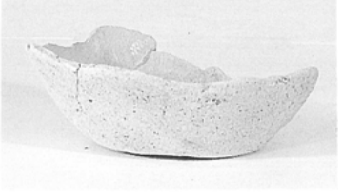

8-16

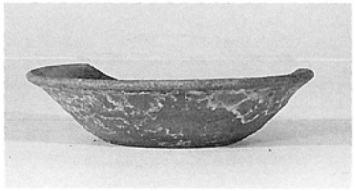

8-17

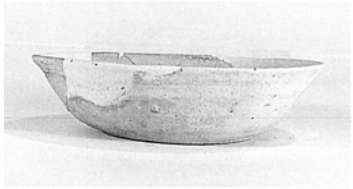

8-20


8-22

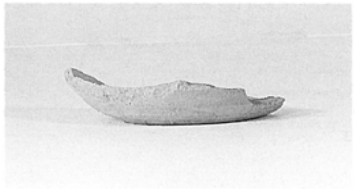
8-8


8-23

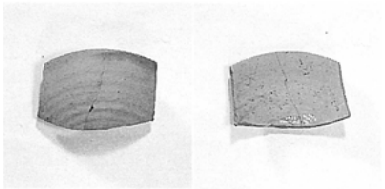

9-1


9-2

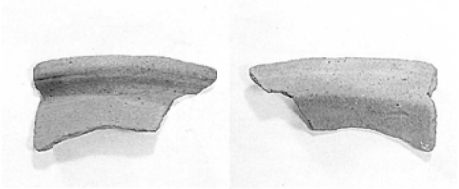
9-3

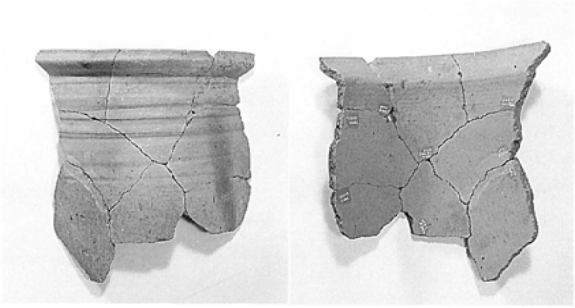

9-5

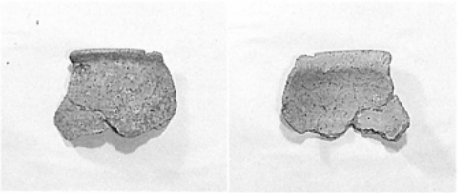
9-14

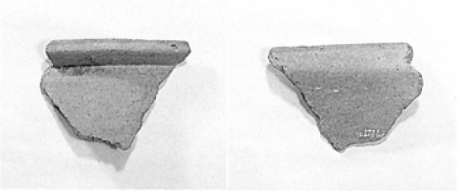

9-16

9-12

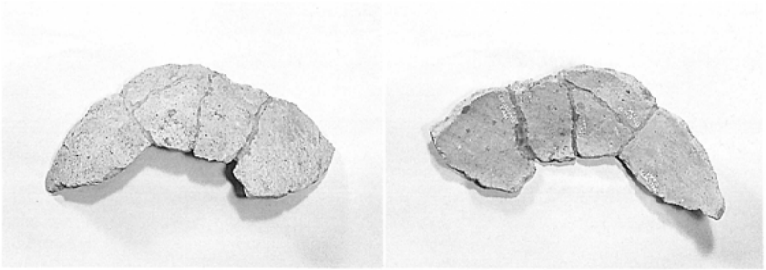

9-6


9-8


9-9

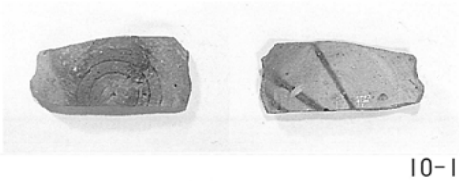

9-17

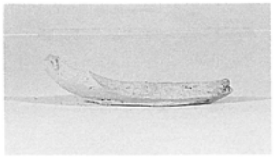
9-10

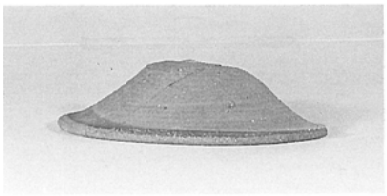

9-11

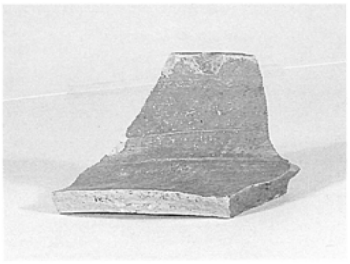
10-10

10-9


10-1


10-6

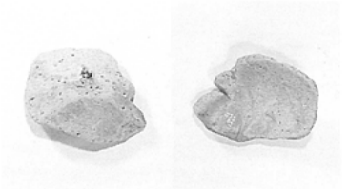

10-11

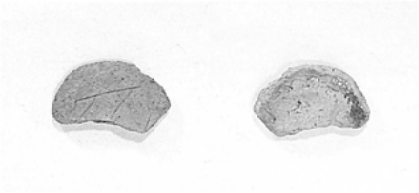

10-14

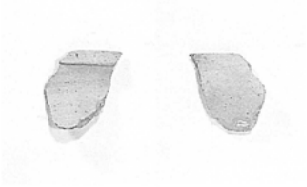
10-7

10-17

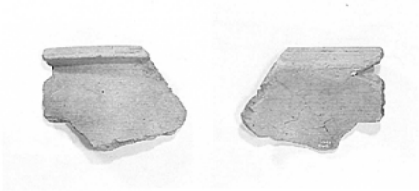
10-15


10-23


10-24

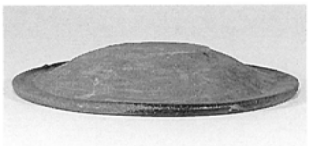

10-22

10-25

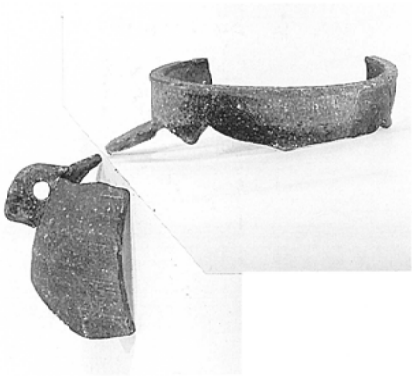

10-21

10-19

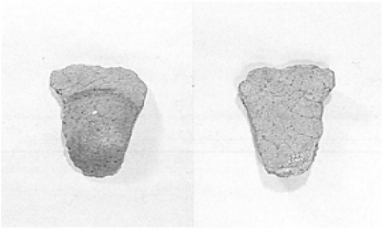
10-20



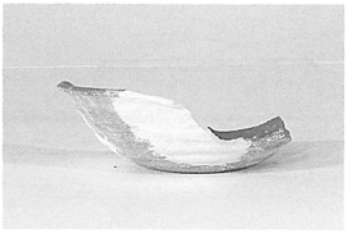
10-13


10-16

10-18

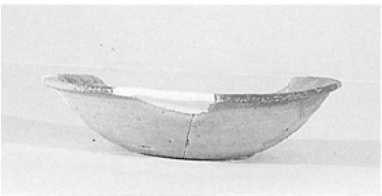


11-1

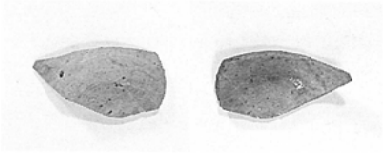


11-3

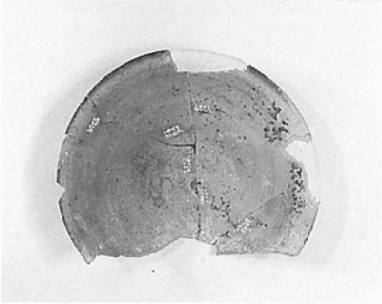
11-6



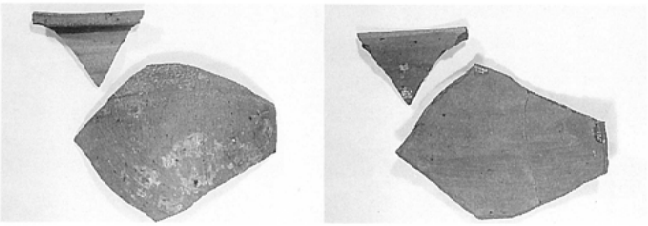
11-4



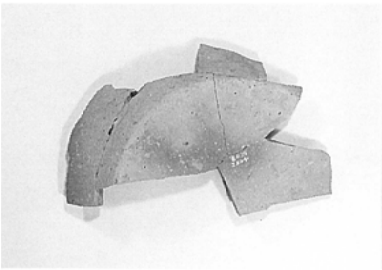
11-5

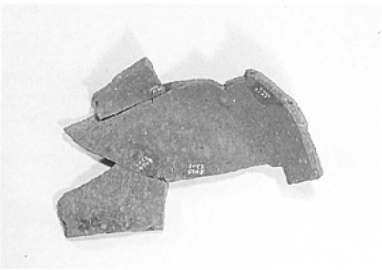


11-2



11-8



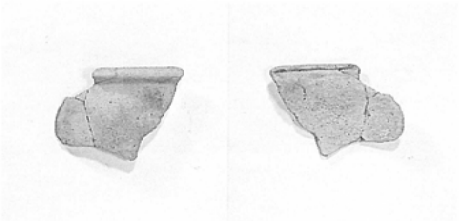


11-7

11-9

11-11

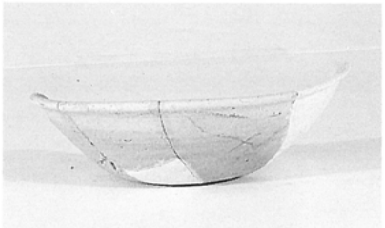
11-15



11-10

11-12

11-13



11-14

12-1

12-2

12-3

12-4

12-5

12-6

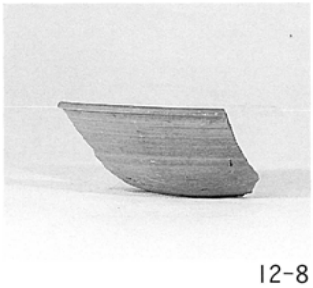
12-7

12-9

12-10

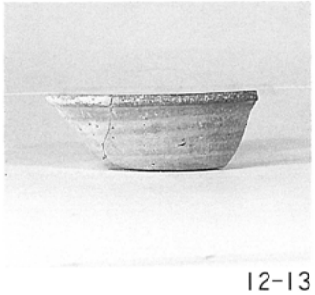
12-11

12-12


12-8

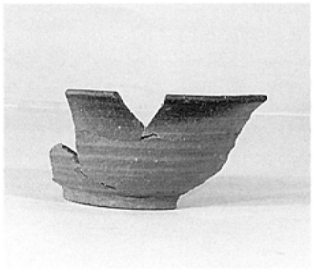
12-14

12-15


12-13

12-16

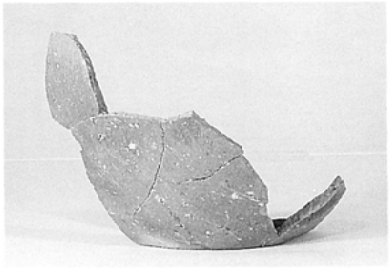
12-17

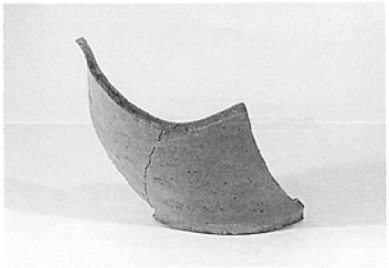

12-18

13-3

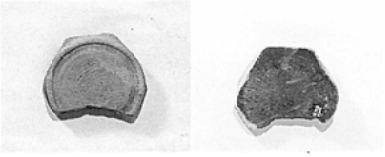
13-1

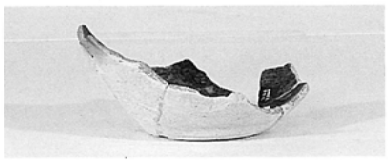
13-2


13-11


13-9

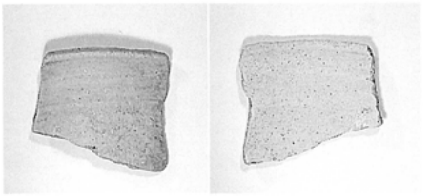
13-4


13-8


13-6

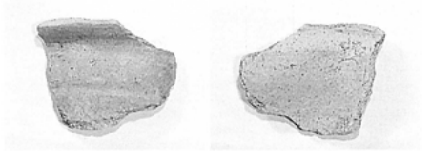
13-12

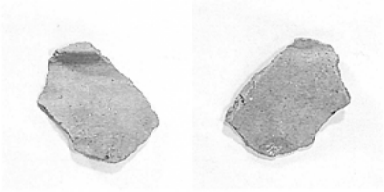
13-10


13-14

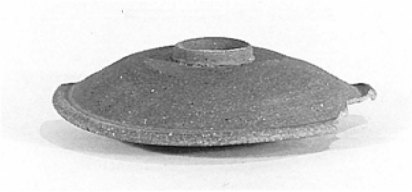
13-15

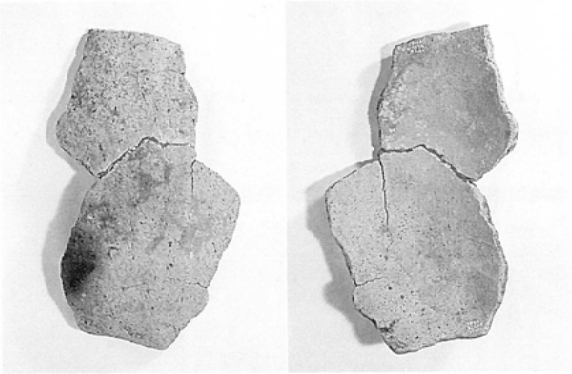
13-16


13-17

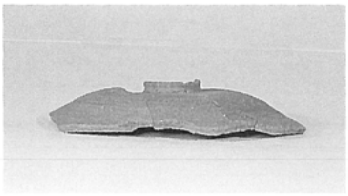

13-13

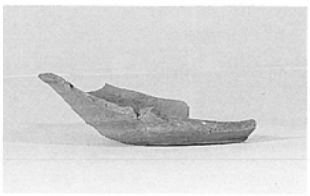
13-5

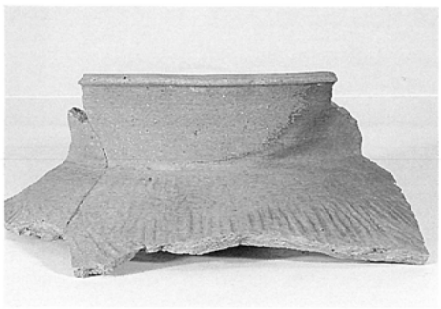

15-1

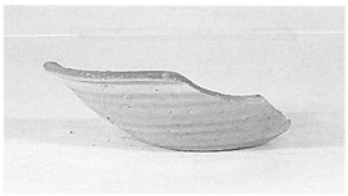

15-3

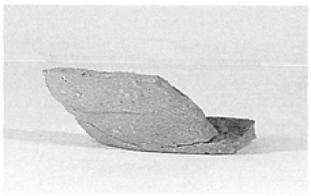
15-2

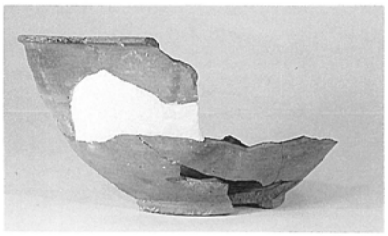

15-7

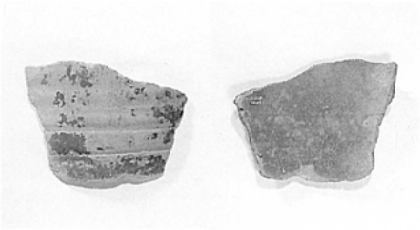

15-5

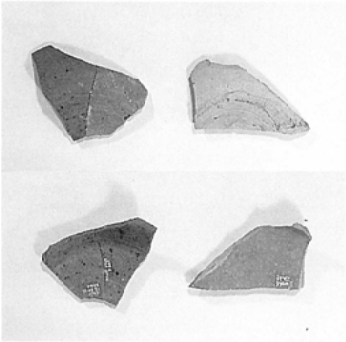

15-8

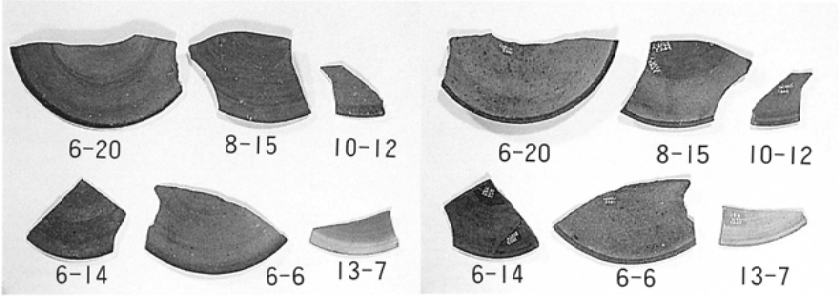

15-12

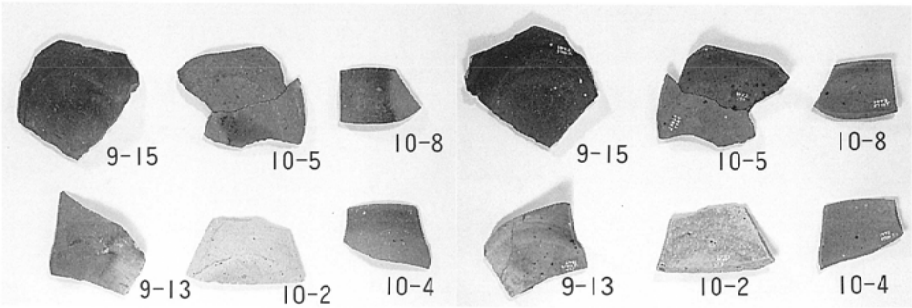

15-11

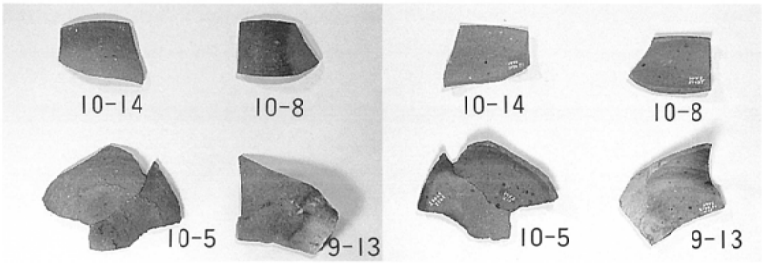

15-10

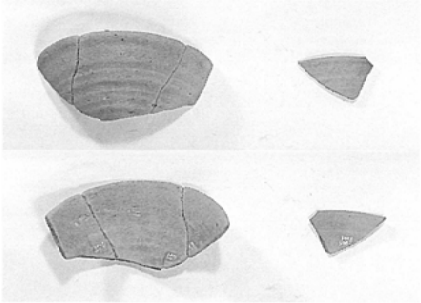

15-9

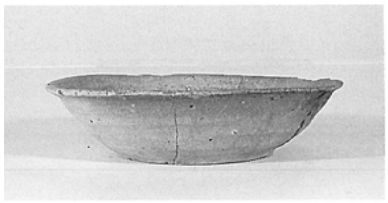

10-6 10-3

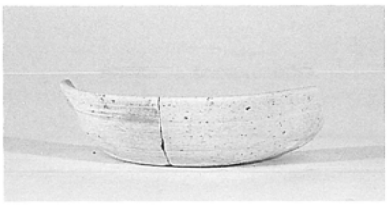


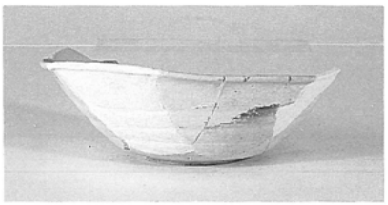


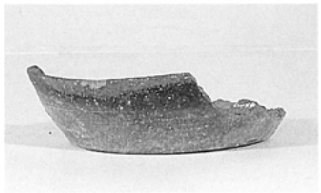


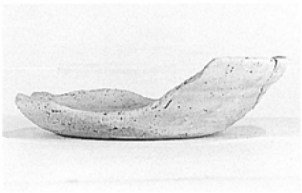

15-3 7-13

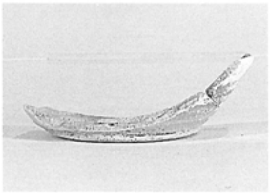

18-3


18-4

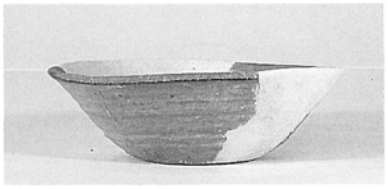

18-17

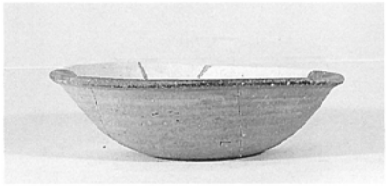

18-1

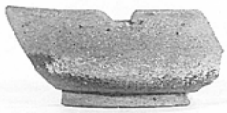

18-14

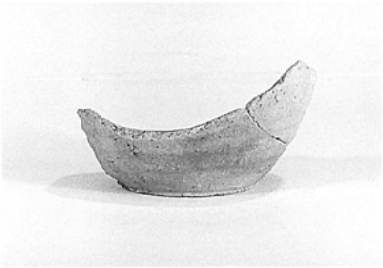

18-15

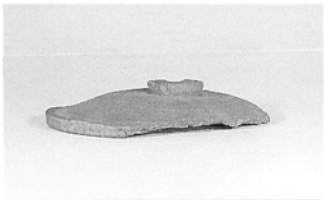
18-11

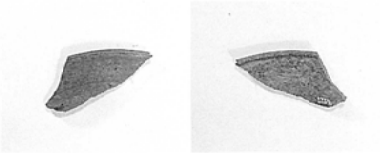

18-19

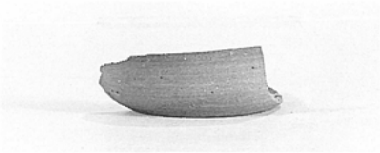

18-18

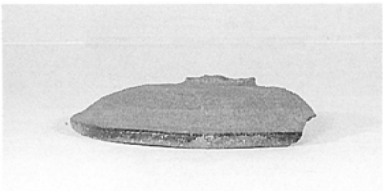

18-8


18-12



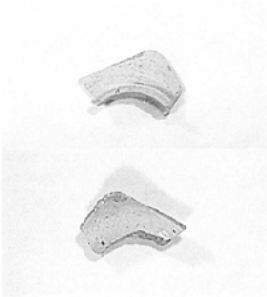

18-5


18-16


18-21

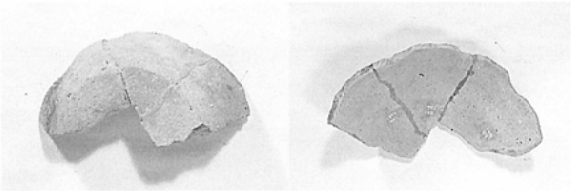
18-20

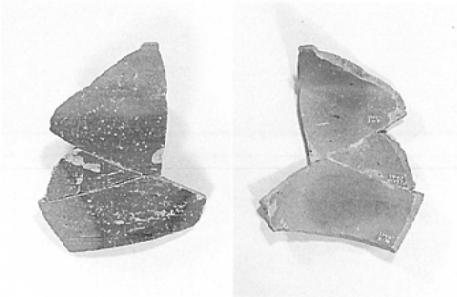
18-9


18-6

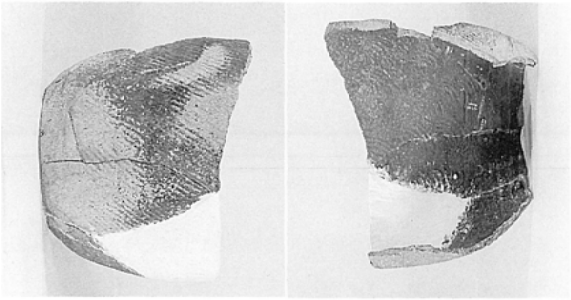
18-1

18-10

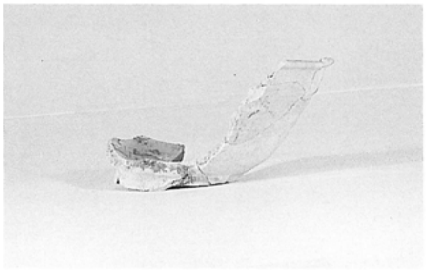

18-2



19-16

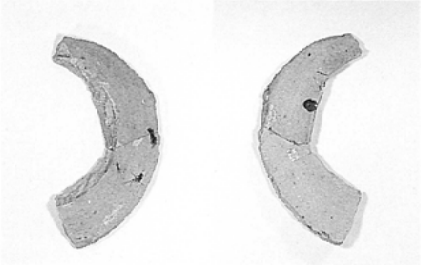


19-17



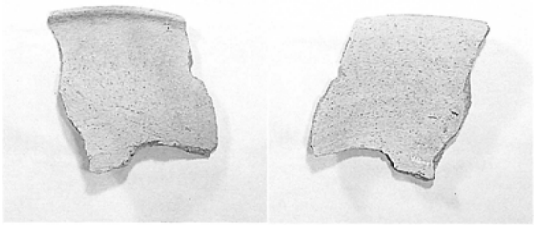
19-1

19-4

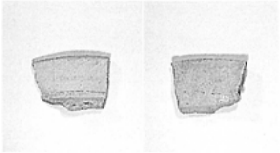


19-14

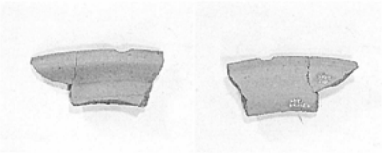
19-2



19-13



19-9

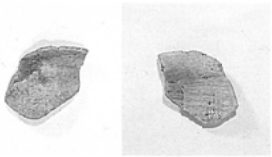


19-10

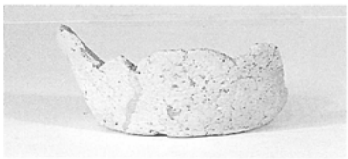
19-15

19-3

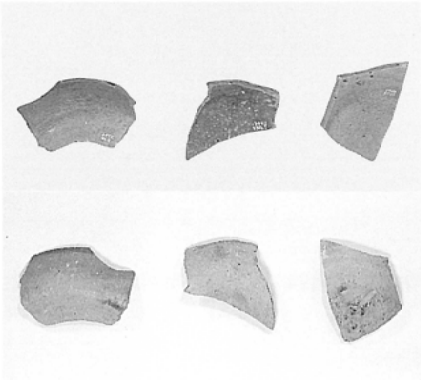
19-6



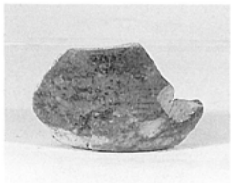
19-11



19-12



18-7　9-4　15-6



19-7

19-18

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

富山(とやま)2遺跡発掘調査報告書

1996年9月30日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　0236-72-5301
印刷　藤庄印刷株式会社